

同人誌(2015年版下半期)

風 狂

風 狂 の 会

詩

WA・TA・SHI	出雲筑三	(2015年12月登録)
むずかる子	なべくらますみ	(2015年12月登録)
横浜の夜	高村昌憲	(2015年12月登録)
絶対の探求	原 詩夏至	(2015年12月登録)
天狗様	なべくらますみ	(2015年11月登録)
暴力と戦争	高村昌憲	(2015年11月登録)
認知症	高村昌憲	(2015年10月登録)
もの造り	出雲筑三	(2015年10月登録)
新しい休日	なべくらますみ	(2015年10月登録)
ある日	中平 耀	(2015年9月登録)
海と太陽	高村昌憲	(2015年9月登録)
護送	なべくらますみ	(2015年9月登録)
国勢調査	原 詩夏至	(2015年9月登録)
女優	なべくらますみ	(2015年8月登録)
夏の日のお話	原 詩夏至	(2015年8月登録)
夏が過ぎる	高村昌憲	(2015年8月登録)
墓参り（暗黒宇宙篇）	原 詩夏至	(2015年7月登録)
夢に侵入されて	なべくらますみ	(2015年7月登録)
美しい道	高村昌憲	(2015年7月登録)

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（一）	三浦逸雄	(2015年12月登録)
------------	------	--------------

評論

知性と野生の交響（一）	北岡善寿	(2015年10月登録)
知性と野生の交響（二）	北岡善寿	(2015年11月登録)
知性と野生の交響（三）	北岡善寿	(2015年12月登録)
日くつきの座談会から（三）	北岡善寿	(2015年7月登録)
日くつきの座談会から（四）	北岡善寿	(2015年8月登録)
日くつきの座談会から（五）	北岡善寿	(2015年9月登録)

エッセイ・随筆

美しい土地、美しい人（三）	宿谷志郎	(2015年7月登録)
美しい土地、美しい人（四）	宿谷志郎	(2015年10月登録)
新横浜風俗	神宮清志	(2015年12月登録)
コンピューター・リテラシー	神宮清志	(2015年11月登録)
やめてはならない	神宮清志	(2015年10月登録)

放浪の旅（一）	神宮清志	（2015年8月登録）
放浪の旅（二）	神宮清志	（2015年9月登録）
この愚行を嗤えるか	神宮清志	（2015年7月登録）

翻 訳

アラン『わが思索のあと』（十七）	高村昌憲訳	（2015年12月登録）
------------------	-------	--------------

執筆者のプロフィール

わたしの手当は月二十五万円
月四百時間働いて二年で主任になりました
来週からチップ交換と定期点検で休みます

今や日本の人口は七千万人
私達は毎年百万ずつ生産されて今年で一千万
無口な上司も同じクリーンルーム生まれです

センターに帰ると猫のグーグが玄関で迎えてくれます
可愛いグーグは私よりステージが高く優秀
一瞬の眼の動きで何でも判るのです

明日定年退職するSさん
アナタと知り合って嬉しかったと涙され
何でもいつでも聞いてあげますよと答えました

今日はヒトと話したので
これからブルー波のシャワーを浴び
シンフォニーを聞きながら充電します

さっきから泣いている子
向かいの家から聞こえて来る
あの子の声

昨日は母親の自転車を先導するように
りりしくも ヘルメットのあご紐を絞め
小さな自転車で 朝早い時間 保育園へ向かったのに

どうしたの？
少し眠り足りないの
牛乳がちょっと熱かったの
新しいパンツのゴムがきつかったのかな
それとも 一生懸命早くしているのに
早くしなさい なんておかあさんに言われてしまったのか

自分がなんで泣いているのかを忘れてしまって
ただ 泣くことの快樂に耽っているのか
もしかして
忙しげな母親の注意を引きたくて
泣いたふりをしているのか

そうだ それが一番いい
今の時間 十分に甘えるがいい
君がお母さんに甘えられる時間は
そう長くはないのだから

まだ大丈夫だ
もう少し泣いてて いいよ

今は父も母もいない兄弟だから
せめてお正月くらい会いたいね
そんな約束が無意識のうちから
出来上がった二つ違いの兄弟船

だけとお正月は忙しい時だから
ゆっくりお酒を飲む時間もなく
慌ただしく車を運転して帰るから
思い切って十一月に泊まりに行く

二人だけの兄弟の家族と家族の再会
会ったのは夫婦が四人に子供が三人
横浜のSホテルで一泊しての集い
その代わりに会うのを止めた新年

妻たちにも知らなかった男兄弟の本性
良いも悪いもこれが一番長い付き合い
死んだ道楽者の父を肴にげらげら笑う
常に我が子が全てであった母の気遣い

二人きりの兄弟でもお互いこの日まで
知らないで来た話があるこれ出たから
それだけでも意義深い横浜の夜なので
恥に躓いても来年も見るぞ感謝の夜空

昔、ある武士道の思想家が
きらきら輝く
澄んだ瞳で
高弟たちに
こう述べたそうだ――

君主は 名君であってはならない
何故なら 君主が名君だったら
君主を愛し 君主に忠義を尽くすなど簡単
殊更 忠臣の出る幕はない
君主は むしろ暴君のほうがいい
何故なら 国をも民をも思わず
苛斂誅求 酒池肉林の
暴虐淫蕩の君主に
それでも忠義を尽くすものこそ 真の忠臣
農民は殺され 国土は荒廃し
妻女は犯され 佞臣は愛され
それを諫めた 忠臣の自分は
却って憎まれ 濡れ衣を着せられ
処刑された上 家は断絶になっても
その暗い闇夜に それでもなお
一筋 忠義という名の流星が輝くなら
それこそ 明るい真昼には決して見られぬ
〈絶対忠義〉ではないのだろうか と……

俺は 〈絶対〉の探求に憑りつかれた
この狂気の思想家の 孤独を思った
彼も 初めは 自分の一途に求める
忠義の理想が こんなディストピアに
行き着くなんて 思いもしなかったろう
かつて 革命の理想を信じた
一途な青年たちが 旧ソ連の収容所や
ポルポト政権下の死体の山や
あさま山荘の泥沼の内ゲバを
最初から 予想してなどいなかったように……

恐らく 彼も 昔は フツーに
善政を願い 名君を待望し

君臣心を一つに日々邁進する
フツ一の幸福を心に抱いた
フツ一の 真面目な好青年だったのだ
しかし 名君は いつまでも出ず
だから 善政も いつまでも行われず
しかも かとって
今更 悪政に与する佞臣になるのも
耐えられなかった彼は
或る朝 自分がもう すっかり
待ちくたびれていることに気づいてしまったのだ

名君など もう決して現れない
善政など もう決して行われぬ
だったら 俺の信じる忠義の理想は
そんな時代の絶望にも耐えられる
鋼鉄の 血も涙もない理想に生まれ変わらなければ…
そう思い詰めて
彼は まだ自分の心の隅に残っていた
柔らかい 傷つきやすい うぶな心
今でも ナイーブに
善政を願い 名君を待望し
君臣心を一つに日々邁進する
フツ一の幸福を諦めきれぬ心を
〈希望〉を
弱さと呼んで 愚かさと呼んで 甘さと呼んで
殺してしまったのだ
それしかないのだ と 自分に言い聞かせて……

ちなみに その思想家は その後 どうなったか？
彼の 絶望の 絶望の果ての 最後の
血を吐くような言葉が 天に届いたのか
その 異様にぎらぎらした その思想は
たちまち 多くの青年や君主の眼を捉えた
しかし 彼らの眼が捉えたのは
結局 彼の〈絶望〉ではなかった
まず 君主たちは 彼の思想に
自分たちに 信じられないほど都合のいい
まさに奇跡のような〈御用哲学〉を見た
彼らは浮かれ騒ぎ 調子に乗り
一方では 彼の思想に
わざとらしい感銘の涙を振り絞ってみせつつ

返す刀で 「それでは……」 とばかりに
もう 今度こそ誰にも止められない
暴虐淫蕩のやりたい放題
それまで まだ少しは残っていた
最後の良心と自制のブレーキまで
すっかり投げ捨て忘れ去ってしまった
他方 青年たちは 彼の思想に
〈絶望〉どころか 〈希望〉を見てしまった
というより 実際 彼の思想が開けてしまった
パンドラの箱から飛び出た 無数の架紂の
跋扈跳梁する この世の生き地獄で
それでもなお 唯一持てる 〈希望〉 など もう
「暴政こそが 忠義の輝く闇」という
狂った思想の 狂った輝きに
狂ったように 没入する以外
本当に なくなってしまったのだ

或る朝 彼は 自分が 今度はもう すっかり
飽き飽きしていることに 気がついてしまった
彼は 白装束で参内し 主君の暴政を厳しく諫めた
もちろん 彼はその場で捕縛された
「嘆かわしい！ この男は
何と 自分の高邁な思想を裏切り
名君による 善政を希求する
旧時代の 凡愚な理想へと後退してしまった！」
暴君たちは そう 天を仰いで 殊更に慨嘆した
「見損ないましたよ 先生！
あなたの気高い理想を信じて
暴政の中を 笑って散って行った
仲間たちの命を どうしてくれるのです！」
青年たちは 絶望してそう叫んだ
彼は 武士の身分を剥奪され 家は断絶され
妻と娘は 公衆の面前で犯された上に 遊郭に売られ
息子は目の前で惨殺され 最後に彼自身は
切腹すらも許されることなく
筵の上に引き据えられて打ち首となった
地べたに掘られた穴ぼこに ごろりと転げ落ちた
その生首の 目からは 真っ赤な涙が流れていた
それが 彼がかつて夢見た
暴政の闇夜に皓々と輝く 〈絶対忠義〉 を
自分自身が 遂に体現した

その〈男子の本懐〉の感涙だったのか
ただの無念の涙だったのか
今となっては 誰にも分からない
分かっているのは ただ
その生首を指さしながら
暴君たちが それはもう げらげら
涙が出る程大笑いしたこと
そして 青年たちが 怒り狂って
その生首を 足蹴にしたこと
そのため 最後は その生首は
人間の首だか そこの肉塊だか
わからないほど ぐちゃぐちゃになり
そのため 頬を伝う真っ赤な涙も
地べたの泥や ただの流れた血と
何の区別もつかなくなったこと
それだけだ

午後の駅コンコース
渦巻く音 騒音の極致
その人混みの中を
高らかに 軽やかに聞こえてくる
冴えた音
誰もが音の先を知りたくて振り向く

一本歯の高下駄を履いた
老僧が行く
墨色の袈裟を軽やかにまとって
周囲の目を意識し鼻高々と
人々の間を縫い 向かう
山方面行き特急電車乗り場

そうだ
今日は天狗頼母子講の日なのかもしれない
今のは会場に向かう天狗様だったのか

僧が行くのは
終点駅から乗換えて
さらにその奥の終着駅
山の頂上
天狗たちが飛び交う寺の森

今夜は むささび を従え
狐や 狸 鼬の類を集めて
天狗様
さぞや気分よく過ごすことだろう

男と女がこの世にいるように
世界には暴力で攻撃する人間と
暴力から身を守る人間がいるのに
殆どの人間には聞こえてこない音

銃声も爆音も聞かずにいたから
パリの町を不意に襲った暴力には
思想や信条からも抜け出たもぬけの殻
復讐心だけが闊歩する花の都の中庭

再び蔓延するのか武力だけが正義の戦い
戦争の無い歴史は無いと言う歴史学者
それでは敢えて言おう「戦争反対！」
暴力で攻撃する人間どもなんかは犯罪者

犯罪者に刑を執行するのは戦争ではない
オランダ大統領よ！テレビよ！新聞よ！
もう少し冷静に正確に思考して欲しい
戦争を口にして人気欲しい為政者たちよ！

もう少し暴力から身を守る人間の声を聞け
戦争を口にして利益を上げたい商人たちよ！
もう少し暴力と戦争の相違を考えて書け
新聞記者よ！評論家よ！教授よ！文人よ！

思い出そうとすると黒煙が広がる
分かっていたことが思い出せない
一番多いものは名字と名前である
五十音を順に言っても浮かばない

自分には解けないクイズの答えや
鍵を何処かに仕舞い忘れたように
何処へ行くのか分からないバスや
途中下車ができない特急のように

正常で無いことが起きているのに
慌てず騒がず平静な儘でいる潔さ
真夏の西瓜の味は覚えていたのに
きのう食べた夕食の味を忘れた朝

物忘れとかボケたとか言われても
自尊心は全く傷付かなかったのに
認知症などと言われれば病気かも
そんな不安が悪を招き寄せるのに

単語を忘れれば辞書を引くように
一回だけやるが増えるだけだ
神が不安を無くしてくれるように
死に神のしたり顔に影が射すのだ

もの造りの達人は
愛用の治具を持っている
それは自分の分身

分身は驚くほど大胆に
ものを仕上げていく
彼に雇われている錯覚が心地よい

汗まみれの分身をおくと
光を発している
そっと抱えてみるとえらく軽い

もう一つ小道具を脇におくと
妙なる銀黒になってきた
こんどは重厚なふくらみがでた

彼は走りだした
達人は無心についていく
もの造りの鼓動が響いてきた

納得した顔が浮きあがると
達人はふかい呼吸まで一体化し
何も考えず駆けていった

男は いつもより遅い時間の電車に乗った
少しの後ろめたさを抱えて

通勤時間を過ぎた車内はガラんと静か
腕時計を見ながら いつもの仕事を思い出す
あそこにはもう自分の場所はない

こんな時間に逆方向行きの電車に乗ろうなんて
この時間はいつもなら朝の会議が始まる頃
元気な挨拶が交わされている筈

昨日まではその中心にいた
退社時間
拍手とともに女性社員から贈られた花束
気恥ずかしさと一緒に
抱え持って帰った

一日くらい家でゆっくりしたら
とはまだ仕事から解放されない妻の一言

男は鳥になった

待ってましたとばかりに飛び立つ
博物館へ行くんだ 美術館へ行くんだ
あの商店街も歩いてみたいし
時間を気にしないで昼飯も食べたいし

こんな時間に こんな場所にいる
男がまたも感じる少しの後ろめたさ
修学旅行の学生たちが通りすぎる
打ち上がる噴水を眺め 少しため息をついた

男は立ち上がる
そんな思いを断ち切るように
すぐ慣れるさ
これからずっと続くだらう休日
うまく過ぎさなきゃあ な

鳩が一斉に飛び立つ
羽音を響かせて

ある日、私は散歩をしてゐる。

ある日、私は本屋で本を見てゐる。

ある日、私は何かをしてゐる。

ある日は際限がない。

そんなある日、

私は詩を書いてゐる。

神様が私に下さつたある日。

かけがへのないある日。

ある日がなければ

私は木偶同然だ。

太陽の光は海に溶けて行く
海も少しずつ色彩を変えて
海面に正座した太陽が泣く
すべてを湛える色彩の果て

暗黒の夜空に不安になるのは
海が太陽を飲み込んだからか
幽かな残光の星々が瞬くのは
太陽の最期の涙なのだろうか

海が女なら太陽は男なのか
水平線に全身を預けたのに
女の周りを回るだけなのか
見る位置に騙される男の国

女の色彩を変えたつもりでも
重要なのは色彩を見る位置だ
本当の海の色を探してみても
暗黒が真実なら透明も真実だ

青い海の時はいく光で応えよう
海原の背後で大空が歌っている
赤い海の時はいく光で応えよう
血液の循環が情熱を生んでいる

空席が目立つ朝の列車
それでも停車駅に着くと客の乗り降りがあり
車内の空気が揺れた

最後に乗って来たのは男だけの一団
口を堅く閉じて 目も上げない
わたしの脇を通り過ぎる 手が触れる近さを

後手に括られ その綱の先は後にいる男の手にあり
その後ろにも何人かの男がいて 黒く塗り潰された行列
訓練された動き 綱は短く固い

はるか後方の座席にいる彼ら
の 感じるはずもない気配を気にしてみるが
知ることのできない罪状 括られた訳

私はその秘密を知っている(*)
聖ヨハネの嘆きも マリアの悲しみも
ああ イエスの苦悩さえ(**)

男たちは真実を語らない
そして手元を緩めない
いつときの油断に身を滅ぼすことはない

男は今
男から与えられた
駅弁を食べている

(*) 三好豊一郎 囚人

(**) 顔

五年前は
どこに住んでいましたか？
と 尋ねられた

おーい 俺たち
五年前って
どこに住んでたっけ？
と かみさんに尋ねる
どこだっけ さいたまだっけ？
いや もう向島に
引っ越していたんじゃないかしら？

思えば
いろいろあった五年間だ
お祖母ちゃんが死に
おふくろも死に
俺は会社を半ばリストラで退職
宅建 マン管 色々取得して
今は 遺産の賃貸の大家に
一方 かみさんは 更年期障害に苦しみ
一緒に 病院もあれこれ回ったが
遂には この地で整体店を開業
その間 住居も何度も変わった
産業道路と畑に挟まれた
冬には富士山が見える大平原
隅田川と路地裏のはざまの
夏には花火の綺麗だった旧花街
それから せっかく
おふくろの入った病院のそばに…と契約したのに
結局 引っ越しと葬式の日取りが
わずか一日差になってしまった
ほんとは単身者用の小さなアパート

数ならぬ身と言えば まあ その通りだ
それでも 一応 数には入るわけだ
そうか じゃあ書いとくよ 向島って
いいんじゃない？
でも 懐かしいわね

そのうちまた 行けたらいいんだけど
花火とか

ここは市民病院
市内の老人がすべて来てしまったか
と思えるほどに老人ばかりで混みあう
杖を突いたり 手を取られたり 車椅子に乗せられたり
はっきりしない視線
付き添いを伴って待合ロビーの人数はさらに増える

豊かな白髪を高くまとめ上げ
日傘を脇に抱えた 華やかな女性が並ぶ
少し場違いな雰囲気を漂わせて
後ろに立つ人は距離を置きながら
興味深かそうな視線を向ける
女性のはっきりと明るい声に老人たちが目を覚ます

聞いたことのある声
テレビドラマの語り手だったか
映画の元気なおばあさん役だったか
周囲の人たちも引き込まれるように
顔を上げる

彼女は間違いなくあの人
大舞台の真ん中で両手を掲げ 歌い踊っていた
今もスポットライトのない舞台上で注目を集めている
相手役は受付の男性

女優が舞台を去ろうとしている
健康診断の結果が良かったらしい
お世話になりました
ありがとうございました と言って
スカートの裾をひるがえし 大き目のバッグを持ち直して
一人で

老人たちの目が後を追う

暑いね
ああ暑いね
蠅が飛んでるね
ああ蠅が飛んでるね
草野心平の蛙よろしく
死体が ぼつぼつ語り合う夏野原
溶けたね
君もずいぶん溶けたね
死にたかあないね
でも もう俺たち死んじまったんだよね
いやだね 死んじまうのはいやだね
暑いね
ああ 蠅が飛んでるね
突然 死体が 舌を びゅるっと伸ばして
蠅を捕まえ 喉へと流し込む
美味しいね
ああ美味しいね
何だか 生き返るようだね
生き返るのはいいね
ますます 心平の蛙よろしく
夏野の 夏草の 草葉の陰から
おもむろに 死体が 立ち上がる
しつこく 甘く 暑苦しく まつわりつく
つわものどもが夢を 振りほどいて
あっちの足軽 あっちの鎧武者
そっちのゲートル こっちの宇宙服
みーんみんな みーんみんな
蝉が鳴いてるね
ああ 蝉が鳴いてるね
次は あいつを喰っちまおうかね
空だね
ああ 青い空だね
気づけば 眼窩をこぼれ落ちた目玉が
錆びた兜の下から 穴越しに
空を見つめている
いつまでも

戦場の決断に似た極論が醜い
自衛権で守るのは誰だろうか
個別でも集団でも主語が薄い
誰が何処を防衛する話なのか

アメリカ人が日本を守るのか
核を持つ英国人と仏蘭西人と
ロシア人と中国人が戦うのか
守るべき日本領土は蚊帳の外

日本人は国境の外では戦うな
従って日本は外国を守れない
国境を越えれば命令に従うな
従って国境外に上官はいない

日本が外国を守るのではない
日本人が日本の国を守るのだ
そこを明瞭に考えた方が良い
そこが肝心で大切な国の臍だ

自衛とは領土内の行為に限る
自明な話をせずに狂うばかり
意味の分からない夏が過ぎる
外国を真似た話が弾むばかり

それは 映画「2001年宇宙の旅」に出てくる
謎の物体「モノリス」だったのか
野越え 山越え ようやくたどり着いた
墓場の 墓石の すべすべの表面には
何も字がなく そのくせ じーっと 見つめているうちに
その「向こう側」に 無限みたいな とてつもない何か
逆に こっちを 見つめ返すようで
それが ただ この土の下で
俗名も 戒名もないまま
「不眠症」のように 輾転反側する
一人の…或いは無数の誰彼の 言うならば
「不死症」の 眼差しであるのか
それとも その後ろに もっと巨大で 得体の知れない
太古の 神とも魔物ともつかぬものが
黒幕のように まだ控えているのか
ともかく そいつ（ら）の 無言の呼び声に
吸い寄せられるように 墓石に 手を伸ばして
その 宇宙みたいに静まり返った 黒い石肌に
触れようとしたら 何と 指先が 石を突き抜け
すーっと 「向こう側」に 沈み込んでいくので
途中で怖くなって 肘まで突っ込んだ辺りで
とうとう 我慢できずに 引き抜いたら 帰って来たのは
まさに 「2001年宇宙の旅」のエンディングみたいな
光る ぶよぶよの 赤ん坊の手
仕方がないので その光る手と
反対側の もう一つの手を 合わせて
眼を閉じ こうべを垂れ お祈りする
しかしだ こういう場合 その台詞は？
やっぱり「迷わず 成仏して下さい」？
それとも「迷わず 成仏させて下さい」？
そこで ほとんど「迷って」しまって
いっこう お祈りが 切り上げられないまま
気づけば 辺りが しーんと 静かなのは
これは ひよっとして 眼を閉じてる間に
俺も いつしか 墓石の「向こう側」に
取り込まれちゃったんじゃないかしら？

その日のパーティーは 出席者も多く華やかだった
いかにも創業五十周年を祝うに相応しい豪華さで
客たちも招待されたことに満足し その場にいることに
喜びを感じて 久しぶりの再会を楽しんだ人が多かった
会場には名誉会長や 先代社長も来ていて 延々と続いた
祝辞は ようやく終わりを告げた

では 乾杯に移りましょう 皆さん乾杯のご用意を
御発声は取引先を代表して K商事のY様お願いしま
す

宴会に参加していた人たちは皆 グラスを持って立ち上
がり 乾杯の一言を待った しかし また始まったご挨拶
先代の功績から会社の発展と これを知っているの
は私だけ とばかりに得意げに 嬉しそうに一段と声を
張り上げて ビールの泡は消え 参列者たちは落ち着き
を失った 中にはそっと口を付ける人も見えていた

宴会が終わり家に帰りついてからも 会場の興奮状態か
ら抜け出せず なかなか寝付くことができなかった
ようやく浅い眠りに入りはしたものの 宴会場のどよめ
きに揺り動かされ また目が覚めてしまった
仕方なく缶ビールを飲み ラジオを付けた

ゆるやかな音楽に乗り 聞こえてきたのは
宴会場でお客さん方に ビールのグラスを持たせたまま
ひとりしゃべり続けていた K商事Yさんの声 まだ上
機嫌でしゃべっている

Yさん まだいらしたのですか もう皆さん帰りました
よ 私が声を掛けると 彼は間が悪そうに頭を掻きなが
ら 黒いカーテンの奥へと引っ込んで行った
私はようやく眠りに着けたようだ

十三歳の頃になると「皆のために
行動する立派な人間になりましょう」
そんなことを壇上で言っていたのに
受験から虚偽に気が付き始めて仕舞う

中学生のくせにそんな台詞を背負い
皆のためにやればそれが正しいのだ
自分のためにやれば間違いだと言ひ
怪しい自我が出来上がって行ったのだ

あれから半世紀が過ぎて思い出すと
社会の真実の一つではないように思ひ
政治と文学も異次元の思想であったと
独りになって今は心から確信していたい

独りになるとやることが多いのが分かる
二人になると分業を装って嘘が多くなり
偽りだらけの脚光で偽物が分からなくなる
社会に出ると気懸かりなのは玄関の明かり

集団の中では嘘や偽物が見えなくなるから
独りになって自分のために歩きたいと思う
すると嘘や偽物で舗装された道で辛いから
虚飾の無い意志で美しい道を歩いて行こう！



三浦 逸雄 「灯台」12号（油彩 布キャンバス）



三浦 逸雄 「ポプラ」12号（油彩 布キャンバス）

故あって崔華國詩全集の終りの方にある年譜に目を通していているうちに、思いがけない記事に出会した。一九六六年（昭和四十一年）の「六月十七日、東京在住の詩人を一夕、神津荒船高原にお招きした日のことは、あすなる主催の詩人の集いのなかでも思い出に残るものである」という書き出しで始まる記事だが、私がかか驚きに似たものを覚えたのは次の條である。

「翌朝、深い霧のなか群響の金管が全山に飮し、集会がはじまった。東京の詩人達の紹介をする嵯峨信之が西脇順三郎を紹介する段になって「彼は西脇順三郎であります。慶応大学の名誉教授、文学博士、芸術院会員などは彼のアルバイトであります。詩人、西脇順三郎、これが彼の天職であります」と言った。詩人の不羈の精神を語る言としていまに記憶に残っている」

ここにある西脇順三郎は私が何十年も前に学生であった時の恐い先生であった。しかもその先生が詩人であるとは学校に入るまで知りもしなかったのだから、それだけで既に私が如何に詩と縁遠い存在であったかが判ろうというものである。それでいてどういいうわけか、遠い田舎の中学生であった頃に萩原朔太郎の名前だけは知っていたのだから、世の中の仕組はおかしなものと言うしかあるまい。

話が行ったり来たりする怖れはあるが、荒船高原での詩人の集いで司会役を務めた嵯峨信之にしても、昭和四十一年頃では見たことも会ったこともない詩人であった。その嵯峨さんに初めて会ったのは、昭和の終り頃でなかったろうか。銀座の梅林ビルの画廊で或る女性の陶芸展があり、そこに嵯峨さんが来ておられたのである。それを見て中村真一郎夫人の佐岐えりぬさんが、私を嵯峨さんに紹介したのであった。私はその時、私なんか本を送っても読まないでしょうね、と意向を打診するように言った。「うん、読まないね」と、嵯峨さんは素っ気なく答えた。そんな返事をするに相応しい仲々体格のよい人であった。その後嵯峨さんに接する機会はなかったわけではない。私を嵯峨さんに紹介した佐岐さんは詩の朗読をする人で、大塚フォーラムで何度か独演会を開いた。有名な人たちも聴きに來ていて、佐岐さんは朗読のあと、これはという人に感想を求めたものである。ある時、嵯峨さんは発言を求められて、朗読の感想を飛び越えて「今の日本には、これといった詩人は一人もいない」と突き放すように言った。矢張り上に立つ人であった

私は嵯峨さんと会っても詩の話をすることはなかった。氏はいつか日本詩人クラブの会合に見えたことがあった。私は「嵯峨さん、もう九十になりましたか」と挨拶にならない挨拶をした。「何を言うんだ、まだ八十八だよ」と氏は言い返した。それから二年後、鎗田清太郎氏の「火牛」十周年記念のパーティが築地本願寺であり、そこで私は嵯峨さんに会った。氏は私を見ると近づいて来て、「おい、おれ九十になったからな」と自分の胸を誇らしげにぽんと叩いて言った。

この詩人の脚は丈夫で、九十になっても所謂かくしゃくとしていた。その訳を訊くと、十年間ダンスをやっていたからだと答えたことがある。嵯峨さんと私の関わりはこんな他愛のないものであったが、この稿の中心人物である崔華國との付き合いはかなりのものであったようだ。詩全集の巻頭を飾る詩集は『驢馬の鼻歌』だが、その後記の中に嵯峨さんの言葉がある。

「曝すことです。曝すことの他に方法はありません」

崔さんはこの言葉から、「晩学の私がいざ自分で創る段になるとよい詩の影響など霧散し、元の木阿弥の己の姿しか残らないもどかしさ、恥ずかしさ」と胸のうちを打ち明けるのだが、詩集であろうと小説であろうと、それを世に出すことは、自分を曝け出すことなのである。殊に詩は、フィクションでない私小説と同じで恥部を曝け出すこと、つまりありのままの自分を書くことなのである。ただ詩は言語の芸術だから、その曝し方が問われる。読者の感動を呼ぶような曝し方が出来れば、汝以て冥すべしなのだ。崔さんは異民族でありながら、日本語を使って詩を書き、その自己の曝し方が日本人を驚かす程の力量を遺憾なく発

揮したのであった。その到達点がH氏賞を受賞した『猫談義』である。大雑把に言うと、崔さんの詩は知性と野性の交響現象である。それも知性の上で野性を踊らせて諧謔を誘い出す趣向で、どうかすると何処かのおっさんが啖呵を切るように聞こえる場合も珍しくない。あの坊さんのように静かで温厚な顔をした三好豊一郎氏がかつて、「読んで胸のすくような思いがした。いわば一種の啖呵だろうが、こんなふうに分れる人は、あまりいないのではないか」と言ったと、崔さんはエッセイ「詩は祈りと愛」の中で書いている。私はよく見間違いをするへぼ読者だが、それを怖れずに啖呵らしく聞こえる詩篇を取り出してみよう。表題は「バカンス」である。

バカンス バカンスって 馬鹿ンすんな
俺らどこにもいかない てこでも動かない

なにがニースで何がカンヌだ
なにがホノルルでなにがミシシッピーだ
なにが明砂十里でなにが海金剛だ
なにが湘南海岸でなにが軽井沢だ
糞くらえってんだ 俺らてこでも動かない

この調子が続いて、

バカンス バカンスって 馬鹿ンすんな
俺ら豊島園も行けねえ てこでも動けねえ

で終るのである。崔さんの詩精神の底には、啖呵の神が鎮座ましますと見てよい。問題は知性が際立たないようにすることだ。そのためには、野生を活躍させることである。野性には野卑や野蛮の要素も含まれている。崔さんにして出来る芸当というものだ。「亜米利加駆け歩記」をみるとよい。書き出しの「ロスアンゼルス」はこんな具合である。

波打際での立ちしょんはヤバイときいて
そこは東洋流 しゃがんで用を足したら
足摺岬のあたりから声あり森田進が
アプチー臭せえぞと怒鳴りやがった
くそっここも一衣帯水だったのけい

人間の排泄行為は牛や馬のような動物と違って喧しい規制があり、無闇な垂れ流しは許されないから、足摺岬から声が聞こえて来るのも無理はない。罪深いのは古来人間の下半身だが、矢張り何かあるとそこが狙われる。「高校野球を十倍愉しく見る方法」という少し長い詩があって、試合の応援に興奮する余り、空想が変なふう膨らんで破裂するところがある。幾つもある出場校の中で、「私」が応援すべき学校は印旛高校とあって、詩はこんな展開になる。

私は立ったり座ったり半狂乱の応援です
インバヌマーインバヌマー てめえ達
負けたらチンポコちよん切るかなあ

ところがこれが我が狂気とともに空しく

見事に負けちめえやがった ああ無情

人の局所を切り取るとは、恐るべき猟奇犯罪である。歴史的事実としては昔、安部お定の犯した事件は有名だが、矢張り狂気の沙汰である。応援が熱狂の極に達した時にも、事と次第によっては相手の局所の切断を促す衝動が起るものなのか。

話が妙な所に落ち込んだが、ここは崔さんが嵯峨さんの言葉通りに内心を曝け出したと言うしかないようである。副題に「在日韓僑一世達に送るメッセージ」とあるが、野球の応援はかくあるべしと詩人は伝えたかったのである。

こんな風を書くに崔華國は諧謔の詩人と受け取られ兼ねないが、その根底にあるのは生易しいものではない。この詩人は朝鮮の人としての歴史認識を強く持って日本で生活していたのである。両国の歴史の狭間にいて聞こえて来る軋みが言葉に変換されたのが崔さんの詩であった。詩全集の解説者の一人である齋藤も取上げている崔さんが三好達治に対して発した言葉が、それを端的に物語っている。エッセイ「詩と嗚咽」を読むといい。この文章は一九八九年（平成元年）の「詩と思想」七月号に発表されたことになっていて、それに「三十四、五年前と思うが」という但書がある。年譜にない事実であるが、察するに崔さん三十代後半のことである。

「吉岡正典君（広島ホームテレビ創業者、現同テレビ常務）と新橋のバーで飲んだ折、吉岡君の旧知だという、詩人の三好達治氏を紹介されて、飲むほどに酔うほどに、垣根がなくなり、詩論（？）風発する間に、私がぶったものだ」という場面の展開になる。これこそ崔華國の注目すべき啖呵である。

「三好さん、日本に詩があると思われませんか？ それは無理というものでしょう。このことは日本にとっては幸か不幸かは知りませんが、アジアの諸民族の中で、異民族の泥靴に踏み躪られたことのない民族は、日本だけなんです。異民族に踏み躪られた経験のない民族が、本当の悲しみを知るわけがない。もし私の話が嘘だと思われるなら、百年後に相まみえましょう。本当か嘘か」

吹きかけられた議論としてみると、なんとも重苦しいところがある。崔さんの祖国は日本によって踏み躪られた歴史を持っている。日韓併合という屈辱的歴史が意識されていることは、知る人ぞ知るである。崔さんは一言も言っていないが、安重根の伊藤博文暗殺が意味するものが、崔さんの切った啖呵に滲み出ている。

では、難題を突きつけられた三好達治はどう応じたか。

「三好さんは抱きついてきて「そのとおりです。それは充分理由があります」ということになっているが、この言葉は如何にも三好らしいと言ってもよからう。崔華國が三好に向けてこの議論を投げかけたのは、日本の歴史から言えば敗戦後数年以上経って、なんとか酒が飲めるようになった時代だが、戦争の後遺症は続いており、国を敗北に導いた支配層の責任問題が世の中にくすぶっていた。三好達治は崔華國に対して「そのとおりです、それは充分理由があります」と言わざるを得ない形勢不利な詩人であった。

横道にそれるが、戦時中は戦争詩も書いた三好が、敗戦後どのように変身したかを少し調べてみよう。私のところには具合よく、中野重治の研究に熱心な福井在住の定道明氏が先般贈って下さった論考「中野重治近景」があり、その中に三国に暮っていた時の三好のことが可なり詳しく書かれているのである。私はかつて旅をして東尋坊に立ち寄った時、三国の町が見える所に三好の詩碑が立っているのを見た。見たばかりではない。そこで偶然石原八束に会った。石原は講談社版「日本現代文学全集 77」で三好の年譜を作製した歌人である。私は恥ずかしながら不勉強で、三好が三国と関係のあったことを長い間知らなかったのだ。年譜によれば三好は昭和十九年、「五月号「文芸春秋」」に三国行の詩「窗下の海」を発表。妻子と離別し、三月、福井県三国に移り、雄島村米ヶ脇の森田家西別墅に入る。秦秀雄の紹介による。四月、合

本詩集『一點鐘』を創元選書にて刊。五月、萩原アイと結婚。一以下略」とあるが、この中で人目を引く所があるとしたら、多分萩原アイとの結婚であろう。アイは朔太郎の末妹で、定さんによると「熱烈な求愛をしている旧知の三好と暮す」ことになる。それが五月三十日のことであった。ところが「十二月には不和が決定的となり、十二月二十一日、アイは医師堂森芳夫宅に身を寄せる。アイは以後二度と三好のもとへは戻らなかった」

三好はどうやらアイに暴力を振うらしく、若えびすという旅館が、「顔面痣だらけになって転がり込んできた萩原アイを保護したこともあった」と定さんは書いている。それらしさを物語るように、こんな記述もある。

「アイの堂森宅避難は、体調不良か怪我に拠る堂森提案の緊急入院措置であったかもしれない。小野忠弘は、三好に「君のようなデカタンズに何が分かるか」と一喝され、小皿が飛んで来たことがあったと書いている（「逃避行」、則武三雄『三国と三好達治』所収）。こんな地雷のような男とは、誰にしろつき合うことができぬだろう」

「地雷のような男」とはよく言ったものである。

そういう恐るべき男が戦後になると俄かに変貌するのだから、人間の底には計り知れない不思議が潜んでいると言わざるを得まい。いや、それは不思議でも何でもなくて、それが人間の本性だと言う向きもあるに違いない。成程と頷きたくなる場面があるのだ。

毎度人様の受売りで申訳ないが、中野重治研究の定さんは三好を批評の舞台に立たせる前に、次のような口上を述べる。

「戦後になって、特攻隊帰りの青年達を筆頭に、復員兵が続々と郷里の三国へ帰って来ると、彼らはかかえていたマグマのようなものをぶつける相手を求めてうろつくことになった。戦争は敗戦と言うかたちで終わった。この事実を、彼等は当然のことながら鵜呑みにすることができなかった。彼等が無条件で、戦勝を信じ、命を賭して国体の護持を期して来たことがまちがいであったというならば、そのまちがいの所在は何としても明らかにされなければならなかった。のみならず、そのまちがいの責任を誰が引き取るのかも、しっかり約束されていないことには、彼らの憤懣はどうてい収束しそうになかった」

そしてこの後に出て来るのは、畠中哲夫の「戦後のこと」（『詩人三好達治——越前三国野頃』所収、花神社）の中から引用される一節である。

「特攻隊の青年たちとの集まりは三度あった。中秋の夜、酒を酌みかわしながら三好達治は若者たちを讃え、泣きだしてしまった。先生がこのように激しく泣くのを僕ははじめてまのあたりにした。

夜ふけの月がでていいる道を、ひとり帰ると三好達治の強烈な印象にいつまでも眠れなかった。

あとできくとひどく酔った堂森さんは、三好家をでたあと、砂浜に自転車を抱いたまま、夜が明けるまで眠ってしまったという。

堂森邸で帰還した青年たちの集りがあった。戦争の無残、天皇制、道德論、宗教についてはてしない議論があった。堂森芳夫と三好達治は若い人たちとともにたちむかわねばならぬこれからのことについて夜更けまで議論をつづけた」（つづく）

畠中は「特攻隊の青年たちとの集りは三度あった」というが、唯称寺という寺での集りのことも書いていると定さんは付け加える。

「夜更けまで三好達治の周辺でさかんな議論をした思いが重り感慨深いものがあった。「天皇制のある限り僕らはいつまでも二重の道義に苦しまねばならない」といったとき、三好達治は「日本に実証的な精神が育くまれない根本の問題がそこにあるんだ。そのうち私が書くよ」と応えられたのが、まもなく「なつかしい日本」としてまとめられたものである」

これで見ると、三好は特攻隊帰りの若者たちのマグマの熱に煽り立てられ、まるで自身が身命を抛って出撃する特攻隊員に変身したかのように見える。実際彼はやがて突飛とも言える拳に出るのだ。

「四六年の「新潮」一月号から連載された三好の「なつかしい日本」は、「陛下は事情のゆるす限り速やかに御退位になるがよろしい」というものであった。こうした天皇退位説は、当時の文人のものとしては皆無であった」と定道明氏は述べる。

「新潮」に掲載された三好の主張するところは長いので割愛するが、世の中は三好の論ずるところに筋が通っていたにしても、彼自身の戦時中の身の処し方と照らし合せて見るので、喝采を受けることはなかったように、この私自身はぼんやりと記憶している。論者の定さんもそれに触れる。氏は三好の天皇退位論の引用を終えた後、

「ここまで引用して来て気になるのは、三好は「上位の者から順当に、責ある人が責に当たるの範を示して貰いたい」と言いながら、自分を「責ある人」の中に数えていないらしい点についてである」と痛い所を突いている。三好は自分というものをどう捉えていたのか。定さんはそれのはっきり判る三好の主張を次のように取り出している。

「私たち国民は国政に関しては全くゼロの状態に無責任でないのはいうまでもないが、私たちは為政者ではない。従って為政者がその点で負う責任に較べてほとんどゼロに近い軽微な極めて軽微な責任をしか問われるべきでないのを当然とする。私たちは国家という巨船の一般乗客たるが故に善良な国民たりうるのであって、操縦者は別にあって存すべきであろう」

これが「何十篇もの戦争詩を書いた」三好達治の言い分である。

「しかしこれは、あまりに虫のいい脳天気な戦争責任論である。後に三好が激しい内外の糾弾に直面したのは当然であった」と定さんは仰るが、それこそ当然の報いで、そこに詩人三好達治が地上に立ちつくす姿があると言ってもよい。

長い回り道をしてしまったものの、三好が崔華國に抱きついて、「そのとおりです、それは充分に理由があります」というところが、今述べたところに繋がるように思うのは私の妄想であろうか。「涙声で、幾度も幾度も、今日流行の、乾杯をしたものだ」と崔さんは三好との会見の模様を叙しているが、この涙声は誰のものなのか。それよりも妙な気分させられるのは、崔さんの三好に対する敬意の表し方である。

「〃盲蛇に怖じず〃という諺が日本にはある。韓国では〃生まれたての子犬、虎の恐さを知らず〃という似たような諺があるが、三好達治という、日本詩壇きつての巨匠に向って、ずぶの素人の私が、詩論を吹っかけたという大胆さは、知らざりしとはいえ、盲蛇とか、子犬と虎の譬えどころではなさそうで、後々冷汗三斗の思いに、さいなまれるのであった」

崔さんは儀礼を重んずる国に生まれた人であるから、詩の世界では素人の自分が、日本の代表的な詩人に向って大言壮語的な詩論をぶったものの、酔いが覚めてから冷汗三斗という中国式な悔恨に苛まれたと述懐するのである。成程と言いたい気持の治め方である。

崔さんが三好について書いているのはこれだけだが、その後交流があったかどうかは、詩全集からでは判らない。興味を引かれるのは、三好と並んで巨匠と言うべき金子光晴のことである。崔さんは金子を「師」と称していて、「巨匠が巨匠を知る！」の中では、この詩人が亡くなる二カ月前の高崎での出来事を書いている。一九七五年四月十日のこととある。崔氏経営の茶房「あすなろ」で春の詩の会を開いてそこに金子光晴を招き、会田綱雄と桜井滋人を加えて鼎談が行われたのであった。六十人の聴衆がひしめいていたというが、金子は放浪時代の苦労話の合間に突然聴衆を睨め回し、「皆さん、現代詩なんとか手帖なんとかという雑誌、あれを読んでわかりますか？私は何もわからない（文責筆者）」と、憤懣やる方ない表情であったという。この話は「茨木のり子さんとの出会（2）」にも出ているが、こちらには三好達治にぶつけた詩論とは趣向の違った詩論が加えられていて感心させられる。こうだ。

「詩が文学芸術の核であるとする、榮譽を担うには、言語の錬金術での厚化粧が如何に巧みでも、頭脳の中の幾層もの複雑極まる集積回路を潜らしても、それだけでは所詮空疎な、テクニクの文字の羅列に終るだろう」

これはこれとして、金子を囲んでの詩の会が終ってからの情景が、私ごとき俗物には、それが在来りのものでないので面白い。

「その夜のこと、高崎のホテルの一室で、ビールを飲んでいた会田と桜井の兩人に、風呂あがりの仙人のような光晴老が、茶目っ気たっぶりな目を輝かして、「どうだい、見くらべっこしようじゃないか、お互いの一物をよう」といって浴衣の裾をたくしあげるのである。顔を赤らめて頭をかいている二人を見据えて、「なんだ、尻込みするのか、弱虫達だなあ」といって、二人を見下ろしながら、からんからんと笑うのである」

この次に来る文章の展開の方が重要であるが、その前に私は金子光晴の笑い方が本当に「からんからん」であったのかどうか、訝しく思う者である。金子ほどの大物なら「かんらかんら」と笑うのが適用すべき歴史的表現ではあるまいか。崔さんはそれを手垢のついた陳腐な表現として避け、音楽的響きを持つ「からんからん」の方を採用したのかも知れない。あるいはその場に相応しい金子の高笑いとして発明したとも取れる。崔さんはこう裁決するのだ。

「然もありなん。会田綱雄や、桜井滋人のようなチンピラな一物とは一物がちがう。男娼以外は何でもこなしたという、パリでの歳月から、・・くれてゆく岬の／雨の碇泊／ゆれて／傾いて／疲れたところに／いつまでもはなれぬひびきよ／（後略）ボシャン、ボシャンと、洗面器のなかのさびしい音。などの表現にあるように、マレー、蘭印地域の貧しい人々の生活と性等々、現代という浮世絵の千軍万馬の間をかい潜った老師の一物たるや、会田、桜井ならずとも、世の常男なら恐れをなすのは当然というものであろう」

男の徴のことで金子光晴の姿を輝かしいものにすることが、その詩の価値をより高めることになるわけでもないから、戦時における身の処し方に触れたほうがよさそうである。金子は三好達治のように戦争詩は書かなかった。千軍万馬の一物の持主と評されたこの詩人は、戦争に関する詩は書いたが、それは所謂反戦詩と目されるものであったから、戦後、文学者としての戦争責任を問われることはなかった。しかし同じ詩人でも、崔華國の「巨匠が巨匠を知る！」で取上げられているもう一人の巨匠高村光太郎は戦争責任を追及された詩人であった。世間の目は、高村が戦争に協力したという点に向けられた。つまり集中砲火を浴びせられたのである。しかし読めば解ることだが、その主たる詩篇は、私ごとき読者から見ても最高点に達している現代詩と言ってよい。驚くべき才能である。「戦闘」という詩を読むだけでもそれが解ることだろう。と言って、私はここで高村光太郎論をやるつもりはない。金子の一物の流れを引いて言えば、光太郎は性欲の並外れて強い男であったということだ。私はここでは、光太郎礼讃の言論を崔華國に委嘱すれば足りる。崔さんは先ず、金子の言葉を一番に取上げる。光太郎は一九五六年四月二日に世を去っているのだが、金子はその時日経新聞に追悼文を載せた。冒頭に「日本の新詩は厳父を失った」と書いたとあ

る。その後には崔さんの所感が続くのである。

「私は深く頭を垂れたことを記憶している。『天皇危し』を叫び、高らかに『大御稜威』を歌った高村光太郎を、戦争協力詩人、天皇礼賛者として葬ることはいと容易い。が、それだけでは、日本の新詩の厳父、高村光太郎を本当に知ったことにはならないだろう。

何時頃かは知らないが、日本の新詩の高村光太郎は父で、萩原朔太郎は母であるという通説がまかり通っていたが、まさに巨匠、金子光晴までが、かかる通説を頼りに光太郎を論ずる筈がないと確信するのである」
通説云々はその後しばらく続くが、そのうち光太郎に対する思い入れの強さを覗かせる一節が顔を出す。

「私情になるが、天皇とか聖戦という言葉は、身の毛がよだつ。植民地の民であった私ですら、高村光太郎をただの戦争協力詩人とか、天皇礼賛者として片づけることはできない。彼こそ、日本の新詩の背梁山脈の中樞に聳えた偉才といわねばなるまい」

光太郎も光晴も外国を知らない詩人ではない。近年流行の「グローバル」な視野があれば過ちを犯さないという保証は何処にもないのである。戦争は人の心を狂わせる不可解な魔力を持っているに違いない。エズラ・パウンドは米国出身の詩人だが、イタリアにいてムツソリーニに加担した廉で、国家反逆罪に問われた。我が国の詩人野口米次郎はアメリカ通でありながら、文学者としての戦争責任追及の槍玉に挙げられた。崔さんは光太郎を顧みて、「人は誰でも間違いを起す。それが人間であることの証しで、詩人もまた同様である」と断じている。

面白いと言うと語弊があるが、新詩の母であるところの萩原朔太郎には礼賛の言葉は贈られていない。

「新詩の母になぞらえた萩原朔太郎は『フランスに行きたし、されど、フランスはあまりに遠し』と言った。光太郎の『故郷は遠く、小さく、ケチ臭く』とはスケールがちがう。実は金子光晴もあまり朔太郎は認めていないようである」

朔太郎には気の毒な気がするものの、人の認識は皆がみな一致するわけではないから仕方あるまい。

この後が結論だが、それがまた振るっているのだ。

「八月十五日、日本が脱皮する日、金子光晴は、セントルイス・ブルースのレコードをかけて、ひねもすを、狂ったように踊りまくったという。笑いこけながら、嘲笑こけながら」

八月十五日は言うまでもなく、我国が無条件降伏という形で戦争を終えた日である。崔華國はこの八月十五日を日本が脱皮する日と規定するかのように記しているが、一体何からどのように脱皮するのか。脱皮というと蛇の脱皮を連想するが、蛇は何度脱皮しようと蛇で、龍に成長するわけでも蜥蜴に変身するわけでもない。戦争に敗北した日本は武装を解除されて丸腰になった。これが目に見える脱皮であった。詩の方にも、戦後直ぐではなかったが、「脱皮」という詩誌を出した人があった。戦後に相応しい名称だが、どんな詩が載っていたのかは、今では全く憶えがない。恐らくその志すところは、古いものから新しいものへの脱皮であったに違いない。しかし、言うところは好し実行はなかなか難しいのである。崔華國詩全集の巻末にある付録には「マンネリズムへの怒り」という記事がある。誰しもこのマンネリズムには覚えがある筈だが、これは最も身に應える評語の一つである。辞書には「一定の技法と形式が惰性的にくりかえされ、型にはまって独創性や新鮮味がなくなる」とある。この基準を適用すると、失格する人は少なくあるまい。技法と形式は、小説の文体や詩の詩風に通じるもので、惰性的に繰り返されない限りは最も大切なものである。技法を磨けば形式も浮き立つ道理である。それがなかなか難しい修行なので、炯眼の士は芸術の惰性的繰り返しに怒りを発するのである。崔さんは創刊十六年目で五十号に達したという地元の詩誌「裳」の記念祝賀会で、「裳」と群馬の詩人たちを痛烈に批判した」というのである。そこで発せられた言葉の記述はないが、痛快を越えたものであったに違いない。優れた詩人には激情家的或は癩癩持の傾向がある。

「怒りの対象となるのは、多くが、詩人たち、音楽家たちのマンネリズムやなれ合いだった。この日も同

じ趣旨だった」が付録を書いた人の弁であるが、脱皮の容易でないことが、こういう場所からでも何となく解る一例である。

ではこの辺で堂々巡りになるが、マンネリズムに陥ることのなかったと見てよい崔華國の詩の世界に戻ることにしよう。

詩全集の中に「栞」が入っており、その中に河邨文一郎の「詩の「大陸」と題した文章がある。川邨は北海道の詩人で、一昔前の映画俳優佐分利信に似ているのでそう持ち上げたら、若い女に言われるなら嬉しいが、君にいわれたのではね、と笑い返されてしまったことがある。本業は医大教授の肩書を持つ医師で、詩作品の分析力はメスを振う身だけあって流石である。その資質の分る箇所だけを引用しておこう。

「崔華國の詩は、日本、韓国を問わず、かなりユニークなものである。漢語の決まり文句を真向大上段にふりかぶったり、市井の俗語を平然と、しかし切れ味よく混ぜ合わせたり、日常生活や旅の出来事にユーモアとペースの調味をふんだんに利かせたコント風の仕立てなど、まさに洗練と生硬の絶妙な配合が独特で、私など、そこが大変勉強になった。詩風を八方破れに見せて、しっかり一点の核に収束している曲者ぶりも小憎い。御本人も、天衣無縫、融通無礙が異邦で生きる道よ、と大らかに宣言する有様だ」

折角だから、河邨の言うところに繋がりそうな破格の一篇を出してみよう。「未刊詩篇・遺稿」の中にある『過去帳』である。

富士よおまえは
この俺を
知っているだろう
よもや知らねい
などとはいわせない

そうだろう 富士

俺のチンポコを
ウンコを
どのくらい
なめさせられたか
人間にも
一匹いる
猫背で
しょぼくれて
まだいきている (遙かな歲月の日記より)

これぞ河邨の言うユニークな作品である。天衣無縫、融通無礙で、この世のやんごとなき人々には、到底思いつくも出来ない人間と山の歌である。崔華國だから書ける詩というしかあるまい。こんな作品ばかり書いていたら、特に群馬の詩人たちからマンネリズムだと攻撃されるに決まっているが、崔氏は視野の広い詩人だから、随所にエスプリを發揮する。矢張り「未刊詩集・遺稿」にある詩で、現存の詩人を登場させるのがある。その一部分だけを出すことにする。題して『墓堀り考』。

いよいよ食いつめたら

アメリカにでも渡ってって
墓掘り人足でもやりますわと
うそぶきながら長谷川龍生が
我が輩の太股ほどもあろう
両腕をさすりながら
苦笑いをするのである

(つづく)

長谷川は偉丈夫である。かつて私は木津川昭夫の誘いで、窓を開ければ墓場の見える新宿の飲屋「道草」に行ったことがあった。そこに長谷川龍生がよく来るというのである。確かに私はそこで龍生に会った。そして私は酔って、「お前の詩は、ゆるふんだ」と言った。龍生はそれに対して何も言わなかった。怒ったのは、同席していた木津川である。「そんなことを言うんなら、帰れ」と彼は言った。私は言われた通りに、さっさと帰って行った。それから余り日は経っていないが、前述の「火牛」十周年記念会が本願寺で開催された時、私はロビーで龍生に会った。彼はにこにこして私と握手を交わした。彼は「いよいよ食い詰めたら／アメリカにでも渡ってって／墓掘り人足でもやりますわ」と言っているのけることの出来る何処か桁の違う詩人であった。

こんなことを書いていると、崔さんの人脈を辿っていることになるが、如何なる詩人といえども、ただ独りで生涯を天地に過ごすことは有り得ないのだから、私がこういう書き方をするのも仕方のないことである。マンネリズムの謗りを恐れながら次に移ろう。

崔華國との関係が密接であった齋藤（まもる）のことを取上げて置きたい。齋藤は日本人でありながら崔さんの祖国朝鮮半島で生れ育ち、日本敗戦の日もその地で迎えた。彼は朝鮮総督府高官の息子として暮っていたのだが、戦争が終った時には京城帝国大学医学部予科の学生であった。一方崔さんは十六歳の時に日本に来て、私立の名門開成中学に編入している。そして日本敗戦の日、即ち植民地であった祖国解放の日を横浜で迎えた。齋藤の方は解放はなくて、栄光から転落への運命が待ち受けていた。彼は生れてからそれまでの総てを後に残してその地を立ち去らねばならなかった。つまり支配者であった日本人は崔さんの祖国から追放されたのである。齋藤は日本に引揚げてからかなり長い歳月を置いて、朝鮮で過ごした日々を詩に書いた。その詩集を読んで、崔華國は齋藤の嗚咽を聞く思いがするのである。実際は詩からよりも、齋藤自身の嗚咽を崔さんは目の前で聞いたのであった。

一九八七年十二月に土曜美術社が発行した『齋藤詩集』に崔華國の解説があり、そのことが冒頭に出ている。

「私は齋藤の詩を知る前に、彼の人間的な、あまりに人間的な、心の嗚咽を知ってしまった。この嗚咽というのが曲者で、これにとりつかれると、相当な強心臓でも参ってしまうのだ」

一九八四年に半蔵門のホテルでアジア詩人会議があり、その二次会で崔さんは齋藤に初めて会い、「その後、ソウルにはいつごろいかれましたか」と訊いた。齋藤は「しばし沈黙の後「どの面さげて、母なる漢江に逢えるというのですか」と、やや紅潮した表情で続ける彼の言葉に、私はすっかり虜になり、興奮し、遂に二人は熱く手を握り合ったのだ。酔いも手伝ったとはいえ、こんな話を、日本の詩人の口から聞こうとは考えてもみなかった。彼は続けて・・・

「戦前の植民者達に道義を望むことは、ないものねだりになるかも知れませんが、せめてもの、一抹の智恵と誠意が働いていたなら、あなた方の祖国の分断は、避けられたかも知れない。それが千秋の恨みでなくて・・・」ここいらで、噛みしめていた嗚咽がせりあげて、しばし彼は絶句した」

齋藤の嗚咽の背景にある朝鮮の南北分断に関わる條は、私ごとき世間の狭い凡人にはなかなか理解し難い文脈だが、解説の少し先に行って取上げられる詩の一篇は、嗚咽が詩に昇華したものと言ってよい。詩集『葬列』にある「漢江」がそれだ。

いかだがゆるやかに流れていた

川原にきぬたの音のはじけていた

私はひとり石を投げ
小石は力をためてつぎつぎと水を切つた
不意に悲鳴がおこり
砂原に脚をとられながら女がかけて来た
はげしい言葉が投げられ
血のにじむ手が突き出された
私はその国の言葉を知らなかつた
きぬたをほうり出して
あちこちから女が立ち上がった
私はあやまることを知っていたのに
私はそれをしなかつた

この詩を額面通りに受け取ったのでは意味をなさない。どころか朝鮮の人々の反感を買うばかりである。詩人たる崔華國にして次のように述懐する。

「この詩を読んだ瞬間、私はぎくっとした。「何故？ この善良な少年、齋藤が、善良な女人達に、誤って犯した禍に対して、何故、素直に謝らなかつたのか、不思議でならないばかりか、一種裏切られた不愉快さが先走った」

ここにあるのは、禍をしたことを知っていながら知らないふりをする頑なな少年の姿である。しかも「私はその国の言葉を知らなかつた」と断り書きをしている。齋藤は朝鮮の言葉を知らなかつたのか。朝鮮で生れ育ったものが、その土地の言葉を知らぬわけではない。崔さんは「よく考えてみると」と、先走る自分の感情を引き留めるのである。そして「ソウルで生れ、ソウルで育って、漢江で石を投げて遊ぶ年頃の少年が日本語で「どうもすみません」とか、韓国語で「ミアン ハムニダ」がいえぬ筈がない」と気づく。理解に逆転現象が起こるのである。「これはやはり、齋藤特有のイロニーだったのだ。犯し蹂躪した日本が、被害者である韓国に、何ら謝っていないということに対する、辛辣な風刺であることに気付くのだ。金光林も、しきりにこの点を指摘し、称えている」

この詩の「私」なる少年を齋藤自身ではなく支配国の日本に見立てれば、大抵の読者には理解出来る詩と言える。

こうして齋藤の嗚咽の淵源を知った崔華國は、それに事よせて、同人誌「風」九三号（一九八四年十月発行）に「江」と題した詩を発表する。肝心なところを引き出そう。

早く行って抱かれてあげなされ
砂丘に寝そべって洗われる涙の眼で
漢江の夕焼けを眺めてあげなされ
江畔のポプラも楊柳も鷹揚に揺れながら
あなたを手招きするでしょう
“齋藤よ よくぞおいでなすった”と
江はケチな人間なぞとはちがう
人種も国籍も問うものではない
涙あるもののために江は流れる

その齋藤も『崔華國詩全集』の解説に、「嗚咽を知った亜細亜の詩人」と題した一文を寄せているが、こ

れはどうも、齋藤の嗚咽を知った韓国の詩人と読み解いた方がよさそうである。崔が表で齋藤が裏の関係であろう。

それよりここで、「栞」にあるもう一人の評者、金時鐘の崔華國に対する批評に耳を傾けることにしたい。名前は聞いたことのある文人だが、崔氏の詩集に言及しておられるのを知らなかったのは、不徳の致すところと言うしかない。立つ位置が崔氏と違うところが読んで判る文章で、同国人として可なり厳しいところが窺える。題して「日本語を異化させる詩」。その出だしは「ついぞお目にかかれずじまいだった」である。近くて遠い関係を端的に述べる言葉だ。背景に日本とは違う政情がある。金氏は含みのある言い回しでこう書く。「きびしかった韓国の強圧政権時代、その韓国に出入りする崔華國氏との、私が処すべき自らのへだたりでもあった。そうして皆がみな、本国とは関わらない関係で親しかったし、関わり合わねばならないところで、疎遠になった」

奥歯に物の挟まったようなもどかしさの感じられる文章の展開だが、次を読むと言わんとする物事の輪郭が見えて来る。

「同族の誼みすらままならない不自由さを、私たちは承知で、日本という自由であるはずの国でかこっていたのだ。故国の原初さを人一倍もろにかかえ持っている崔氏だっただけに、晦渋さは氏の「在日」に深い孤愁としてかかえられていたものに違いない。わたくし的な心情吐露が氏の作品の主調を成しているというのも、私にはそのうずきの波動のように思えてならないのだ」

ここにある「深い孤愁」と「うずきの波動」は崔氏の詩の中核を探り当てた評語と言ってよい。更に金氏は韓国社会における詩人の政治との関係に触れる。

「朝鮮籍の私ですら、韓国はもう行こうと思えば行ける文民大統領の時代とはなった。崔氏が自らしたためたという年譜によれば、日本の詩人たちを韓国に招き、日韓詩人交歓会を世話役として肝いりしたのが、七六年の十一月とある。この年は強権をより強めた朴正熙軍事政権に対して、尹潜善、金大中氏らが「民主救国宣言」を発した、民主化要求闘争の激化した年であった。

このような政治的社会的状況のなかでそれでも日韓詩人の交歓会がもたれたということは、まさしく政治を超えるものに詩があることの証しではある。と同時に余りにも非政治的にすぎて、体制的な思惑にはまることもまた大いにありうることである。労苦を厭わない誠実な人柄の崔氏だけに、実にあぶなっかしい橋渡しをしたものだとつくづく振り返って思うのだ」

ペンで公然と政権を非難攻撃すれば、どういう結果を招くのか。死刑の判決まで受けた詩人金芝河のことは一言も触れられていないが、金時鐘の頭にはそのことがないわけでもあるまい。しかし日本の詩人たちを韓国に招く橋渡しをすることが実にあぶなっかしいと評されるのは、解るようで解らない文脈である。やはりこの呼吸らしきものは、同国人でなければうまく通じないところであろうか。「それかあらぬか、本国との在りように絡んだ作品は崔氏の詩にはほとんどない。あるいは崔氏自身が本国の在りようには早くから見切りをつけていたかも知れない、と思えるほど、云々」。これは直ぐ後に続く文章だが、物事の難しさを伝える消息とも思える。

崔華國は韓国人として日本に住み、日本語で詩を書いている詩人である。この事実が、金時鐘をしてもって回ったややこしい表現で実体を捉えようとする姿勢をとらせているのではないか。

それはそれとして、金時鐘は「と思えるほど」のあとは、崔氏の詩そのものの高い評価、つまり賞讃に言葉に移すのである。

「その分自由闊達に伝承の気風や韓国人、とりわけ出身地の慶尚道人気質を、日本語そのものを異化せんばかりに躍動させて余すところがない。まったくもって稀に見る言語才能である。私も常々、在日朝鮮人語としての日本語を口にしてきたものではあるが、それに最もふさわしい日本語が、崔華國氏のよどみない詩の言葉に昇華している」

これで見ると、日本語を詩の分野で異化させることが崔さんの特技であり、功績であるかの如く受け取られかねないが、どうも旧式な私は異化という批評上の用語がよく解らない。時代の変遷で使われるようになった言葉であろうが、異様に変化することを言うのだと解しておきたい。日本の詩人が余り使いたがらない言葉を、思い切りよく使うのが崔さんである。

まだ書きたいことはあるが既に長すぎたので、この辺で談義を終りにするが、折角だから、会田綱雄という詩人が崔華國の傑作と推奨している詩篇「洛東江」を出しておこう。

四十になったら詩を書くよ
四十はあまりにも遥かな世界で
私とは一生関係がない。
そしたら 詩が書けないでも済む
という計算を
私は秘かにしたのだろうか

その四十を乗り越えて
さらに二十年 私は
君が毛嫌いしたこの国で
意味の少ない年輪を重ねているのだ

秋の湖ほどに深く澄んだ瞳の汝^{なれ}
汝^ながために
みじめな祖国までがかがやいて見えた
うれしきひとよ
オールを漕ぐ私の腕に 頬^{なれ}ずりした汝
実は 詩なんかどうでもよかったか
四十になったら詩を書くという 嘘も
うれしきひとよ

ゆるやかな洛東江^{ナクトンガン}に
さんさんと秋の陽は降りそそぎ
雲はゆうゆう 江もゆうゆう
今も 洛東江は流れているか
あれから 四十年
詩はまだ書けないまま
汝^なが毛嫌いした国にいる

「角度を少し転じてお話申し上げると、実は近代精神の超克と同時に現代精神の脱却も必要ではないかと愚行する。現代精神とは何か。僕はこれを近代精神よりもより一層墮落したものではないかと考へるからであつて、なぜそういふ墮落が生れたかといふとききほどC君が現代の世界相といふものについて若干触れた所でも概略は御想像がつくであろうと思ひますが、つまり最大の敵はアメリカニズムではないかと思われるからであります。もう一つ奥を衝けば物質文明、機械文明の発達に如何にして人間精神は戦ふべきやといふ命題になると思われる。アメリカ流の個人主義とか、享樂主義とか世にいはれる所のものを根底においてはこれに関連があらう。更にこの物質文明、機械文明の高度の発達は金融資本家又は資本力の無統制な活躍に好個の舞台を与へるといふ因果をも孕んで進んで行く。この恐るべき波の流れと如何に闘つて、人間生活、国家生活を調節して行くかという課題だと思はれる。この点ではC君ともほぼ同一意見であります。だから近代精神の後にかりに現代精神とも呼ぶべきものが生れたが（ほぼ第一次大戦と第二次大戦の間に）これはより一層墮落した浅薄なものであり、寧ろ卑見を以てすればかの近代精神の方にはなほ尊敬すべきもの、継承すべきものも多々あると信ずるのであります。我々は日本人の民族的生理に合致した（思想は特有の生理を要求する）日本の古代精神と、その伝統の流れを継承すると同時に、西欧近代精神のたとへばニイチェにしる、ドストエフスキイにしる、トルストイにしる——これを決して輕蔑してはならぬと信ずるのであります。ニイチェなどは日本に果たしてどれだけ理解されているか甚だ疑はわしいものがある。「ドストエフスキイの人道主義も最早陳腐だからね」などという驚くべき曲解が今日なほ日本人の思想の通路で頻繁に行われてゐないと誰が断言できますか」

論述の終わりにあるニイチェやドストエフスキイ、トルストイに対する理解の程はともかく、「物質文明、機械文明の高度の発達は金融資本家又は資本力の無統制な活躍に好個の舞台を与へるといふ因果をも孕んで進んで行く」という津村の分身Bの認識は平成の現代にも繋がっているが、この金融資本は今やその上に国際が付く。金を動かして利潤を上げることは資本主義の最大の目的である。アメリカには一兆ドル以上の資産を持つ超富豪がいるそうだが、そんな大金を持ってどうするのか、と心配になるくらいだ。私のような貧乏人が他人ごとながら金持のことを心配すると言ったら大笑いになるだろうが、この心配は気の毒と思つてのことではない。その資本を何処に廻し何に使うかが気にかかるということである。Bは「この恐るべき波の流れと如何に闘つて、人間生活、国家生活を調節して行くかという課題だと思われる」と昭和十七年に言ったのだが、この課題に片がつくこれといった方向が打ち出されているわけではない。二十一世紀の我が豊葦原瑞穂の国では、なんとかの一つ覚えのように「デフレ脱却」が叫ばれているだけである。

本題に戻ろう。「近代の超克」座談会に参加した知識人のうち、小説家は林房雄だけである。林は亀井と同じ、官憲の弾圧で転向し、「文学界」同人として執筆活動をした文学者である。その提出された論文は「勤皇の心」で、表題からして時局の反映であることが判然とする。四章から成っているが、その第四章は林独自の見解で、その是非はともかく、文章に妙な勢いのあるところが面白いと言えば面白い。その辺を取り出してみよう。

「小泉八雲は外にあつて、日本の欧米化の危険を警告し、岡倉天心は「日本の理想」と「東洋の理想」をかゝげて内よりこれと戦ひ、内村鑑三は基督教の中に武士道の復活を靈感して、日本の腐敗を喰ひ止めようとした。

だが、これらの努力は空しかつた。世は滔々として金権の支配と俗物の跳梁に委かせられた。多くの文学者がこの戦ひに敗れて自殺した。「美と孤独」の中に逃れんとして逃れ得ず、陋巷に窮死した作家もある。純粹を頹廢と虚無の中に求めんとして、自ら身を破つた作家もあつた。ある者は文学そのものに絶望し、政

治に道を求めて政治の腐敗に驚き沈黙し去つた。ある者は良心の安息所を「新しき村」の中に求めようとして、空しく失敗した」

この文章には名前の出ている者と、省略されている者があるが、多くの文学者がこの戦いに破れて自殺したというは誰のことか。北村透谷が絶対の孤独に追いつめられて自殺したのは知られている。他に川上眉山、牧野信一、芥川龍之介らの自殺もあるが、多くの文学者がと言われても、他には思いつかない。小林多喜二のように官憲に虐殺された者もあった。「新しき村」と来れば、それが武者小路実篤を指すことは大抵の人には直ぐ判るだろう。「金権支配」だの「政治の腐敗」だのと言われると、昔も今も変りはないと思わざるを得ない。「百年河清を待つ」死語にならない不思議が現世という所であろうか。折角だから、今少し林の言うところを聞いてみよう。

「日本文学のこの痛ましい歴史は、日本の知識階級の苦闘と敗北の歴史である。明治大正期の青年たちが、何よりも強く文学に心を惹かれたのは、文学が彼等の心の代弁者であつたからである。かの日本の最悪の時代に、日本の俗化と日本の純潔性の喪失を嘆きつゝ戦つたのは、殆んど文学のみであつたかもしれぬ。文学の戦ひは弱かつた。だが、文学が必死で戦つたことは事実である。この故に、青年の心は、何の故とも知らず、文学に惹かれた。文学によつて己れの精神の純潔を防衛しようとしたのである」

ここまでは大筋において特に異様な気配はないが、次の段になるとこの小説家の態度は急変する。まるでデマゴグの論述を読むような気分させられるのである。太平洋戦争が終つて七十年近くなる今だから、歴史的証言としての面白さが増すというもので、後年の識者から「呪われた座談会」と酷評されるのも無理からぬ内容があるのである。長いが引用する。

「然るに、不幸なるかな、世の腐敗とともに文学の腐敗もまた速やかであつた。いや、自然主義の文学は、最初からその体内に猛毒を含んでゐた。人間の獣化、神の否定、合理主義、主我主義、個人主義がその旗印であつた。その後現れた文学諸流派を、これらの要素のどれか一つを身につけてゐないものはなかつた。更に不幸なることは、彼らの採り上げた武器は西洋の精神であつた。彼等は知らずして、西洋に教えられた主義と流派によつて、日本の俗化と戦はうとした。一切を捨て去つて、日本それ自体に帰る精神によつて、日本の悪と戦はんとするものではなかつた。例へば、下り列車に乗つて東京に向はんとするものである。進めば進むほど、皇都よりの距離はますます遠くなる。

その例の最も顕著なるものがプロレタリア文学である。この文学が発生に於いて、一種の憂国の志を持つてゐなかつたとは言へない。資本主義の害悪が極度に達し、政党と財閥が国を私せんとし、天皇機関説は黙認され、外国の謀略は日本の軍備をすら無力化せんとし、都会と農村の勤労階級は窮乏の底にあつて、国の滅ぶ日や近しと思はれたとき、左翼運動が起り、これに伴つてプロレタリア文学も起つた。職業的な左翼運動者は別として、この運動に参加した多くの純真な青年たちが、こゝに救国の道ありと信じたことは疑へない。

だが、彼等の武器は何であつたか。言ふまでもない。一切がしかも徹底的に外国よりの借り物であつた。クロボトキンでありバクーニンであり、最後にはレーニンでありスターリンであつた。彼らが救国の武器として取り上げたものは、最初より亡国の武器であつた。自然主義の場合よりも、この場合の過誤と害毒は一層顕著である。自然主義及びそれに前後する文学には、公然たる国体否定論者は少なかつた。自然主義者でありながら、同時に日本主義を唱えた作家すらあつた。だが、左翼主義者は最初より国体否定論者であつた。この点に左翼の許す可からざる過誤と大罪悪がある。

私もその左翼人の一人であつた。我が罪の大きさにをのきつゝ、今この文章を草しつゝあるのであるが、我が心の歴史をふりかへつて、我をして左翼に到らしめた原因はいづこにあるかと三思するとき、それは明治中期以降の文学であつたと論決せざるを得ないのである。

神の否定、人間獣化、合理主義、主我主義、個人主義の行きつく道は、当然、「神国日本」の否定である。

日本の現代文学者は半ばは無意識に、半ばは意識してこの道を歩いた。かくして、青年をあやまり、国をあやまつた。この罪は何によつて購うべきか。何によつてつぐなふことができるか。

罪深き我等は死ぬよりほかに道はないかもしれぬ。だが、日本の神は国民にその罪の故に死ねとは仰せられぬ。

罪と穢れの夜見の国に迷ひ入った国民に対しては、夜見よりかへれ、よみがへれ、而して国の伝統の清冽なる流のただ中に禊せよと仰せられる」

ここで一服しよう。「国の伝統の清冽なる流のただ中に禊せよ」という神の言葉に、私は昔を思い出さざるを得なかった。昔と言っても田舎の中学生であった時のことで、卒業記念のアルバムに禊の一齣が残っているのである。私は何十年ぶりかにそこを開いて見た。裸で坊主頭の少年たちが川の中に群をなしてしゃがんでいる白黒の写真である。当時、伯耆大山の麓に大山訓練所という兵舎まがいの古い木造の建物があって、夏時分そこに生徒が一週間ばかり宿泊して開拓事業の訓練を受けるのである。汗をかき土まめれになるので、訓練が終るとみんな裸になって川に入るのだが、それが儀式の形をとるのであった。キリスト教なら祈りの終りにアーメンを唱えるが、禊は何やら呪文のようなものが唱えられ、最後に「彌栄（いくさか）！」と一斉に叫ぶのである。私の覚えているのはその「彌栄！」と、私と同じ村の者が、この訓練が面白くないので、「ここは文化果つる所だ」と言ったために教師に叱られたことだけである。禊の写真に日付はないが、五年生の夏の筈だから昭和十七年の事である。つまり、林房雄が「近代の超克」座談会のために論文を書いていた頃かも知れないのである。

横道にそれたが、林房雄の「勤皇の心」の論調は熱を帯びるばかりで、「彌栄！」の音程に達するところまで進行する。行きがかり上、長くはあるがその志士的な雄弁を聞いてみよう。

「このありがたき御声に従ひ、神と、天皇の前にひざまづき、我が罪業の深さを自覚するとき、我が胸、我が腹、我が四肢五体のすみずみより、ほのぼのと葦芽の如く芽生え出るもの、これぞ、この心こそ、勤皇の心である。

岩間に湧く清水の如く精冷にして透明なる心、地底に燃ゆる火の如く、渾一にして激烈なる心、私なく人なく、ただ神と天皇の存在のみ在はします大事業を知る心。

単なる愛国ではない。単なる憂国でもない。勤皇の心を知らざる愛国者と憂国者は、いつでもその逆のものに転ずることができる。

我が罪業の深さを知り、個と私の一切を捨てて日本の神の前にひざまづいた境地に生まれた勤皇、その心のみが、まことの愛国者、まことの憂国者をつくるのである。

文学のよみがへりも、またこの道よりほかにない。単なる純粹、単なる孤高、単なる非妥協は文学を救ひ道ではない。文学を正しき姿にかへす道ではない。

文学の俗流化に対して戦つて来た日本の「純文学」が現在陥つてゐる畸形極まる姿は、ただ勤皇の心の欠如といふことによつてのみ説明出来る。彼らは純粹であり孤高であり非妥協でもあつた。だが、勤皇の心を知らざるが故に、世の俗化と徹底的に戦ひ抜くことができず、ある者は中途にして金権に屈して通俗売文業者となり、ある者はロシア人となり、ある者はフランス人となり、ある者は愚痴を売り物の泣言作家となり、ある者は御用専門の国策文学者になつてしまつた。文学の純粹はどこにもない。文学者の自信はどこにもなくなつた。文弱の時代である。青年を毒し、国民の自信を奪ふ亡国文学の時代である。

「日本の文学よ、お前の本然の姿をとりかへせ。お前こそ国の子である。国によつて生れ、国を榮えしめる雄々しい息子である。日本文学の正しい血縁と道統を継げ。現代文学の一切の汚穢を拒絶せよ。文学の求むるまことの純粹は勤皇の心の中にある。お前の心の中のこの心のみを育てよ。右を見るな、左を見るな。ただ一筋にこの心の示す道を歩め」

これぞ我が祈り。日本の神々よ 我が貧しき祈りを聞きとゞけ給へ」

林は日本の神々をこよなく崇め且つ頼りにしているが、その点は外国と言えども同じである。どの国だって自国の神は絶大な信仰を集めるのだ。戦争は国の権威を代表する神対神の闘争で、今もイスラムの神と欧米の神が戦っていることは世界中が知っている事実である。林は文永、弘安の役で威力を見せた高天原の神に、抑揚をつけた詩的な言葉で祈っているのだが、今次の太平洋戦争では欧米の神の力の方が優って、極東の瑞穂の国は敢えなく敗北を喫したのであった。つまり、この国は「近代の超克」に失敗したのである。

一体、近代とは何時のことか。辞書を見ると、「日本史では普通、明治維新から第二次大戦終結までを言う」とある。鎖国が終って文明開化が始まり、そこで自国と欧米との文化文明の落差を思い知らされることになるのである。明治政府が取り組んだ基本的理念は、「富国強兵」つまり「西欧に追いつき追い越せ」であった。その成果が日清、日露の戦役での勝利である。が、これは進行表で言えば追いついたのであって、追い越したのではなかった。やがて「近代の超克」が叫ばれる所以である。では、どうやって西欧を追い越すのか。広いアジアに蔓延っている欧米の勢力を追い払い、日本がその盟主になることである。それが大東亜共栄圏構想であった。その準備として各界の協力、協賛を求めなくてはならない。芸術、文学などの文化の面で動いたのが、大がかりな「近代の超克」座談会という次第である。

二日間にわたるその座談会は、河上徹太郎の司会で行われたのだが、今頃になって読んだせいか、たいして面白くはなかった。日本精神だの古典だのという言葉が目につくが、今や空疎の感を免れない。哲学者、音楽家、宗教学者も交ざった座談会だから、記録を読む私のような世間の狭い者には、残念ながら煩雑な会話に聞こえる。

一方、一冊の著作としてまとめられたこの本の中で、論文を書いていないのは小林秀雄だけである。もう一人鈴木成高がいるが、この人は単行本にする際、自分の論文の掲載を拒絶したと、座談会出席者ではない評論家の竹内好が、この座談会の総評の中で書いている。座談会の進行が気に食わなかったらしいという推測である。

それはともかく、論文を出していない小林は、二日目の席では河上との受け答えでこんなことをいうのである。(つづく)

河上 僕なんか文壇では悪文家だが、つまり文章というものは、亀井君の先刻言った言葉で言えば全人的、小林君の言葉でいえば魂の向上ですが、そういうものを目指せば自然に分り易くなると思って居る。特に平易化通俗化を目指す必要はない。だから吉満君のいわれる深刻な真理性の追求も、それが真剣で本物である限りに於て、自然平易な名文を目指していきつゝあると思っていゝのだと思う。

小林 平易につとめて書くという事に賛成するわけではない。例えばベルクソンは平易だが、そう努めているわけではない。つまり、通俗的ではない。従って明晰だが理解に容易というわけではない。ただ、僕にあの人が興味あるのは、哲学者の伝統的な言葉使いから全く逃れて物をはっきり言っている処です。専門語というものは、実証的な科学を土台とした概念規定の実にはっきりした言葉に限っているという処だ。ある一つの言葉のはっきりした意味を知るのにも哲学史に関する莫大な予備智識を必要とする。そういう言葉を使っていない。そしていよいよ言語に絶するものにぶつからねばならぬ（これは形而上学の宿命だが）場合は、はっきりと文学的なスタイルに頼って書いている。

これは吉満義彦の哲学論文の解り難さから出て来た議論で、世の哲学者たちはいざ知らず、普通では歯が立たない論文なので、何とか少し解るように書けないものかという注文である。そこで小林がお手本としてベルクソンを出したという次第になるのだが、確かにベルクソンの文章は一般にも解る文学的なスタイルで書かれているのである。私は小林の発言から今頃になって、ベルクソンの論文のうち「道徳と宗教の二つの源泉」を俄か勉強で読んでみたのだが、なかなか面白く所謂教えられるところ多々で、しかも得るところは更にあつた。余談ながら、挟み込みの月報の対談の中にこんなところがあつた。

「ベルクソンがユネスコの前身の、国際連盟の知的協力国際委員会の議長をしていたときに（一九二二―二五）、新渡戸博士は国際連盟の事務局次長として、知的協力国際委員会の事務局長でもあつたんです。ですから、それはベルクソンと新渡戸博士のコンビで成り立っていたわけです。そのために「東西相触れて」には、かなり長い一章がベルクソンにさかれています。おふたりは年ごろも似ておられるし、肝胆相照らされたらしく、非常に深く交際をしておられたことが書いてあるんです。新渡戸博士は、非常に興味をもっていたジャンヌ＝ダルクについて、ベルクソンと論じているんですが、そのなかで、ベルクソンはミスティックということばを使っているんです。自分は神ということばはなかなか使わないけれども、人間の能力が最高頂に達したときの状態、それを宗教、あるいはミスティックとよんでいいかどうか模索している。

それからもう一つ、パリのある社交界の宴会の席上で、新渡戸博士の隣にいた日本に詳しいアメリカの婦人がそっと博士の耳にささやいて、「ベルクソンさんを御覧になって。あの方はこんな社交界にいる人じゃありません。あの方に日本の坊さんの衣を着せたら、京都とか鎌倉にいる高僧とそっくりじゃありませんか。そのほうがずっと似合いませんか？」というんです。

日本人とのそういう深い出会いとしては、ほかに西田先生、九鬼先生がいらっしやいますね」（前田陽一 東大教授）

日本通らしいアメリカ婦人が寺の偉い坊さんに擬したこのフランスの哲学者は奇しくも、日本の年号で言うと昭和十六年、つまり、「近代の超克」座談会の一年前に世を去っているのである。もし後々まで生きていて座談会の記録や論文を読んだら、どのように総括するであろうか。今や想像するまでもないことだ。先ほど触れた竹内好が昭和三十四年に書いた論文「近代の超克」を読めば、この座談会の悪名の高さの拠つて来たところが知れよう。

私はそれよりも、その座談会に出席が予定されていたながら欠席した保田與重郎について、外野席の見物

人的立場で一言触れてみたい。保田は恐らく「近代の超克」座談会に出席するのが最も相応しい人物であるように思えるのだが、それが現れないのだから不審の一語に尽きよう。実は昭和十七年に先立つこと五年、即ち昭和十二年の「新潮」四月号に、時局に合わせた文学者の座談会記録が載っており、その中で保田與重郎が批判されている所がある。しかもその同じ雑誌に保田の論文が掲載されているので、それだけでも時勢が感じられるというものだ。座談会の見出しは「日本精神及び文化とは何か」になっていて、出席者は次の通りである。

「徳田秋聲、河上徹太郎、春山行夫、稲垣鷹穂、武田麟太郎、杉山平助、窪川鶴次郎、広津和郎、中村武羅夫（司会）」

昭和十二年四月は支那事変の始まる三カ月前だから、まだ煙硝の臭いはしない。しかし保田與重郎の日本精神は匂い立っているのである。座談会から保田批判の発言を聞いてみよう。論題は「明治の精神」とある。

窪川 それは保田與重郎の「明治の精神」なんかに非常に露骨に現れている。例えば岡倉覚三なり内村鑑三という人物を借りて来て、日本は最もよく東洋の芸術を保存したとか、最もよく古来からの伝統を保存しているとか、その精神を発揮したとか、それはあの歴史を実証的に検討して、そういう事実を指摘して、それが今日の我々の生活の中で、どういう意義を持っているか、そういう意味で云うならば、勿論、それが事実なら、それは非常に結構だし、賛成だと思うのだ。しかしそうではなくて、支那も亡びた、印度も亡びた、朝鮮も亡びた、満州も亡びた、しかし、日本だけは今日東亜の盟主として古来の芸術、東洋の生活を保存している。そこから一つの日本に対するプライドを昂揚しようというような、そういう態度というものは、非常にはっきり何というか、大アジア主義か、何か、今云われたような今日の政治的な動向を根拠としたものとして、はっきりと文学上の精神を示していると思う。あんなのでは岡倉覚三なり内村鑑三の事業の内容をちっとも分析していないし、岡倉という人間のあの時代に於ける活動の意義というものも別に全面的に見ている訳でなくて、只、或る一つの側面、日露戦争なら日露戦争の勝利後の昂揚した・・・

武田 国民が全体的に昂揚した、一切の階級を含めて・・・

窪川 その一側面だけを今日の情勢と結びつけてエンファサイズしている。若し、日本固有というものに僕らが本当に眼を向けるならば、例えば万葉時代の日本固有のものと明治時代の日本固有のものとは違うし、足利時代と徳川時代とは全然違うし、時代によって、日本固有というものは違うと思う。その各時代に発揮された日本の民族のものとして、文化として保存し、発展させて来たそういう各時代特有の日本固有のものの公約数としての、つまり各時代の固有的なものを一貫してそこに日本固有のものが、他民族の文化との対照に於てあると思うですね。しかしそれは、各時代の固有なものをはっきりと差別的に認識した上でなければ、そういう公約数としての日本固有のものは出て来ないと思う。だけれど、そういう風な意味の日本固有のものでなくて日本精神というものをただ仮に想定して、それぞれの発現としての日本固有なものという風な意味に今云われている向きが随分あると思う。万葉や何かについての関心というものも、万葉時代の固有なものへの関心という風にだけどの程度に見られているか、まだ余りはっきりしないと思うけれども、そういう何か日本精神というようなものも、ずっと歴史を年代的に過去へ遡って、どこ迄も所謂逆行的に日本の歴史を描いて行ってみると、結局は動物と人間と変わらないものか、或はまだ日本の島に殆んど人間がないような、ただ日本という列島のあるだけの、そういう所に行ってしまうことになる。だから、日本精神というようなものも、若し仮に只、想定された日本精神というものなら結局、何も無い所に到着せざるを得ないと思う。ところがその仮に想定された日本精神が、究極にはそれに対して我々が何ら発言出来ないものだとされるならば、いろいろそこに問題があると思うのですけれども。

河上 保田君の気持なんかも、やはり「明治精神」なんていうことを云いだすのは、明治維新の中にある文

明開化という思想ね、それであの人の何というか、あの人のインタナショナルの文学精神を象徴したい、そういうものがあるでしょう。

春山 しかしそれが、保田君の場合なんか、今日の世界を動かしている思想とか文学とかいうものに対する関心が、僕は、かなり狭いものじゃないかと思うのです。それだけに一番現在では、そういうグループの中では純粹に見えているだけのことじゃないかしらん。それでこの前のスペイン文化の破壊に対する問題でも、それからナチスの文化統制に対する場合でも、彼は材料として、我々が直覚的に連想するものとは随分違うものを持って来る。例えばいつも前世紀のゲーテを持って来たり、ハイネを持って来たりする。ああいう大掛りなものを持って来るのは、あれ以外に彼は時代の動きを知らないのじゃないか、としか思われぬ。そういう点で行くと、同じ考え方や流れに沿っていても、横光氏なんかになると、もっと今日の西洋の直接のものを持って来るから、そこに非常に混沌としたものが、西洋臭いものが渦巻いている。そういうところが、保田君と横光氏とでは大分距離があると思う。

河上 若いですよ、保田という人は、そういう点は。

春山 そういうことを、誰か批評的に修正する人が出て来れば、いいけれども、あれが今日の若い人達の考え方の標準になるとか、乃至は今の時代の一つの思想の行き着く何か暗示を持っているという風に考えることはどうかと思う。僕は今の青年は、ああいう風に考えてはならない——そのもの自身がなんらかの意味で、すぐれていても——と言う人も出て来ていいと思う。保田君が何を言おうと、それは保田君の自由だから、それを言うなということは何論言えない。ただ、保田君を取上げる人の取上げ方が、少し今日の時代の動きから見て、採点が甘いように思われる。

河上 それはもう、僕もあの人の池谷賞受賞の推薦理由の中にも、はっきりと書いて置いたつもりです。

窪川 とに角、ああいう論文が文壇の関心的になるというのは、僕は少し可笑しいと思う。ああいう種類の評論というものが。

—中略—

春山 日本の文学者の動きは、思想や文学が本位でなく、どうもグループ本位、勢力本位のようになってくるのはいけない。だから、極く一時的な現象に左右されているような印象を与えやすい。これは日本の一番特有の現象だと思うのです。とに角、逆も流行ったものが急に一人も発言しなくなったりするようなことがある。

以上の発言を聞く限りでは、保田與重郎の評判は芳しくない。私は生れ合せが悪かったのか良かったのか、昭和十二年は小学六年生で、文壇のことなど知る由もないのである。それこそ文化果つる僻地にいたのだから、もう少し年齢が上であったとしても、この座談に出ている人達は元より、保田のヤの字も知らなかったであろう。だから当時の学生や青年のように、保田の思想なるものに魅かれたり、かぶれたりすることもなかったのである。その保田の文章をようやく今頃になって読む機会を得たのは有難いことかどうか。過去を知る上では、奇縁とすべきであろう。前述したように、その「新潮」四月号には「世界各国文学性格と特徴」と題した項目があり、日本、ドイツ、ロシア、フランス、イギリス五国が取上げられ、日本の文学を保田與重郎が「混乱は展げない」の見出しで執筆しているのである。この一篇を以て、読んでもいない他の作品にまで口を挟むつもりはないが、読んだ限りでは成程と頷けるところのある論評であった。どことなく粗っぽさがあり、それで作者の気性が窺えなくもない文章の展開で、「混乱は展げない」というテーマがその反映であると言ってもよさそうである。日本の文学の性格と特徴がどう捉えられているかをその文章に辿ると、どうやらそれは当時の文壇批判に行き着くのである。その批判が保田らしいのかも知れない。楽しむと言っては語弊があるが、らしきのめぼしい所を拾い出してみよう。

「近頃「日本的なもの」の議論が流行している。そして僕などその発想者の一人と云われている。一般に内

容論に入る前に掛け声があられ、掛け声の否定が行われている。残念に思うのはこの文壇の問題処理法である」

これが論考の書き出しである。このあと伊豆公夫の論文に関して数行所感が述べられ、次のような議論の展開になるのである。

「ぼくはきょうのそのかみの左翼の人々にあまり関心がなくなりそうである。東京帝国大学で作られた左翼には、どこか官僚養成所の産物の感じがする。その同時代の人々がきょうの殺伐な独裁派の新官僚とかである、という噂をきくときなるほどと思う」

解り難い文脈である。左翼も色々な系列があって可笑しくはないが、「東京帝国大学で作られた左翼云々」と問題をあげつらうところを見ると、保田は自分を東京帝国大学で作られた右翼と見立てているように見えなくもない。次の文章を読むといい。

「亀井勝一郎君が「新潮」先月号で「日本的なものの将来」ということを語り、タウトに「日本の伝統を外人によって示される悲しさを告白した日本人が多かったということをかいている。僕はそれを読んで、本当にそうであったかと思って、亀井氏にそう見えた現状の方を悲しんだ。タウトは確かに古典を見たのである。同時にタウトは日本人を軽蔑した、僕はそのことの方に立腹を感じた。しかしそれはタウトに対してでなく、日本の現状に対してである。そして僕は「タウトの本をよくよんで、外国芸術を語る勇気を失った」とかいた。タウトは古典を語ったが、「日本の古典」を現代のためにはやはり理解しきれなかったのである。それはタウトほどにも深く日本の知識階級など大ていもたない教養さえ、我らの古典日本の理解としては心細い限りであるという意味のことばである。亀井氏もそう語っている」

亀井は保田と同じ日本浪漫派であるから、呼吸が合うのも不思議はない。「ところで」と保田は言う。「三波利夫氏は僕のことばを誤解した。しかし三波氏が僕をやった文章にはむしろ好感が味えた」

私は残念ながら三波利夫がどんな人か全く知らない。勿論知らなくて構わないにしても、折角名前を出すくらいなら、「好感が味えた」と言う文章を一行でも出してよさそうなものだ。思わせぶりを感じさせるところが保田らしさであろうか。

それはともかく、この論客は亀井を立てて論陣を張る。

「亀井氏はこの文章の中で「現代教養の混乱を一概に悲観する必要はない」と云っている。しかし僕は悲観する。これは大きい悲観である。外、漱石はむしろ僕にその悲観を実証してくれる。西田博士のゲーテ論が面白いと語り合ったことは、むしろ僕のつもりでは、日本の独逸文学者のかくゲーテが余りにもなっていないかったという意味であった。それはあたかも佐藤春夫氏の古いもののあわれを述べた「風流論」が日本の近頃の国文学者のかくものと較べられぬ近代の美的精神の記述である、ということと同じである。亀井氏が「我々が日本の古典を愛するのは、美しいから愛するのであって、日本のもの故愛するのではない」云々、ここに極めて当然な日本浪漫派の主張してき、まさに実行してきた、系譜樹立の心がある」

保田はここまでの文章の中で、タウトにかこつけて「悲しんだ」と言ったり、亀井の発言を引合いに出して「僕は悲観する」と感情を露わにしているが、私はそれで不図、田舎の中学生の頃に国漢の教師が「お前たちの作文を読んでいると情けなくなる」と慨嘆したのを思い出した。それも「悲しんだ」や「悲観する」と同じ系列の感情ではないのか。保田はきっと、そんなのとは次元が違うと言うであろう。そう思わせる文章が次に来るのである。(つづく)

「しかし僕らは日本のものに必要を感じた。そういうことは、実行されたそのものについて批判すべきである。きょうの批判者はすべて怠慢であり怯懦であるから、そういう批判者の仕事を努めずに、そういう考え方が封建的だとか、ファツシヨだとか、と済している。だがそういう云い方は、歴史の成果をただ一方的に抹殺せんとするファシズムである。僕らは世界文化を愛する如く、日本人の世界文化を愛している」「愛している」とは何という恐ろしい感情の表現であろう。大抵の人間は、これにしてやられてしまうのである。

保田はここにファシズムという言葉を使っているが、この数行で進める理屈は難解である。「歴史の成果をただ一方的に抹殺せんとする」ファシズムというが、勿論この歴史は日本の歴史であろう。どんな歴史の成果であったのか、具体的には何も触れられていない。これでは蟹気楼の議論になってしまうではないか。

左がかっているわけでもない保田はどうしてファシズムなる言葉を活用しているのか。ファシズムはイタリア国ムッソリーニの政治体制で、歴史の年表を見ると、保田がこの小論文を書いた前年の昭和十一年十一月二十五日に、日独伊防共協定調印とある。ドイツはヒットラーのナチズム体制だが、これもイタリアと同じ独裁である。日本には独裁者と云えるほどの政治家はいなかったが、陰の独裁者はいたと言ってよい。つまり軍国主義そのものが独裁者であった。「撃ちてし止まん」という呪文のような標語が、やがて高く掲げられるようになるのである。そういう方向へ国民の感情を牽引して行くことが美しい日本文化を守ることに通じる、というのが浪漫派の目指すところであったと言ったら、言いすぎになるろうか。

そういう大がかりな言い方はさて置き、文壇という特殊な村社会に対する保田の威勢のいい発言ぶりを聞いてみよう。

「少なくともきょうの日本研究の必要を説いた言葉の中で、その内容を示したものは、寥々としている。ただ日本研究を如何にせよ、とか、今日の日本研究とは何か、何ゆえそれが流行するのか、はっきりいえばそれらの内容とする古典については何も知らないが、流行心理はわかる、文壇的批評は出来る、と云った手合が、その流行を作っている。わるい文壇である。そういう文壇のために、系譜の樹立が必要である。日本の文壇の問題はいつもそういうもので、きょうもよみうり新聞を見ていて、短篇長篇を論じた文章の中で「ここが問題で」という文句にあったが、僕は吹き出したのである。問題とは文化の問題でなく、市場のかけ引であったからである」

読者であるこちらの察しの悪さを見越していることは、「吹き出さざるを得ない文章」を一つも呈示しないで、相手を歯牙にかけていることで見て取れる。そこに保田の批評に於ける自信過剰と受け取れる威勢のよさがある。保田の熱情は自信が造り出す熱である。その熱に菌がつけば熱病になる危険性がある。彼は既に保菌者であった。と言えるのは、昭和十二年から七十年以上も過ぎた今だからである。やはり歴史上の過去は興味をそそるものがあるのだ。

「世の中の混乱期には歴史研究がさかえるのである。今日それを否定し、萌芽に於てつみとろうとする人々がいる。萌芽そのものがファツシヨであるとの批評をした。凡そ彼らは批評家でなくして、預言者である。むしろ大道の売卜者である。かかる売卜者には水商売のものと投機業者がひっかかる。我我は迷信を信じない。また混乱期には、一切の行動や批判を中止して、ひたすら念仏のごとく社会進化の理法を念じておれ、という説もある。僕はきょうの不自由の中にも、日本の朝野に啓蒙家の道坦々と展けていると信じる。きょうの中年以上の年配の進歩家は、日本が極めてヨーロッパ文化に洗礼され、ヨーロッパ文化々されたと信じている。自分をその一人と思っている。僕ら青年はその内容を吟味し、観点を反省し、その結論を

悉く否定する。その人々が自分をその意味での近代精神の持主と思い込んでいることを悉く否定する」

既述の「近代の超克」論文で津村秀夫は盛んにアメリカニズムを排撃したが、あの座談会の企画が昭和十二年であったとしたら、まだ日米開戦に至っていないから、恐らく津村或は林房雄はヨーロッパ文化の影響に目を向けて、その排撃を目論んだことであろう。

ヨーロッパ文化と言え、この私との関わりでは中学の授業に英語があつたくらいで、町や村にキリスト教文化が浸透していたわけではなかった。中学生は脚にゲートルを巻き、軍事教練で油を絞られていたのが実情であった。保田が嘆き悲しむ程にヨーロッパ文化の洗礼を受けていたのは東京のような大都会であったのか、或は外国の文物に取組んでいた人達だったのか。そういう人達は国民にとって指導的立場にあるので、それが世の中に及ぼす影響を懸念したのか。「撃ちてし止まん」の精神からは、なるほどヨーロッパ文化は日本にとって大きな障害と写るわけである。保田の、今となって見れば懐古的な日本精神の目立つ更なる御高説を聞いてみよう。

「僕らの出発はここから始まる。だから我々がいきなり「明治維新」の精神群にとびつくことは正しいのである。百度もくりかえし正しいのである。他でもなくそのことから日本文化一般の未開状態が理解され、その歴史的因由も知られると思われる。我々の文化が世界文化と精神のレベルに対していると思うことは、身のほど知らぬ大間違いである。ただ不思議にも、明治、大正、昭和を通じ文化芸文界を通じ数箇の世界人を生んだ。その間の事情を我々は鮮明ならしめるために、国史創建以来の歴史を考える。感傷的に民衆のためにをくりかえすことなら、県庁の屬吏でも平気で口にする、文をうるものはもっと専門業に於ては、謙遜であり、一人の労働者の報酬に比して恥じないの努力を費消すべきである。これは冗談ではない」

この部分は文意不明瞭である。「身のほど知らぬ大間違い」は国民に引っ掛けて言っているのであろう。だから「不思議にも」が奇跡のように成り立つのである。明治から昭和にかけて「文化芸文界を通じ数箇の世界人を生んだ」というが、その名前すら明かされていない。怪しいと思わざるを得ないが、こういう遣り方も保田の得手のうちかも知れない。その仕掛け方が次の展開に見られよう。

「如何に現代日本の文化が貧困しているか、僕は文芸評論界の例をあげる。たとえば明治以降一般的世界的レベルの作品は、漱石の「文芸評論」土居光知の「文学序説」のみである。しかも後者はやや下る。古きでは天心の諸作は前者にやや秀れている。しかも日本の若い文学者は多く天心が偉大な詩人であることを理解していない。小泉八雲の文芸論は、異国人のものである。ケイベルもこの中の一つと思えるが、このことは今は確信して云えない。その他はお山を賑わしもしたことであろうか。文学品としての文芸評論のないことも、一つの未開の状態である。そして日本の文壇人の大半は、批評家に現代小説の悪口を云うな、と云っている。政権獲得のために手段を選ばなかったという政党にしても、僕はそれ以上におおうて余りある功績を見る。文壇の言説の露骨な政策論には、政党の示した内容さえ示されていない」

よく見ると、保田は勿体ぶった言葉遣いで、ヨーロッパ文化を批判していると思わせかけながら、とどのつまりは自国の文化の状態に「未開」という評点をつけるのである。明治維新以来の西洋に追いつき追い越せ政策の成果が未だ十分に上がっていないというわけだ。保田はその辺のことを、漱石に続き外を引合いに出して論を進めるのである。

「僕らは日本の未開を見る。未開が即ち混乱であることを知る。この混乱は展げがたい。外に於てさえ展げなかったということは、決定的な事実である。ついに日本の新文化の日に、一つとして「日本の橋」が架けられなかったのである。論理に国際があるか否かが文壇の問題となっている。犬と人との間にさえ云えはわかる程度の訓練が出来るのだ、ないという説の人も、外国人にわからぬ島国日本などを云っているわけでない、そんなわかりきったところで問題をもつれさして喜ぶなど、卑俗な封建的精神である。美しく烈しい憤りを表現する代りに、憤りをこじらせるのは封建の世のなりわいである。論理の国際性が奴隷的關係で成立すまいというのも云うまでもない。おそらく横光利一氏さえ外国人の間では軽蔑されたことであ

ろう。その白人らの人種偏見が、氏の日本回復の中にうかぶようだ。僕らがロシア人を愛するのは、恐らくロシアの半アジア的状态が、白人種からさげすまれている、同病相憐れむ状態であることは、哀れな国際事情である。そして論理の国際性とは、むしろ日本のことばと西洋のロゴスの間に架橋することである。国際性がないということは、少くとも僕が日本武尊論の中でかいた限りでは、ついに新しい日本に於てその橋がなかった、架橋がなかったということである。偉大な不世出の外さえかけなづんだ橋である」

保田が「偉大な不世出」の文学者として誉めている外は、架橋というような言葉は使わないで、西洋に追いつく努力の姿を「普請中」と言った。「日本のことばと西洋のロゴスの間に架橋する」などと言われると、虹の架け橋のような幻想が浮ぶ。虹は美しいが儚く消える現象である。保田はまた、なんで「僕らがロシア人を愛するのは」などと、思わせぶりなことを言うのか。トルストイやチェーホフが好きだと言うのなら解る。日露戦争以来、「僕らはロシア人を愛する」と言えるほどの関係が両国にあるとは考えられないことである。保田の外国を見る感覚は私のような田舎者とは大いに違うが、ある意味でその言説は勉強になると言わざるを得ない。

先程の「日本精神及び文化とは何か」の座談会で、出席者の一人河上徹太郎は「若いですよ、保田という人は、そういう点では」と言ったが、その「若いですよ」の勢いがよく見えるところが続く。「かけなづんだ橋、僕は「明治の精神」の中で、「勝利の悲哀」としてかく、日露役後の人民の心にうかんだ悲哀が、その仮橋さえ流した。僕は自分だけが近代的インテリゲンチヤ顔した今の世の文筆家に憎悪する。「われわれインテリゲンチヤ」と彼ら呼んで憂鬱をとくのである。不幸にも僕ら二十世紀の日本の青年は、異国のもの書でよむ近代と現代をついに身を以て享受し得なかつた。明治始めの「人種改良論」は維新官僚の合作であるが、それに似た今日のインテリゲンチヤの文化論である。僕は新しい日本の橋のために、ついに仮橋とされた明治の人々をまず考える。二一天作の五と割ったような日本のインテリゲンチヤは僕はわびしく失望する。今日の日本文化の気質を代表する作家は誰か、残念ながら山本有三氏である」

ここにある保田の解りにくい論法で行くと、二十世紀の青年、特に昭和十二年頃までの青年は、「異国のもの書でよむ近代と現代をついに身を以て享受し得なかつた」ので、日本の文化に「わびしく失望する」ことになるらしい。当時の「日本文化の気質を代表する」作家として山本有三が挙げられているが、これは賞められているのか、けなされているのか。「わびしく失望する」という文脈からすると、賞められているとは受け取れないが如何なものか。

締め括りの文章を出そう。保田はここに当然のことながら、最も力をいれている。文壇の関心が集まるのも不思議はない。

「日本の現代から封建根性はなくなっていない。「新潮」さきの月の座談会を見れば、現代流行作家たちの戯作根性をよく示していて、僕は驚いた。彼らは自分らの小説を認めない評家を「小説に対して愛情のない評家」と呼び、自分らの小説を認めないものを繊弱な頭脳と云っている。この卑怯に大義名分を立てる根性は戯作者より劣等な封建勤番者の根性である。武田麟太郎氏や高見順氏の批評家に求めるところは、現在の流行文芸をすべて認めよ、批評家は批評精神などすてよという、説である。そのために現代に於ける小説再建時代の重要さということを伏線としている。こういう批評否定の心は、ナチの国の考えに近いものである。ナチの国では戦後国民文化の再建を計っているのに比し、日本の人民派は自分らの市場への計りごとであるとの異同はある。日本の人民派は「文学に対する愛情のある批評家」とは、現状文化と諸説界を肯定し、批判を抛棄して、娼婦の愛情売買にあたれと云っている、こういう宗教的売淫はたしかにむかし東西にあった文化遺産の封建的マイナスである。作家精神墮落の一典型であるが、これは一般に文壇の一つの潮流である。彼らは政治的悪時代ということ、自分らの小説擁護を人にしいる大義名分に利用する。世界のマルキストはこれを慷慨するがよい。彼らは「現在のような場合」といった。一見政治経済的文句を用いて、自分らの小説を人民精神の表現のごとく見せかけ、それを擁護の方便とする。左翼勢力が衰微

すると、かつての左翼的因縁や庶民根性が、時代的良心を食いものとする。むかしの民衆派の垂流が流行する。一等感傷的良心が食われるのである。残忍な商法である。これはたしかに悪い時代である。美しいけれど皮相な日本の良心である。そういう「日本的なもの」を僕らは否定する」

読み終わってみると、なんだか狐に化かされたような気分である。熱弁に聞こえたものは、世俗の言葉で言えばハツタリということであろう。「ナチの国」が出たり、「日本の人民派」、「世界のマルキスト」が出たりで、狭い舞台で大立ち回りを演じる構図だが、観念的な言葉ばかりの騒ぎで、迫ってくる実体はよく見えない。議会で大臣演説に聞き惚れたのはよいが、それを文章に直したのを読んだ時、言っていることが支離滅裂であるのに大臣の頭の悪さが知れた、という例を回想録に書いた新聞の政治記者が昔いたが、保田は言葉で人を煙に巻くのだから。決して頭は悪くはあるまい。むしろ頭が悪いのは、彼の言論に巻き込まれる側である。

一体、保田が否定する「日本的なもの」とは何を言うのか。「かつての左翼的因縁や庶民根性」なのか、「残忍な商法」なのか、「美しいけれども皮相な日本の良心」なのか。どうも全部らしい。否定は彼の当然の帰結であろうが、対極にあるのは肯定で、それがなければ世の中は成り立たない。この小論文はここで終わっているのだから、先がどうなるのか何とも言いようがない。

「近代の超克」のお陰でこんなところまで来てしまい、しかもこれ以上進めなくて尻切れトンぼになってしまったものの、どうも「日本的なもの」は、日本という国が地図の上に在り続ける限りは、我々日本人から離れることはなさそうである。特に政治情勢の変化で、国論の統一に迫られると、「日本の精神」だの「日本的なもの」といったテーマが浮上して来る。平成の現在に既にそれらしい風潮が漂い出していることは否めない。「現代の超克」座談会の準備もかなり進んでいるのではあるまいか。(了)

鬼頭のおばちゃん（鬼頭温泉・宮城県大崎市）

五月の終わりの鳴子温泉。湯治に来て三日間は寝てばかりいた。四日目になってようやく少し行動する気になり、バスで鬼頭（おにこうべ）へ。

間歇泉前というバス停で降り（四百円）、間歇泉には行かず地獄谷めぐりに。イワナの泳ぐきれいな小川に沿って、よく整備された階段や吊り橋、木道を歩きながらあちこちで吹き出す温泉を見て歩く。この川の下流には有名な滝壺の千人風呂があるらしい。

東北の春はゆっくり進行していて、吊り橋の上にはまだ藤の花が咲いていた。岩の裂け目からゴボゴボと熱湯の湧き出る不思議な光景を、ヤケドをしないように気をつけながらカメラに収め、木道の脇のベンチでおにぎりをひとつ食べた。仰ぎ見ると、逆光のため色濃く天をふさぐ新緑の木々の梢。思わず深呼吸。静かだ。

帰りはすぐに来るバスを捨てて、広い芝生のキャンプ場に沿って誰もいない道を歩く。白樺の向こうにはまだ雪渓の残る千メートル級の山々がグルッと望まれる。そうだ、ここ鬼頭はカルデラなのだ。

イタドリ、タラノメ、ワラビ…都会では有り難がる珍しい野草もここではただの路傍の草。きっと、この道端に生えている草ぐさは僕には分からないだけで有り難い山菜ばかりなんだろう。そのいくらでも生えている山野草を、いちいち感慨深く撮りながらゆっくり里に降りる。

橋本という集落のはずれ、分かれ道の角に茶店がある。初めて訪れたときにもちよっと寄った。店には誰もいない。店の回りを「こんにちは」と言いながらウロウロしていると、近くで作業をしていた女性がニコニコしながら「ハイハイ」と言って飛んで来た。店のおばちゃんだ。見覚えがある。

帰りのバスまでだいぶ間があるのでゴロゴロさせて…と言い、山菜そばを頼んだ。

おばちゃんは僕より年上と思われるが年齢不詳。会話も物腰も極めて軽快ですこぶる元気だ。店に並ぶ山菜についてあれこれたずねる。何でも教えてくれる。

話半ばで、僕に「何年？」と聞くので「昭和二十二年」と答えると、すかさずニヤツと笑って「コゾッコだな」と返して来た。初っぱなからやられた。

足下に生きたマムシの入ったペットボトルが二つ置いてある。おばちゃんが今朝捕まえたという。「こいつはナマで一万円」と誰か別の客に話している。

そうか一万円で売れるのか…でも買った人はどうするんだろう。そばには黄色い粉末が詰まった瓶が並べられて「マムシ三匹分」と書いてある。こちらはナマー匹に比べるとかなり安い。まさか養殖ということもあるまい。黄色い粉はお湯にでも溶かして飲むのだろうか。

「マムシは棒か何かで捕まえるんですか」と右手をチョキにして先の割れた棒のことを思いながら聞くと「なあに、足で踏んづけてヒョイだよ」と笑う。

「だけどね、こっちも気持ちが入らないとね。中途半端な気持ちではダメだ」と言う。

次々に来る客は一様に健康のために自然のものを求めている。自己主張も強い。ほとんど信仰というべきか。高いとも安いとも言わず、探し求めていたものにやっと出会ったという感じで嬉しそうに買っていく。

サービスでイワナの塩焼き付きとはいえ、山菜そばが千円というのはちょっと高いのではと思っている僕には驚きだ。メクラブドウというのも初耳だった。聞けば意外にも山奥ではなく平地のブドウだとか。食べても美味しくないが薬効は素晴らしいらしい。その焼酎漬けのあるのを聞いた仙台の人など、これは

ガンに効くんだ、と真剣にかなりのうんちくを僕に披露しながらやはり嬉しそうに買って行った。二千円。
こんな具合に客があるということは、この茶店はかなりの知名度のある手製生薬の専門店だ、おばちゃんは相当のエキスパートかつ実力者のようだ。
ヤレヤレと思っていた次のバスまでの一時間四十五分が、あっという間のひとときとなった。(完)

米沢のおばちゃん（滑川温泉・山形県米沢市）

平成十四年晩秋、鳴子（なるこ）温泉から米沢市山中の滑川（なめがわ）温泉へ移動。

新庄から米沢まで〈山形新幹線〉は満席。連結通路で立ちっぱなしだった。連休の最終日、しかも台風が近づいているので仕方ない。

大勢の人が立っている。ずっと遠くまで行かなくてはならないお年寄りが何人もいる。気の毒につきる。埼玉県の上尾まで行くという目の前の方には僕のスーツケースにかけてもらった。

乗り換えの米沢での待ち合わせは三十分。改札を出て立ちソバ屋さんでかけそばを食べる。安くて実においしい（三〇〇円）。明るいおそば屋さんの女性スタッフと話がはずむ。

どこに行くんですかと聞くので「滑川」と答えると、胸に内田という札を付けたいちばん若い女性スタッフが「子どものとき遠足で行きました」という。

「遠足ですか。歩いて？…あの辺りなんですか」と聞くと「山ん中ですよ」とちょっと恥ずかしそうにいう。

すかさず僕が「板谷？」と聞くと「そうです。よく知ってますね」と顔がほころぶ。

「板谷にはカネヨがありますよね。そこで働く方が多いんですか？」

「いいえ、むかしジーク（ム？）ライトっていう会社があったんですよ。ずいぶん人も住んでいて」

でも今はみんな去って駅も無人。

米沢からの各駅停車にはゆっくり着席。やがて巨大なスノーシェードに覆われ、昼なお暗い峠駅に着いた。構内踏切の向こうに送迎バスの運転手三浦さんの顔がある。杖をついてゆっくりゆっくり歩いて来たおばちゃんを乗せて出発。山道の風景はすっかり秋色を帯びていて、つい右・左と眺めてしまう。深い秋の風情に感激しながら宿の自室で一息。しかし寒い。やがて雨になる。

持参した炭を起こすが、匂いと煙が立ち込めるだけで何の足しにもならない。やはり持参した薄い寝袋を布団の間に入れて潜り込んでみるが、それでも眠れそうにない。仕方なく毛布を借りる（一六〇円）。

ひじ炉の五徳に鉄瓶を乗せ、一度でも室温の上がるのを期待しながら日記をつける。夕飯は残り物。新庄で買ったB級グルメグランプリの冷えた「牛バラ弁当」を肴に、ひとり酒盛り。

やがて廊下からコツンコツンとゆっくりゆっくり杖の音が聞こえる。ああ、あのおばちゃんだ。その晩は布団の中で何回かコツンコツンという音を聞いて寝た。

翌朝は台風の通過で怖いほどの風雨。廊下の角でぼったりおばちゃんと会う。

「おばちゃんは梗塞かなんかやっちゃったの？」と聞くと「ううん、事故」と答えて話し始めた。

「天気がいいもんだからお父ちゃんとワラビでも採りに行くかって出掛けてさあ」

「ワラビ採って降りて来たさ。そうしたら道にくぼみがあったんだなあ。枯れ葉がたまって分からなかったんさあ。タイヤがはまってなあ」

おばちゃんが勢い良くアクセルをふかすと、車は躍り上がってそして落ちた。

「もうわけがわからなくなっとな。脊椎打ったんだなあ。車から這い出すこともなんねえで。八時間もかかって手術して、十か月身動きできなかった」

「お父ちゃんがなあ、良く面倒見てくれてなあ。十四年も」

ご主人優しいんですね、お元気なんですか。と聞くと…

「四年前に死んだ。喉頭ガン」

ということは、おばちゃんはまだ十八年リハビリを続けていることになる。

「せがれがなあ、お母ちゃんもうお父ちゃんのこというな。忘れろって怒ってさあ」

おばちゃんはニコニコ笑いながら「良くしてくれてさあ」と繰り返す。ここの温泉はどうですかと聞くと、毎年四～五回来るとか。

「気持ちいいなあ。一日七回くらい入ってさあ」

おばちゃんは手提げひとつ。宿で自炊はしない。炊いた一合のご飯（一六〇円）を注文して済ましているようだ。お互い四泊の湯治、帰りのバスも一緒だった。運転手はいなせな三浦さん。

駅に着くと、僕は上り、彼女は下り。二分ほどおばちゃんが先に発つ。電車はホームのうしろの方に停車。おばちゃんは「あれっ」といってホームを歩き出す。でも早くは歩けない。

降りた客が大勢歩いて来る。小柄なおばちゃんが見え隠れする。ハラハラしていると、若い運転手が気づき降りて待っていてくれる。僕は座って去って行くおばちゃんの後ろ姿を見送る。

車を降りるとき、運転手の三浦さんが「こんだいつ来んだ」と二人に聞いた。

僕が「来年の連休明けかな」というと、おばちゃんも「んだなあ」といって笑っていた。(完)

新横浜駅裏の丘の上に住んで三十年余になる。引っ越してきたときは駅前に交番があるだけで、埃の舞い上がる茫々とした広場が空しく広がるばかりだった。さらに遠くまで田園風景が続いていて、大倉山の丘が指呼の間に見えていた。駅から見て左奥に、「愛旅館」すなわちラブホテルが建ち始めるとたちまちそのホテル街となった。

それがこの十数年前からビルが立ち並び、イベントホール「アリーナ」とプリンスホテルが目の届くところに建ち、サッカー競技場も駅の近くに出来た。丘の上に建つ我が家からは新幹線ホームを歩く人が見えていたが、いまではビルが建って見えなくなった。こちらはそんなつもりはなかったものの、気がついてみたら繁華街の目の前に住んでいたわけだ。

四十三階建てのプリンスホテルが建ったとき、その最上階まで建築が進んだと思ったら、数ヶ月間工事がストップしたままとなった。この円形の塔のような建物が傾いたというウワサだった。「ピサの斜塔」よろしく傾いたといわれてみると、確かに傾いて見えた。

これは穏やかならぬことになってきたと危ぶんだ。というのはわたしの家のほうへ倒れたら、確実に我が家つぶれてしまう。工事は半年くらい後れて完成し、営業を開始して二十数年経つが今のところなにとも起こっていない。そもそも新横浜の駅前は稲が実る田んぼが広がっていたところだ。毎年秋になるとすぐ近くを流れる鶴見川が氾濫して、我が家の近くまで水浸しとなったものだ。そんなところにビルなど建つはずがないと思っていた。ところがある年を境に続々ビルが建ち始めると、たちまちビルで埋め尽くされてしまった。

繁華街というものは、目的なくただ歩きまわるだけで嬉しい。わたしは灯点し頃ともなると街を一巡する。「三省堂」をはじめ大きな本屋が三軒もあって、覗いて歩くのも悪くない。大きな古本屋もあるし、「ユニクロ」から「ビックカメラ」と一通りなんでもある。そこを歩き交う人々を見ていると、いつまでも眺めていて飽きることがない。

駅前広場の左側に、地下一階から二階までパチンコとスロット、その上はビリヤードにカラオケという娯楽センターがある。いつも満員の盛況である。このビルの脇の路を小机方面に八十メートルほど行くと、プレハブ小屋があつて切符を売る窓みたいなものがついている。ここへ紳士淑女が一人また一人と四角い札の束を持ってやってくる。パチンコで勝利を収めて、得たチップを現金に交換する人々だ。その表情が見ものである。世の中にこれほど幸せそうな顔というものがあるだろうか。ときにハニカムのように、ときに無表情を装うように、ときにこみ上げる笑みに照れるように、なんと表現しようと幸せな顔とってこれにすぎたは無い。その表情も現金に交換するまでで、現金を受け取ってポケットに仕舞い込むと、何事もなかったようなシラケタ顔に戻って、そそくさと帰ってゆく。若い人はあまりいない。中年過ぎの人々で、インテリ風の人が結構多い。この人々に会うためにこの場所は新横浜一巡には欠かせない。

その路をさらに進むと、中心部から追いやられた愛旅館街となる。かつては駅の左手一帯がこれらの営業地だった。ホテルの造り・デザインに工夫を凝らし、貴族の住む館風あり、中世の城郭風ありとさまざまだ。そのネーミングにもどこか童話風なものが多い。これはひとりの乗用車にも共通していえるところが面白い。「小公子」(セドリック)「青い鳥」(ブルー・バード)とメルヘンチックなものに郷愁を感じる殿方が多いということであろう。

近くの子供がこれを遊園地と勘違いしても不思議はない。「あそこへ遊びに行きたいよう」とせがんだ子供に「あそこは大人になってから行くところですよ」と母親が諭した。これは我が家の周辺にだけ伝わる「笑い話」である。

ひとりのクルマとか愛旅館というものは、お城の王子様の気分を男たちに味わわせることを、表向きの売りとしてきた。いつか世知辛き現実から逃避して、メルヘンの世界に遊ぶ自分をメイクビリーブするという、浅墓な腰弁階級に迎合することによって商売が成り立ってきた。

ここに見られるのはあくまでも男中心ということだ。ところがこの事情がどうやら崩れかかってきたか、あるいはすでに崩れたような感じがしてきた。というよりも確信をもって逆転してしまったと思わせる現実が見られるのだ。

それはそこから帰ってくる男女の表情に、近頃著しい変化が見られるからだ。女の表情が底抜けに明るいのだ。男のほうはというと、呆然としている者あり、複雑な表情で前方を見詰めている者あり、ひとくちでいえば「負け犬」的である。以前の男は堂々として、女はその後から隠れるように歩いていたものだ。

ある日あるとき、すれ違う女たちのいずれも晴れ晴れとして、胸を張って歩いてくるのを見て正直驚いた。その明るい顔はパチンコに勝って現金交換所に向かう至福に満ちた慈顔とは別種の、心の底から突き抜けたような明るさなのだ。よく見ているうちにはっと気が付いた。パチンコに勝った中高年の男たちの幸せな表情には、顔の筋肉が下方へ下がる傾向があるのに対し、愛旅館から帰る女たちの晴れ晴れとした表情には、顔の筋肉が上方に向かっていることを発見した。

愛旅館で掃除専門に雇われているおばさんは、しきりに株の動向を気にしていた。株が大好きなのかと思ったらそうではなかった。部屋の掃除は客が入るとそのつどシートその他を取替え、お掃除をする。これが部屋ひとつについて幾らという稼ぎになっている。株が上昇すると使用量が増え、時によると何組も順番待ちということになる。株が下がるとたちまち客足が鈍り、空き室が増えておばさんの出番がなくなるというのだ。株が上がると景気がよくなり、性欲もより刺激され、具体的な行動に駆り立てる、という循環があるということになるらしい。

年々盛んになってきているハロウィンというお祭り騒ぎも、今年是一段と盛り上がった。新横浜周辺はまさにハロウィン一色となった。土曜日当日の数日前から始まっていて、連日派手な衣装を見ることができた。その当日の盛り上がりは想像以上で、ド派手なコスチュームとメイクで変身した女たちが大量に闊歩している。この日は生憎十一月下旬という寒い日だったにもかかわらず、肌もあらわなセクシーランジェリーの女もいて、光沢のあるエナメルで艶をむき出しにする。多くの女が顔その他にシールを貼り付けている。大きなキスマークを頬に貼り付けたり、太ももに蛇の模様を貼り付けていたり、タトゥを描いたりしている。開放感にあふれた女たちの明るい瞳・瞳・瞳、これらに圧倒され、拍手を送りたい気持ちだ。こうして仮面の世界に遊ぶことによって、日常から解放され、夢ウツツの中に自分を舞い躍らせている。警官が出動するほどの喧騒もなく、ほどほどに賑やかなところが心地よい空間を演出している。後から気付いたが、カボチャもトンガリ帽子もまったくといってもいいほど見かけなかった。本来の意味から逸脱させて日本化するという、お馴染みの行動様式が典型的に出ている。

新横浜は新興地として急激に発展してきたところなので、こうした先端を突っ走るようなモードがいくつからか集まってくる。かつての横須賀がそうだったように。それにしても今の若い女たちは体躯が大柄になり、スタイルがよくなり、顔の造りもメイク映えするようになってきた。その見事な肉体の盛り上がりを見ていると、ある種の恍惚感を感じる。

つい三十数年前までは田んぼだったところにいきなり出現した繁華街、そこに集散する人々は浮世離れしていて当然なのかもしれない。この地には魚屋・八百屋などの商店街もなければ、神社仏閣もなく、生活のおいがない。ビル街が広がっており、カフェ、飲み屋、外食産業、中小の会社、イベントホール、ラーメン博物館、サッカー場、ホテル群、これらがあたかも雑草のように地面から生えている。この地の変貌の仕方を見ていると、植生の変化と似ているように思えてきた。山火事でもあると、そこにまず雑草が生え、松林に変身し、やがて雑木林となり、広葉樹林帯へと変化してゆく。

新横浜駅の南側は高台で古い住宅街であり、ここから古代人の住居跡が発掘されている。駅の北側は低地で、近くを流れる鶴見川に沿って広がる田んぼは、弥生時代から続いてきたものである。さらに太古の時代はこの辺は海浜だったところなので、ちょっと掘れば貝塚が出てくる。その田んぼを埋め立てて土埃の舞い上がる広場ができると、そこへまず愛旅館が建ち始めて、たちまち駅前の左半分が愛旅館街と化した。その愛旅館がずっと奥のほうに追いやられると、そのビルはカラオケ店、居酒屋、ビジネスホテルへと転用され、やがてそれも建て替えられ、新しいビルも続々建って、有名企業も入ってきた。「富士通」は二つのビルを占拠し、かつて世界を席卷した「赤井電機」の本社も少し外れのビルの一角にはいる。新幹線停車駅の前という地の利と、部屋代の安さが宣伝されて、横浜の中心部から会社その他が引っ越してきた。

横浜の中心街といえば、伊勢佐木町、元町、関内、野毛といろいろあるけれど、それらは近年活気を失いつつあり、ある種の寂れがある。それに引き替え、新横浜は新興地として急激に発展してきたという活気がある。特に週末ともなると、得体の知れない人種が、それも若い女たちが大挙してやって来る。雑多にして軽薄、そして華美、これもひとつの生態系なのだと思う。

それでも繁華な通りに、早くも都会特有の憂愁のようなものがただよいだし、ちょっと横路に入れば、どこやら謎めいたラビリンスのような雰囲気も醸成されつつある。虚栄と淫靡の巷をうろついて、ユーターンする。丘をゆるゆると登って我が家に近づくと、何たる物憂さだろう。そして…ただケダルイ。(完)

芥川賞作家・又吉直樹氏が、その署名においてこれまでの芥川賞作家のなかで、一番稚拙だということが小さな話題となった。芥川賞作家なら一流の文学者らしく、荘重にして重厚な署名をするものだと思っていたのに、こんな誰でも書くような普通の字で署名するとは、と意外に思われてしまったわけだ。この話を聞いたとき、今後は芥川賞作家ばかりでなく、作家全体がその傾向をますます強め、これまでのようないかにも作家らしい貫禄ある署名など期待できないだろうと思った。といてこれからの芥川賞作家をはじめ、作家全体の質が落ちてゆくだろうと考えたのではない。又吉氏の場合はお笑い芸人なので、サインは時々してきただろう。しかし小説家としての署名はサインとは代えて書かなければならない。そうなると小説家としてはチセツな字で書くほかなかったということになったと思われる。

これまでの文学者たちは四百字詰原稿用紙の升目に、一字一字埋めてゆくという作業によって、作品を作ってきた。それが二十世紀の終わりごろから、コンピューター・リテラシーというテクノロジーが普及し、たちまち一般化してしまった。パソコンを筆記用具とすることが、われらの日常となるのに時間はかからなかった。多くの人がある方法によって文章を書くようになってくると、字を書く作業が日常的にメモ程度になり、ほとんどパソコンの画面上で文章を作るようになってしまった。文学者もしだいに若手が増えてきて、いまやパソコン派が執筆派を大きく上回ってきた。そうなると字を書くなど事務的な場合だけで、大量に書くことをしなくなった結果、稚拙な字しか書けなくなった。それどころか漢字が書けなくて、すべて機械任せということが常態化してきた。その昔のモノ書きたちは書く字の量が桁違いに多い。よってとてつもない書体の字を書くように、いつの間にならなくなっていったようだ。わたしの手元にも、俳人加藤楸邨、歌人坪野哲久、評論家小田切秀雄といった人の署名の入ったものがある。墨書だったり、インクだったりするけれど、いずれもすごい貫禄のある書体である。とても普通の人にこんな字は書けるものではない。

やや本題から外れるが、われわれ伝統工芸師においては、署名を求められると墨書することが多い。将棋指しとかも同じで、扇子に揮毫したり、色紙にサインするときは墨書する。能面師のする函書きも墨書と決まっている。世間がそれでないと納得しないからだ。能面師なら墨で署名するものと思い込んでいる。どこかへ行って芳名録に記す場合、いとも当然のように筆を取って墨をつけて、やおら格調高く署名しなければならない。しかしこれは極めて非日常的なことであって、このためにだけ稽古をしておく。よって自分の名前と住所くらいしか墨書できない。それは将棋指しも同じで、そのための稽古を誰でもしている。

それはともかく、いまでも四百字詰原稿用紙に一字一字埋めて作品を書いている文学者は存在する。この行為も、作家も貴重だと思つづく。貫禄ある字を書けるから貴重というより、文体そのものにも貫禄があるところが貴重だと痛感しているからだ。パソコンを筆記用具として文を作ると、気がつかない間に文体がパソコン流になっている。どこか軽く、言葉に輝きも香気もなく、いってみれば事務的な文体になってしまっている。事務文書を作るには便利この上ないパソコンも、文学作品を書くとなると物足りないところが出てくる。本来これは事務機であって、文学を書くには不適当なところがあるのは当然なのだ。

言葉を打ち込んで、それを漢字変換する。この作業によって文章を作るけれど、漢字変換しようとしたとき、出てくる漢字に限りがある。たとえば齋藤氏という詩人のお名前「」という字がない。これを書くにはやや厄介な手続きをしなければならない。右下のほうにあるIMEパッドというところをクリックして、窓を開くと漢和辞典のような一覧が出てきて、部首によるか画数によるかを選んで字を探す。探し当てた字をクリックして文面に移すことによって、めでたく所望している字が打ち込める。こういうときは書いたほうがよっぽど早い。文を書くとき使いたい漢字が変換されないと、その厄介な手続きをしなければならず、つい変換できる範囲で文を書いてしまう。齋藤氏の場合は、固有名詞なので相当に厄介でもその手続

きをせざるを得ない。しかしそうでない普通の文の場合は、あとで直そうとしてそのままになったり、とかく楽なほうに狎れてしまう。

凝った読み方とか、凝った単語などどうしても使わなくなる傾向が出やすい。たとえば遊ぶという字は簡単に出来るけれど、サンズイの「遊」の字は厄介な手続きを要する。「病を治す」の治すは、「癒す」と書きたいときもある。この場合は「ちゆ」と打ち込んで変換し、消去と送り仮名をつけて「癒す」と書く。「いやす」と打ち込んでもよい。こんな例は限りなくある。つい面倒になって「治す」で済ませてしまう。こうした機械の制約によって、最近の文章の多くは、画一的にして平均的かつ一般的・常識的なものに傾いてゆく。事務的で味も深みもない、まして言葉の輝きも香りもない文章になる要因があると思う。よって機械によって文を書く者は、心して厄介な手続きに挑戦して、納得できる字を使わなければならない。そう肝に銘ずることが幾重にも必要だと、このほど自戒している。

以上は多少なりとも文学的な文章を書こうとしている者の場合である。これから問題にするのは、もう少し普通の場合、つまり日ごろ文章を書くことなどしてこなかった人たちについてだ。このことがとんでもない筆禍事件を起こしている事実をご存知だろうか。

パソコンに向かってローマ字を使ってひらがなを打ち込み、漢字変換する。これが初心のころは感動的で、ものすごくいい文章が書けたように錯覚しやすい。ほとんどのひとがそうなるのだ。通常それを推敲などしない。一二度読み直して、間違いも気付かず、印刷する。今では簡単に印刷することができて、紙に印刷されたものが機械から吐き出されてくると、その印字の美しさに見とれてしまう。いよいよ自分の書いた文章が光り輝いて見えてくる。これを自分ひとりで感心しているあいだはまだいい。ところがどうしてもそれを誰かに見せたくなくなってしまふ。あるいは不特定多数の人に配布したくなってくる。これが思わぬ「事件」を引き起こすことがあるのだ。どこの職場でもこんな筆禍事件が一つや二つはあった。初期のころはとくに多かったけれど、今でも出ていることだろうと思う。

わたしが関わったものでも忘れがたいことが二つあった。ある部署で会計を担当していたときのことだ。そこへ商業学校を出て経理部にしばらく居た真面目男が異動してきた。わたしは会計は専門ではないけれど、ある事情があつてかなり難しい会計処理をしていた。帳簿上の難しさではなく、お金をめぐる人間関係のややこしさをほぐす仕事をしてきた。そのやり方がこの若手の目には不純に見え、イチャモンをつけたくなつたらしい。学校で習った会計処理とは違ったことをやっているのが気に入らなかつた。彼はパソコンのキーを叩いて、これから自分はこういう方針で仕事をするといったことを宣言し、配布してしまつた。これが多くの人を苦笑させたり、怒らせたりすることになった。わたしはその文書を見ていないけれど、聞いた話によると、このわたしのやり方について「素人の間違い」みたいな指摘があつたという。彼に対する処断は、厳しいものだった。程なく他の部署に異動になり、以後会計部門から外されて一般事務に付き、二度と会計に戻ることは許されなかつた。その処遇に耐えられなかつたのか、定年を待たずに退職していった。

もう一つはさらに深刻で、考えさせられるものがあつた。それほど上等ともいえない詩を書いていたある男、事情があつて手に障害をもつていた。書き難さを克服しつつ、ひたむきに原稿用紙に字を埋めていた。あるときワープロを買ってもらつた。うちはかなりの資産家だった。まだ世に出たばかりのワープロは「文豪」とか「書院」といった厳かな名称をもち、価格も百万円を越えていた。これで彼は不自由な手を使って字を書く苦しさから開放され、どんどんと文章を書きまくつた。文明の利器の素晴らしさ、書く不自由を簡単に乗り越えさせたのだから、ワープロという機械は大きな救いだったといえよう。

しかし彼は降つてわいたような自由に酔い、すばやく書ける手を得て、舞い上がつてしまつた。上滑りし、飛翔し、快感を思う存分に我がものとした。ワープロの初期のころだけに、多くの人持たざる特技を

得たという「特権意識」が、その行動をさらにエスカレートさせていった。つぎつぎと書き散らし、そのころから盛んになりだした自費出版によって本を発行するようになった。これが彼を有頂天にさせ、有名人になったような錯覚をするまでになっていった。自費出版業者がベタホメして、たちまち売れっ子になるような殺し文句をいった。この営業の甘言の虜になってしまったのである。

彼が出版した本は七冊くらいになる。その中で友人であるわたしを实名でとりあげ、莫迦にしきったようなことを書き、青春のころの恥ずかしいこと、それもあることないことを書きまくった。それは彼にとってこの上ない愉快的なことだったに違いない。それを知りうる限りの人々に配布した。それだけでは足りず、出版記念会を開くようにその音頭を取ってくれと、このわたしに言ってきたりした。苦りきっていたわたしは返事もしなかったが、その後もしつこく遊びに来るように誘い、以前どおりの付き合いを要望してやまなかった。しかしわたしにしてみれば、出版されて悪口を書かれるということは、云い返しができない以上、一方的に暴力を受けているようなものと思わざるを得なかった。こうした迷惑を受けたのはわたしだけではなかった。しだいに彼を相手にする者は居なくなり、酒を飲んで荒れるようになった。孤絶した老境に入り、急に静かになり音沙汰も聞こえてこなくなった。後に判ったところによると、認知症になり数年にして亡くなったという。周辺の迷惑もさることながら、本人にとっても悲劇だった。彼が不自由な手で、原稿用紙の升目に一字一字埋めながら、詩を書いていたらあのような不幸にはならなかったはずだと思う。

この話は必ずしも笑って過ごせる話ではない。わたし自身にも、もって反省の材料としておかなければならないと思う。彼がまず陥った罠の一つは、機械で書く心地よさにあった。相当に思い切ったことが書けてしまう。これを書いているのは俺ではない、この機械なのだ、こういう感覚がどこかにあって、時によると激越にして非常識なことを書かしめる。それもすこぶる快く、痛快になれる。それはあたかも帽子をかぶって派手な服装をして街に出ると、日頃の自分から解放されて「ねえちゃん、遊びに行かないか」などと声をかけてしまえるというのに、なんとなく似ている。

以上は自戒として書いたつもりである。わたし自身、原稿用紙に書くことはすでに不可能になっている。後戻りはできない。世界全体がコンピューター・リテラシー抜きには、すでに成り立たないところへきている。この電子書籍などもそのひとつである。この文明の利器を前向きに活用してゆくことこそ肝要であろう。その便利さゆえの怖さを認識し、必要な字を打ち込む煩わしさを厭わず、よりマシな文章を書きたいと願わずにはいられない。(完)

今年の夏は連日の猛暑続きで、能面作りは体力的に厳しく一頓挫のかたちだった。こんなことはこれまでになかったことである。夏の暑さに強いことがこの世界での重要な要素だからだ。夏に制作に励んで秋の展覧会シーズンに備えるというのが例年のことであって、汗を流しながら打ち込むというのが通例だった。それが今年ではできなかったのはひとえに衰えなのだ。夏に強いと自負してきたが、今夏はついにいけなかった。

その間やむなく絵を描いた。長い間の懸案だった絵の模写をしたのである。これはこれで充実感を味わうことができたし、これから絵を描いてゆこうかと思ったりした。模写からオリジナルに移ってゆくと、これはこれで病み付きになりそうな予感がした。絵の具を塗りこめてゆくうちにしだいに厚みを増してきて、色の彩なすハーモニーのようなものが出てきてなんとも快かった。

急に風の向きに変化を感じた夏の終わりに、ある思いに駆られて、久しぶりに樹齢六百年のヒノキの材料を用意し、面作りを再開した。ナタとノコギリで木取して、鉛筆で型を書き込んで、ツキノミで荒取りをはじめた。部屋に満ちるヒノキの馥郁たる香り、シャキッシャキッと削れて行く音、なんという心地よさだろう。久しぶりといっても、つい一カ月半くらいのお休みだったが、この味わいを久しぶりと感じた。全身の細胞が生き生きと働き出すという感覚、これが格別だ。とくに脳細胞が蘇ってくる。手先を使うと脳が刺激されるというけれど、毎度ながらヒノキの香りに埋もれて彫刻刀を使っていると、次々と思念が沸いてきて、めまぐるしく回転する。

「これだ！やはりこれだ。これがない生活などありえない」と思った。じつをいうと、もう能面作りはできないかもしれないと、本気で思ったのは夏前のことだった。あまりの出来の悪さに絶望したのである。いま自室の壁面に掛けてある面は「イエス」が二面と、「孫次郎」が二面である。創作面「イエス」はすでに七面作った。これまでの総仕上げとばかり昨年から今年にかけて、全力を振り絞って二面作った。ところが出来上がってみると、これまで作った五面より出来が落ちる。頬の肉がとりきれていない。塗り上げてじっくり見てみて、そのことに気づいて愕然とした。塗りを落として彫り直すしかない。がっくりしてそのまま掛けてある。すぐに取り掛かる気持ちになれないのも、衰えなのだ。

「孫次郎」は年が明けてから彫り始めたものである。「孫次郎」という面は人気のある女面で、要望があったときいつでも渡せるように、数面は手元に揃えてきた。それが底をついてきたので、今年の年初に作ろうと思立った。「孫次郎」がどんな面かを簡単に説明しよう。室町時代の能楽師・金剛新太郎久次が、うら若くして夭折した妻への慕情を彫り上げ「ヲモカゲ」と銘をつけた。新太郎はのちに孫次郎と改名し、二十七歳の若さで亡くなったと伝えられている。その面をいつしか「孫次郎」と呼ぶようになり、金剛流の看板として女面を代表する面のひとつとなった。この本面は三井美術館に所蔵されていて、ときどき公開される。やや細面で新妻らしい艶麗さをもっており、この哀話とともに人気の高い面である。

今年明けて早々から彫り始めて、とくに慎重に、じゅうぶん時間をかけて検討しながら彫り進めた。これ以上彫る余地なしと見極めて、塗りに取り掛かった。最後の古びつけの段階で、やや濃くなりすぎて薄汚れた感じになってしまった。注意力の減退に落胆しながらも、これを落とすために天日に当てて、色を後退させていった。約二ヶ月もすると、肌色がほとんど真っ白に戻っていた。再び彩色して今度は慎重に仕上げでどうやら完成に至った。出来上がったばかりのときは、いつものように興奮していて、これまでにない傑作ができたように思った。これを壁にかけて、一ヶ月もしているうちにしだいに冷静になり、頬の肉が取りきれていないことに気づいた。その原因として口角がじゅうぶんに下げられていなかったのだ。口角を落としていたら、頬の肉も落とせばはずだ。こう気づいても直すことができない。裏の彫りが出来

上がっていて、口角を落としたら穴が開いてしまう。これは失敗作として諦めよう、そう自分に言い聞かせるしかなかった。

もう俺はだめだ、能面作りはこれ以上できない、そう思った。この夏はそんな気分のなかで気を紛らわせるために、絵を描くくらいしかなかった。しかし夏の終わりという空気が周辺に立ち込めてくると、いくらか気分が変わってきた。急に思い立って、もう一度最初から彫りなおしてみようと思った。普通は二面彫るものだけれど、このたびは一面だけ実験的に作ってみようと思い掛かった。このときの思いも寄らぬ新鮮な感動は言葉に表しにくいものがあった。数日するうちにある思いが固まってきた。これから腕が落ちていって、ますます駄目になってゆくかもしれない。それでもやめるのはよそう。作り続けなければならぬ、そう覚悟を決めた。

わが身に迫ってきた「衰え」とは何か。集中力の欠如、持続力の後退、気力の低下、といろいろある。それらの基本として、基礎的体力の衰えがある。主として使う右腕の手首、肘、肩が痛くなるのが早く、回復が遅い。痛くなってそれが翌日まで残るようだとその後の制作に差し支えるので、痛みを覚えるとすぐに仕事をやめる。以前なら長時間続けることが出来たけれど、いまでは二時間が限度だろう。

そして視力の衰え、これが大きい。七十歳のとき白内障が進んで、近所の眼医者に手術してもらった。この眼科医は名手の誉れ高いお方で、強度の近眼も治してくれた。右目を視力 1.2 に、そして左目を視力 0.8 くらいにしてくれた。これで遠くも近くも見えるというわけだ。確かに日常的には大いに便利である。裸眼で遠くの景色もよく見えるし、新聞も読める。しかしこれは能面作りにははなはだ不便なことになってしまった。それまで長いこと近眼鏡のお世話になってきて、老眼鏡は使ったことがなかった。近くを見るのに慣れていない老眼鏡はあまりに不便だった。焦点深度が浅く、立体である能面作りには使いこなせない。すぐに疲れてしまうのもマイナスであった。毛描きというものは見所のひとつであって、極細の面相筆で描く。それも一度に決めるのではなく、何度も修正しながら描いてゆく。ところが黒く塗られたところに面相筆を近づけると、筆の先がどこへ行っているのか分からなくなった。描きはじめはなんとかできるけれど、十数分もするとかすんで見えなくなってくるのだ。すると不安になって、手先が震えたりする。こうなると悲惨なことになった。

能面作りの実力は確実に落ちつつある。それも逆落としの勢いで下ってゆく。創作面の場合はそれほどでもない。伝統面の場合、鎌倉時代から作られてきた名作に一步でも近づきたい。いわば歴史的な名作と格闘することが宿命付けられている。ところが創作となると比べるものがない。よって自己満足しやすい。それでも創作面は全体に伝統面と比べて存在感が軽い。とても伝統面の完成度の高さには及ばない。自らの腕のなさを認識しなければならないことにおいては同じことだ。

それでも作り続ける。そのことを確固として意識することができた。たとえ出来が満足できなくとも進まなければならない。われわれが歳とともに、歯が悪くなったり、耳が遠くなったり、視力が衰えたり、体の部分が壊れ、機能が劣化してゆくのは、自然現象なのだ。自然の産物である人間が、生命活動の終わりに向かって一歩ずつ歩むのは、自然現象のひとつであろう。とすれば面作りの能力が落ちてゆくのも、当然なことには違いない。ということなら、作り続けるということが生きるということになる。納得して死を迎えるには、「生ききる」こと、これしかない。いま到達した面に対する心はこれに尽きる。ふと眼を上げると、自室の前の道路をひとが歩いてゆく。子供をつれた母親、犬の散歩をする老人、急ぎ足の若者、それぞれにそれぞれの人生がある。こうして今年も暮れてゆくのだ。そんなことを思いながら面を見直し、手を休めた。(完)

放浪の旅というのはどういう人がするものなのだろうか。周辺で放浪の旅に出たという話は聞いたことがない。普通のサラリーマンなら不可能なことだろう。当然自分とは縁のない話だと思っていた。ところが不思議なこともあるものだ。放浪の旅に一緒に行かないかと誘われて、その気になってしまったのだ。そういつてきたのがオーストラリアに嫁いで十年になるわが娘の思（しのぶ）である。昨年のことだ、娘の亭主ジュールスが一家を引き連れて、五月から年内いっぱいオーストラリア国内を放浪するという。そのなかで八・九月にオーストラリアの北のほうに行くので、それに同行しないかといつてきた。それは面白そうだと乗ることになった。

五月から十二月まで大型の乗用車にワゴンをつなげて、オーストラリア国内を放浪して歩く。ワゴンにはテントはもちろん野外生活に必要なものはすべて積んでいる。湯を沸かしてそれをシャワーとして使う設備まで用意している。放浪の旅につ前に旦那は会社を辞め、土地を売り払い、住んでいた家を明け渡し、荷物をガレージに収納した。二人の小学生は行く先々で勉強のためのペーパーが用意されていて、スカイプで授業を受けられる。放浪する家族のための社会的準備はできているらしい。学校へ行ってその手続きをしたら先生はいった。「それはよかった。子供のためにはいい経験になるでしょう」

四十歳代の夫婦が子連れで一年近く放浪するという発想は、とても日本では考えられない。シドニーを出発して、東海岸に沿って北へジグザグに進む、フェイスブックでその状況は逐一伝えられてきた。それで見ていると如何にオーストラリアが自然豊かな国かを痛感する。エミュの群れが猛スピードで走りぬける。綺麗な野鳥がすぐそばまで近づいてきて逃げようとしなない。丸二日間人家もなければ、クルマにも遇わないようなこともある。会うのは野生動物ばかりだ。たどり着いたタウンは、人口わずか十六人、一軒のパブがあってそこでビールにコーヒー、そして家庭料理を供している。その裏手がキャンプ場になっていて、トイレと水の設備がある。キャンプ地といつてもいろいろあって、トイレがあるだけのところもあり、水と炊事場があるところもある。管理事務所があって、プールもあれば温泉もあるような豪華なキャンプ場もある。暗くなれば寝に着き、明るくなると起きるという毎日、テレビも新聞も見ない。

八月のオーストラリアは南半球なので冬となる。しかし北部のほうは北半球なら、フィリピン、ベトナム、タイあたりに相当するので寒くはない。八月の半ば過ぎにケアンズに早朝に着いて、空港の出迎え口に出ると、思（しのぶ）の一家が出迎えてくれた。われわれ老夫婦に孫のアナスタシアとダニエルが飛びついてくる。ジュールスと握手を交わして、コーヒーブレイクにそろって行った。乾燥した空気の中、日差しがまぶしい。キャンピングカーを借りたり、その日はゆっくりして過ごした。

行けども行けども

平坦に広がる平野はなく、といつて山もない。行けども行けども丘陵地帯が連続している。そのすべてがユーカリの森である。道はゆるやかなアップダウンと蛇行を繰り返して、アスファルト舗装道路から土ぼこりのたつ非舗装道路も走る。二台の車がひたすら走り続ける。一台は大型の四輪駆動車にワゴンを繋いだもの。もう一台はレンタカーで四人乗りのキャンピングカーである。出会うのは同じ形態のクルマか大型の運搬車ばかり。乗用車さえほとんど出会うせず、バイク、自転車は皆無、まして歩行者に出会うことはなかった。道路は四車線で信号機は無いし歩道も無い。スピード制限は百キロが普通だけれど、八十キロのところもある。彼らオーストラリア人はこの制限速度を守り、飛ばそうとしない。ちなみにこの国ではクルマは左側走行と日本と同じである。かつて日本でもよく見掛けた「キープ・レフト」の文字をけっこう多く見た。商店の並ぶタウンに入っても、信号機は無い。十字路はロータリーとなつていて右折優先である。

道路の両側はどこまでも国樹であるユーカリの森が続く。ユーカリの種類は何十種類かに及び、いずれも喬木ではなく、直径三十センチくらいである。ここ数年雨らしい雨が降っていないようで、乾燥しきっている。森といっても木々の間は開いていて、遠くまで見通しが利く。草は歩くに邪魔になるほど生えていない。森の中に住む野生動物たちが食むことによって自然調整されている。森の中で目立つのはアリ塚だ。高さ一メートル位のアリ塚が多いが、中には人間の背丈を越すようなものもある。土の色がレンガ色ともベンガラ色ともいえる赤みを帯びた土である。アリは地中深く四メートルも掘り進んで、地上に堆い塔を築いている。アリの天敵はヤマアラシで、彼は長い嘴と長い舌でアリを食べるといふ。

野生動物の中でもっとも多いのが牛で、その種類も多い。水が少ないのでラクダのように首と背中の方に大きなこぶを持った牛を多く見かけた。そのほかにカンガルー、エミュー、ヤギといった動物たちが暮らしている。野生化したラクダも居ると聞いたが、わたしは見る機会がなかった。彼らは野生ながら、人間によって管理されている。「管理されている」というより「保有されている」といったほうが実状に合っている。広大な土地ではあるが、所有者が居て、牛は彼らの所有物なのだ。牛小屋もなければ餌を与えることもない。牛は群れを成して、子を産み育て、一人前になると、業者によって屠殺場に運ばれてしまう。土地を買うとき物件の説明に「牛何頭付き」という一項がある。

道路上にそれら動物の死骸が横たわっている。クルマの犠牲である。朝九時から午後三時ごろまで走り続ける。次なるキャンプ地には三時ごろまでにはたどり着きたい。枯れたユーカリの倒木を見つけると、電気鋸で伐って車の屋根の上に積む。夜のキャンプ地での薪である。旅の前半はケアンズの南西方向に行っていたが、半ば過ぎに北に転じた。ケアンズの少し北に入るあたりで、道路の一角に無人の洗車場が現れた。日本のガソリンスタンドに見る洗車場と同じものだ。シャワーが猛烈に車にぶつかり、その中を車がゆっくりと進む。ここですべてのクルマが洗車することを義務付けられている。クルマについた泥を洗うことによって、その泥に混じった植物の種の持込を防ぐ狙いだそうだ。一つのエリアから次のエリアへ別種の植生を持ち込んで自然破壊されないようにという意味である。この国に入国するとき、植物とかその種子を持ち込むことは固く禁じられている。持っていれば取り上げられるし、申告していなかったら六百ドル（約六万円）の罰金を取られる。ちなみに梅干もアウトである。自然保護ということには熱心な国と思う。

その洗車場を通過すると、急に熱帯雨林地帯に入る。といってもこの時期は乾季なので、青空が広がっていることに変わりはない。時折白い雲がふわふわと浮いたりする。海岸沿いの道を北上すると、それまでのどこまでも続くユーカリの森から、一転して農地が現れた。海岸寄りの地区は開発されていて、サトウキビ畑を多く見た。人家が点在し、森はすべて開発され、きれいな緑の絨毯を敷き詰めたような丘々の盛り上がり美しい。オーストラリア各地に見られる緑の絨毯は、人が刈り込んだものではない。動物の放し飼いによって自然と調整されているのだ。草を食む動物たちが大地をこよなく美しくしてくれる。街道に沿って電信柱が続き、電線がゆらゆらと空に浮かんでいる。戦前くらいまで日本でも見られたすこぶ素朴な電信柱と、平行に続く二本の電線が、懐かしいような床しいような郷愁を誘う。

こうした風景は海岸線に沿った街道に見られるもので、少し内陸に入るとたちまち人跡稀となる。それでも舗装された街道沿いなら、三百キロも進むと人家が現れて、ところによってはささやかな商店が数軒並んでいる。「ホテル」と看板にある店は、実質飲食店である。お茶にアルコール飲料、そしていくつかの料理を用意している。その昔は二階に客を泊めていたけれど、今はどこも泊めていない。それでも「ホテル」という看板がそのまま残っているわけだ。いつの間にか宿泊はもっぱら「モーテル」となっている。

街道からはずれて土ぼこりの舞う悪路に入ると、タウンはもとより、人家もない。しかしそうした奥部からさらに深奥部に入らなければ、オーストラリアの自然の真骨頂には触れられない。街道から外れた道に進むのもこうした放浪の旅の醍醐味であろう。

いくら乾燥しているといっても、水がないわけではない。川には水が流れ、池とか湖には水が豊かに広がっているところもあった。どこも護岸工事をしていないので、水はどこまでも澄み切っていた。水草と魚たちの生息に任せておくと、水が本当に綺麗である。キャンプ地の脇に川が流れていて、それが池のような溜りをつくっているところがあった。そこになんと鯉が大量に泳ぎまわり、一メートル以上もある巨大なうなぎがゆったりと泳いでいた。

キャラバン・パーク

われわれ七十歳代の夫婦が合流して以後、ワイルドなテント暮らしはせず、設備の整ったキャンプ場ばかり利用した。「キャラバン・パーク」と呼ばれる施設は各地に点在し、広大な敷地に五十組から百組くらい収容できるようになっている。ひとつの敷地はおよそ百坪ほどあり、水道と電気が備えられている。管理事務所があり、そこで支払いをすると行き先を指示される。いくつかの敷地の利用者が共同で利用できるシャワーとトイレの建物があって、洗濯場と物干し場がある。こうしたキャラバン・パークというものは日本にはない。オーストラリアではちょっと内陸に入ろうとすると、旅行するための鉄道もなければバスもない。民宿もホテルもない。よって旅行の形態が唯一キャンピングカーによることになるのだろう。キャンピングカーに乗ってキャンプ地をめぐるというのがスタンダードな旅行形態なのである。あるキャラバンパークでは、ヘリコプターが二機停まっていた。ヘリでこうしたキャラバンパークを巡る旅行者もいるのだ。

事務所に隣接してプールがあり、レストランもある。キャンピングカーまたはテントに寝るのが煩わしければ、ベッドルームとキッチン・トイレ・シャワーを持った1DKのような「キャビン」もある。「イノット・ホット・スプリング」というキャラバンパークでは、温泉があった。温度の違う湯船が五つくらいあって快適だった。日本のように素裸で入るわけにはいかない。水着を着けて入るので男女を分けることはしない。そうした温泉が国内には百箇所くらいあるという。

指定された場所に着くと、まずクルマを止め、テントを張り、岩を重ねて釜場を作る。そこに火を焚きつける。昼間伐ってきたユーカリの丸太を鉋で割り、焚き火が燃え上がる。野生動物は火を嫌うというけれど、焚き火が燃え上がるいろいろな動物が訪れてくる。まず野鳥だ。カラスによく似ているマグバイ、色が真っ黒でなく白と黒のツートンカラーで、鳴き声が二声である。しかしその仕種とか目つきとか、人間に近寄る態度とかは日本のカラスそっくりである。オーストラリアのカラスはこういうものなのかと思ったら、本物のカラスが現れて違うことが判明した。真っ黒で貫禄があり、大きさが日本のそれより一回り大きい。あまり人間に近寄ってこない。ワライカワセミもやってきた。鳩くらいの大きさと太っている。すぐそばまで来て逃げようとしないう。手の届くところまでは近づいてこなかったが、カメラを向けるとあちらを向いたりこちらを向いたり、カメラに写るポーズをとってくれているようだった。日が暮れた瞬間、ワライカワセミが数羽で合唱し始める。「クククク、カカカカ」と喧しい。それもいつかで塹へ帰ってしまう。カンガルーに似ているけれど、少し小型で頬と腰に白い線が入っているワラビーなども歩き回っている。一頭のそれは腹の袋から子供が顔を出していた。

焚き火に網をかけて、肉を焼き、愉しい夕食を摂る。燃える火を見つめていると、なんともいえない気持ちよさがある。いろいろな話が出て面白かった。彼らオーストラリア人同士が集まると、会話が限りなく続き、その言葉の洪水に驚くばかりだ。わがジュールスも多弁にして盛んに喋り捲っていた。彼ら見知らぬ者同士、政治哲学を語り合っているのかと思うと、じつは情報交換が主だった。旅行するのに、鉄道もなければホテルもないばかりか、旅行案内もないのだ。どこにどんなキャラバンパークがあり、素朴なキャンプ地があるか、どんな見所があるか、不完全なネット情報しかない。行き交う旅人同士がもっとも確実な情報源なのだ。よってこういうところで得られる情報によって、放浪の旅を続けていることになる。

あたりが闇につつまれる頃合ともなると、煌く星空がすばらしい。中天に懸かる天の河がくっきり、そして満天の星である。南十字星が出ている。月が煌々とあたりを照らしている。夕食後キャンプ地の近くを散歩すると、月光が如何に明るいかを実感する。かなり遠くに居る動物も見えるし、木々が神秘的だ。この旅行中はテレビ・新聞などまったく見なかったばかりか、遠くの景色ばかり見ていたので、明らかに視力が上がっていると思った。午前四時ごろに起きて夜空を見上げると、北斗七星が出ていた。寝静まると辺りは静寂につつまれると思いのほか、野生動物たちの歩き回る気配がけっこう気になる。人間が歩いているように感じられ、なかにはドアをノックする輩も居る。われわれ老夫婦はクルマの中で寝ていたからそれほどでもないが、テントの中で寝ていると、それこそ動物の気配が手に取るように分かるという。

熱帯雨林帯に入って最初のキャンプ地で、朝まだき密林から突如としてカサワリという巨大な飛べない鳥が現れた。この辺にしか生息しない世界でも珍しい品種で、ダチョウの一種である。全身黒の毛で覆われ、首から顔にかけて紺、赤、紫。とさかと脚は黄色で大変美しい。この鳥が江戸時代に日本に来たとき「火食鳥」と名づけられたという。こんな珍鳥が目の前に現れるとは、さすが動物王国だ。この密林に昼なお暗い小道がついていて、毒蛇でも居たら怖いと思って躊躇していたが、思い切って一人で小道を進んでみた。するとまたもや「カサワリ」に出会うことができた。

ひとつ不思議だったのは「蚊」とか「ハエ」のような虫類が皆無に近いことだった。テントを開け放っていても虫が入ってくることはない。羽アリが一度傍に来たのを見ただけである。ユーカリの森の中には至る所に牛をはじめとする動物たちの糞がある。それらにもハエがたかっている光景は見ない。その理由は乾燥の気候にあるのだ。雨の降らない乾燥の地には、虫は発生しない。糞もすぐに固まって踏んでも石を踏んだのと変わらない。われわれ日本人はこうした乾燥をうらやましく思う反面、慣れていないので後述するような思わぬアクシデントに見舞われることになる。(つづく)

物見遊山・観光・見物

キャンピングカーで移動し、いろいろなところでキャンプする。その間にいろいろなところへ連れて行ってもらって、「観光」を楽しんだ。「キュランダ」というところは日本人観光客にもお馴染みのところだ。ケアンズから電車とゴンドラで山に登り、景色を楽しみ、山の上の商店街を散策するところである。ここで「毒蛇と毒蜘蛛のミュージアム」を見物した。女性が一人で切符切りから説明をこなしていた。最後にこの女性が、トッケイという大型のトカゲと、大きい蛇を持ち出してきて触らせてくれた。トッケイの肌はすべすべして触り心地は最高である。上等の革製品でもこれだけのものはあまりないと思う。われわれの二の腕くらいの太さで三メートル位の蛇を肩にかついで傍に来てくれる。これもすべすべした肌がなんともいえない感じだ。見た目にあるような「ぬめり」はまったくなく、乾いていてやや冷たく、限りなく柔らかい。太いところを掴むと、どこまでも指が食い込んでしまう。あえて言えば孫の太ももに触った感じに似ている。

ケアンズから二百キロくらい奥に入ったところに「ハーバートン」という町がある。ここはかつて金鉱山で栄えたところで、オーストラリアでも最も古く開けたところのひとつだ。今はそうした活気は見られないものの「古都」ともいえるべき落ち着いた雰囲気のある町だった。標高が高く、気温は低い。明け方は十度以下に下がり冬支度が必要だ。この町の一角に「ヒストリック・ヴィレッジ」というアンティークを集めたミュージアムがあって、よくこれだけ集めたものと感心し、見ごたえもあった。オーストラリアの歴史は百年そこそこしかない。ということは古いというより古いというべきものばかり、われわれ子供のころにおなじみの品々も多かった。しかしなんといっても興味深かったのは「スパイ・カメラ・ミュージアム」である。

東西冷戦のころにアメリカのために活躍したスパイが、その業務用に使用していたカメラのすべてを公開したという珍しいミュージアムである。この入り口に大きなパネルがあって、自動車王のヘンリー・フォードと発明王のトーマス・エジソンのツーショット写真が展示されている。彼らの人生哲学として一行の文字が書かれていた。「マイ・オンリー・インタレスト・イズ・マネー」というのがそれである。このずばりと言いつつ言葉に感銘を受けた。これこそがアメリカの精神を代表する言葉に違いないし、多くの共感を得てきたのである。スパイとして活躍した主人公ももちろん同じであろう。こうした魂が彼らの前進するエネルギーそのものであったことを、素直に認めるべきではないかと思う。

「みんな金が欲しいのだ。さうして金より外には何も欲しくないのだ」これは夏目漱石の自伝的小説「道草」に出てくる言葉である。この言葉の表面的意味は、エジソンとフォードの言葉とほぼ同じである。しかしこの文は、漱石が金をせびりに来る親戚筋を、侮蔑と憎悪をこめて書き放ったものだ。古来日本人は金に対する執着を嫌い、軽蔑してきた。今でも漱石に共感する人が圧倒的に多いだろうと思う。しかし海外の人々の多くがそれを理解しない。ここに日本人が変わっているといわれることを解く鍵のひとつが隠されていると思った。

さてほかのところでもそうだが、ここも訪れたのはわれわれの一行だけなので、説明の男は隅から隅までうるさいほど丁寧に説明してくれる。スパイにとって最も重要な小道具はカメラである。超小型のカメラから、隠し撮り専用のカメラがいろいろ置いてある。カメラを構えていると、真横と真後ろを写すことができるカメラ。タバコケースを開けただけで写せるカメラ。ライターに火を点けると写るカメラ。上着のボタンに仕掛けられたものをポケットの中で操作できるカメラ。日本で活躍した国際スパイのリヒアルト・ゾルゲは「日本から偷み出す機密はすでに何も無い」と豪語した。それらのすべては機密書類を特殊カ

メラで隠し撮りして持ち帰っている。

それらおびたしいカメラのほとんどが日本製なのであった。世界で一番小さいカメラと、それで写した写真が展示されていたが、それも日本製である。このミュージアムでは日本製カメラの展示室のように、昔のニコンを初めとするさまざまな日本製のカメラを見ることができる。ドイツ製のカメラはわずかに二台あっただけだ。日本製カメラのひとつを分解して、部品のすべてを大きなパネルに展示していた。そして説明員は言う。「このようにすべて分解しても、日本製と同じカメラを作ることはできません。彼らの技術には及びがたいのです。たとえばここにある小さな金属片一枚を作ることが至難の業なのです。一ミクロン違って機能しません」

これを聞いて思った。蒲田から羽田にかけて沢山ある下町工場の職人がそれを可能にしたのだろうと。五、六人の薄暗い町工場で、大手のカメラ会社から部品を作る仕事ももらって、手仕事で丹念に作り上げたものに違いない。不況になれば「仕事がなく困る」と力なく呟き、安い報酬に甘んじて地味に生涯を送っていった職人たちの姿が見えるようだ。このようなカメラはさらに進歩して、今なお世界中で愛用されているであろう。日本の公安警察でも活用しているに違いない。盗聴機をはじめ、日本のエレクトロニクス技術が思わぬスパイ用品を作り、思いもよらぬところで活用されていることであろう。

このミュージアムを作った元スパイは現在七十八歳で、高級車と美人を趣味として暮らしているという。高級車と美人に囲まれた最近の写真が展示されていた。このスパイはわたしと同年齢だった。「アイ・ホウブ・ソウ」というと、どっと笑い声が起こった。英語で冗談を言って、それが受けたことにご機嫌になれた。「スパイ・カメラ・ミュージアム」で日本の技術の優秀さを知ることができた。今回の旅行では、ほかにも日本製品の優秀さをいろいろ知ることができた。たとえばわれわれが乗っているクルマは二台とも「トヨタ」。オーストラリアではクルマは圧倒的に日本車が信頼されている。トヨタ、日産などの日本車が多く走っているのは、なんといっても丈夫で性能がいいこと、アフターサービスが充実していることによる。日本では三百万円で買えるトヨタ車のご当地では六百万円である。それでも大いに売れているのだ。キャンプのために用意された品々にも日本製が優れているとして人気があったのも意外だった。たとえば折りたたみ式の布製の椅子、あるいは小さくたためてしまうテーブル、さらには封筒くらいに小さくたためるお盆、さらには焚き火をするための鉄製の窯など、こうしたものが世界的に人気なのだそう。これには相当に驚いた。こんなところにまで日本製品が食い込んでいるのは、ほかにもいろいろありそうだ。「ラヴァ・チューブ」という溶岩でできたトンネルのようなところがあった。これをトンネルといわずに「チューブ」と名づけたところに、あるこだわりがありそうだ。地球ができてゆく過程を見ているような不可思議な空間である。日本にも「鬼押し出し」とか「秋芳洞」のように溶岩で出来た天然の見所がある。けれどもそれらはいろいろ人の手が入り、あまりに観光化されているので、神秘的には見えない。しかしここには素朴な階段と木道が付けられているだけで、明かりもないので暗いところでは懐中電灯だけが頼りだ。あまり人の目に触れていないので、妙に神秘的で迫力があつた。

「ザ・ミルストリーム・フォールズ」というオーストラリアで最も幅の広い滝を見た。ここでもそこにいたる道が付けられ、トイレがあるだけで、ほかに何もなし。その景色がまさに絶景としか言いようのないものだった。滝の一部に虹がかかり、周辺の木々の緑が素晴らしい。そこに居るのはわれわれだけ、滝の音だけが聞こえてかえって静寂さを感じず。人のほとんど来ていないところに特有の新鮮さが、一本の木にもあふれている。これが日本だったら、たちまち旅館と土産物屋が立ち並ぶだろう。こうした絶景がちよっと内陸に入ると無限といたいほどにあるらしい。多くは知られていないのだ。まさに未知の大陸といえる。

熱帯雨林地帯では海岸寄りの街道を走った。海のすぐ側に来たときクルマを停めて海岸を散策した。その辺の海は世界最大の珊瑚礁のグレート・バリア・リーフの一角に当たるので、海の美しさは抜群である。岬にはガジュマルの林が続いている。引き潮時には沖のほうまで歩いてゆける。岩場ではさまざまな貝を

拾うことができている。

肉食と巨漢たち

「バランスよい食事を」とはよく聞く言葉だが、オーストラリアでもいわれた。それが日本と少し意味が異なる。「赤みの肉ばかり食うとよくない」といつつ、牛と豚と鳥の肉をバランスよく摂れということなのだ。主食は肉であって、とにかく肉ばかり食べ続けた。朝食時に果物を摂るけれど、野菜はごく少ない。米飯、パンなどのでんぷん質も少ない。それでもわれわれは日本人なので、野菜・果物・でんぷんを摂っているほうなのだ。娘の思は気を遣っていろいろ果物野菜を用意してくれていた。しかし主食が肉であることには変わらない。

肉を毎食摂っていると、それも慣れてしまって、よく腹が減るのだった。珍しいところではカンガルーとエミユの肉を食べた。クロコダイルもぜひ食べてみたかったが、その機会はなかった。カンガルーの肉をオーストラリア人は初期のころを除いて食べていない。あれだけ牛その他の肉に恵まれていては、その必要がないということだろう。エミユは飛べない鳥なので、基本的に鶏肉に近い。カンガルーの肉は非常に旨かった。それを「牛肉だよ」といって出されたら日本人の誰も疑わないだろうと思う。牛のヒレ肉そっくりで、油みのない柔らかい肉である。太い尻尾の肉がもっとも美味と聞いた。

そこでわれながらある後ろめたい考えが浮かんできた。牛一頭から取れるヒレ肉は二人前で、どうやりくりしても四人前しか取れない。豚なら二人前である。なのに、どこのレストランでも「ヒレカツ」などのヒレ肉がメニューに多くある。本物のヒレ肉などわれわれの口に入るものではない、ということは以前から知っていた。さてオーストラリアではその革を利用しているが、肉はすべて食用として輸出している。カンガルーは畑その他を荒らすので、年間三百万頭捕獲されている。その大量の肉はどこへ輸出されているのか？第一位は中国で、第二位が驚くなかれ日本なのだ。そこで日本人はカンガルーと知らずにその肉を食べていることになる。どうやら本物のヒレ肉の代わりに食べているのはカンガルーの肉ではないかと想像を逞しくしたくなってきた。

ある程度の年配者なら一度は食べたことのある牛肉の缶詰「牛缶」があった。これは人気商品で大いに売れたものだが、使用されていた肉は「鯨肉」だった。事ほど左様に日本の食肉業界というのは、嘘っぱちだらけである。ごくたまにその一端がばれて大騒ぎになるけれど、デパート・高級料亭をはじめとする一流店でも肉は本物ではないと断言できる。ある肉屋さんが言った。「だから看板には『精肉』と書いてある」

肉食を主体としているオーストラリア人たちは、その摂取する量が半端ではない。わたしの十倍はらくらく摂ってしまう。子供のときからそうした食習慣で育った結果、とんでもない巨漢ぞろいとなった。オーストラリア人といっても、人種的には雑多で白人種はあらゆる民族が居ることだろう。アジア人もインド、ロシア、西アジア、中国、東南アジアと全域から来ている。アジア系は二割に近い。アフリカ人はまったく見かけなかった。アボリジニにも出会うことはなかった。こうした人たちは都会地で見かけることはできる。こうした雑多極まりない人種が集まった彼らの体の大きさがすごい。横に大きいと同時に厚みが日本人の倍はあると思える。太るといって腹が出っ張るものだけれど、胸から腹にかけて全部が太い。平均的に体重百キロから百五十キロくらいに見える。百キロ以下は一割と居ないようだ。二十歳台前半まではほっそりした人も居るけれど、成人後はみな太って老人でも変わらない。男の多くはひげを伸ばし、女はみなスツピンである。男女ともにタトゥーを入れている者が多い。どこことなくその辺に多く居る野生動物に似ている。巨大な牛もそれほど大きく見えなくなってくる。

こうした人々の中で暮らして、再びケアンズ空港に戻ってきたとき、ツアーでやってきた日本人の一人に出会った。その小さいことに驚き、しばしあっけにとられた。どう見ても平均体重五十キロから七十キロくらい、オーストラリア人の半分である。その歩き方がいい、服装といい、統率の取れ方がいい、子供の

集団行動に見えた。挙措動作のすべてが子供っぽいのである。江戸期後半に一人の船頭が漂流してロシアにたどり着き、十年ほど滞留して日本に戻った。「大黒屋光太夫」がその著「北差聞略」のなかで同じ感想を述べているのを思い出さざるを得なかった。

「日本人というのは変わっているよ。中国人とか韓国人と間違えることはない。一目見れば分かる」とは、あちらに住んで十年になる思のことばだ。この旅行中でもっとも驚いたことのひとつであり、貴重な体験だった。

脱水症にかかる

放浪の旅が始まって十日過ぎたころに脱水症に罹った。その数日前から変調は感じていた。車の中のベッドは寝にくいばかりか起き上がるのがひどく大変なのだ。普通なら簡単に起き上がれるし、筋肉トレーニングのおかげですいと起き上がる筈が、ひどく難航していた。筋肉の衰えというより、筋肉が働いてくれないのだ。ある夜半のころ自動車から出て用を足そうと、溶岩の崖に近づいた。すると坂道に足が踏ん張れず前方へ転んだ。起き上がろうとすると、さらに体が動かず大きく下のほうに転んでしたたか腰を打った。悲鳴を上げると、思（しのぶ）とジュールスがテントから起きだしてきて助け起こしてくれた。

夜が明けると微熱と頭痛があり、腰にただならぬ激痛が走った。これは風邪だなどと即断した。しかし隣のテントにたまたま元看護師が居て、一目見るなり「脱水症」と診立ててくれた。すぐに錠剤を持ってきて五百ミリリットルの水に混ぜて飲むように指示してくれた。それは水に溶けると日本のポカリスエットと似た溶液になるものだった。それが水の吸収をよくしてくれて、それから一・五リットルの水を飲んでプールに入れば治るというご託宣だった。その寒さでプールに入るのは出来かねたが、その通りにするとほぼ二時間で頭痛も去り、熱も下がっていた。ただし腰の痛みはただならぬ痛さで、ちょっと触れただけでひどく痛む。これでは骨にひびが入ったか、剥離骨折かもしれないと思った。

この土地では乾燥しているので、肌から水分が蒸発し続ける。よって脱水症になりやすいという。ここで同じ症状になる日本人が多く、病院に運ばれる人も少なくないという。その後見ていると、オーストラリア人たちは一リットル入りのボトルの水を二時間くらいで飲んでしまう。私もこまめに水は飲んでいたつもりだったが、絶対量が足りなかった。脱水すると筋肉の働きがだめになるということを身をもって学んだ。腰痛は翌日あたりがピークで、しだいに薄れていった。どうやら腰の筋肉の捻挫らしかった。

つくづく思うに「放浪の旅」は若いうちにすべきものだ。長期のキャンプ生活は、この歳ではかなりこたえる。毎日やっている能面作りと筋トレ・ストレッチ、そして週二回以上やっているダンスの稽古、こうした日常生活が中断されるということ、これは思いもよらぬ変調をもたらす。それだけ適応性がなくなっているのだろう。気温の変化の大きさ、肉食中心の食事、こうしたことに体がついてゆけない。「老いる」とはそういう現実なのかもしれない。

われわれが九月に帰国してから、ジュールスの一家は、オーストラリア大陸の最北端をユーターンして、中央部を南に向かい、アデレードでクリスマスを過ごした。そこにジュールスの実家があって、一息入れた後に、西のはずれの都市パースで新たな職に就いた。待遇は以前とほぼ同じである。住所不定無職の放浪生活から、普通の市民にもどり、子供たちも学校に通っている。預けてあった荷物は約一週間かけて、自ら運転するワゴン車で運んだ。(完)

会社の経理担当が五億円詐取して、キャバクラ嬢に貢いでいたという報道があった。その男は三十三歳独身、大手企業の経理係長だった。黒めがねに丸顔の、ごく大人しい実直そうな風貌だ。経理係長なら実直で地味、真面目であろう。だからこそ五億円も詐取できたのだ。会社から詐取した五億円の大半を、葛飾のキャバクラ嬢に送金していた。「結婚したかった」と供述している。五億円も費ったのなら、さぞかしすごいサービスを受けただろうと思いのほか、ほとんど逢うことも叶わなかった。重病を患っていて、面会謝絶あるいは集中治療室に居るといって、逢ってもらえなかった。治療費、手術費に必要というキャバクラ嬢の訴えに、彼はその都度五百万円単位くらいで送金していたという。キャバクラ嬢は、受け取った五億円をすべてホストに貢いで、一円も残っていないと語った。

ここで「葛飾」のキャバクラというところに注目したい。銀座・赤坂・六本木といった都心部の一流店では、ここまではやらないだろうと思う。一流どころでは、客に迷惑をかけてはいけないと教育して、楽しく遊んでもらうことを建前としている。花見時とか、クリスマスのころには、とかく何も知らない酔客が紛れ込んでくることがある。こうした業界用語でいう「カッペ」が来たとき、ござんなれとばかりに「ぼった繰る」のは、三流以下の店である。一流どころでは、こうしたときの対処として客に恥をかかせないように配慮する。ベテランの「社交さん」をつけて、遊び方をそれとなくリードして、しだいに常連にしたててゆく。「社交さん」とは業界用語で、ホステスの正式名称である「社交係」の意味である。誰でも最初はカッペなのだ。カッペが持ち金が足りなくても、それ相応の飲み物・おつまみで遊ばして帰すというのが一流店の商法であり、誇りでもある。もう一度来てくれれば採算は取れる。こうしてお客を育てることによって店は繁盛する。こうした店の社交係なら、五億円も騙し取るような真似はできなかつたはずである。ホステスのことだから、貢がせるのは余禄であり、甲斐性でもあるのだけれど、お縄つきまで出してはいけないのだ。

「五億円はすべてホストに貢いで一円も残っていない」というキャバクラ嬢の言葉は信用するに足りない。残っていたら返却を要求されることを恐れての言葉であろうことは、誰でも想像できることである。女性はリアリストであるから、金をはがちりと預貯金したうえで、それなりの贅沢を楽しんでいると思われる。もっとも「悪銭身につかず」の例えもあり、意外と愚かな使い方をしているかもしれない。ヤクザがらみのヒモが居て、すべて取り上げられてしまったということもありうる。

昔からこの手の話は多い。芸者に貢いで身代を失ったというような話はいくらでもあった。今ならさらに多発しているだろう。しかし五億円とは金額が大きいので報道されたのだ。しかし彼の場合、五億円貢いで逢うことも出来なかつたばかりか、社会的地位も信頼も失い、鉄格子の中に収監され、世の中の笑い者と成り下がってしまったのだ。

男が女に惚れて、何処そこで逢いたいとその約束を取り付けたときが、もっとも幸せである。その日を待つときの胸のときめきは、何ものにも替えがたい。実際に逢ってしまうと、夢が現実になったときのすべてがそうであるように、それほどでもないと思えてきたりする。この女は普通の女なのだと思のどこかで感じてくる瞬間もある。逢っている間の楽しいひとときが過ぎて「じゃ、またね」と別れる。やれやれと重荷を下ろしたような感じもしないではない。

それから二日経ち、三日経つうちにしだいに幻想が膨らんでくる。やはりあの女はすばらしい、自分にとって何ものにも換えがたい存在だと思いはじめる。そして無性に逢いたくなってくる。苦しい、そういうときの苦しさは喻えようもない。恋しさはそうした幻想で成り立っているものである。幻想と錯覚なくして恋は成り立たない。逢えない苦しさ、逢いたい、どうしても逢いたい、そういう思いにさせるのが、恋を燃え

上がらせるには最上の方法かもしれない。してみると、このキャバクラ嬢は最上の手を使ったことになる。それともうひとつ、金だ。金を女のために使うということは、もはや普通の関係ではなくなる。金を使えば使うほど燃え上がるのだ。恋心は激しくなり、求めずにはいられなくなる。平常心を失ってしまう。その結果が五億円までいってしまったということだろう。金を使わせるだけ使わせて、しかも逢ってやらない、これこそが究極の手練手管といえるかもしれない。

この事件へのコメントとして「学習が足りない」という言葉があった。男の愚かしさを嗤うのは簡単だし、ほとんどはその一点で終わってしまう。「馬鹿なやつだ」と鼻の先で失笑して見せるのが大方の反応であろう。しかし三十三歳の真面目なサラリーマンが、というところを考えると「いじらしい」と思えてくる。愚かしいといえばその通りだが、嗤えないものがある。

その昔ほどこの町内にも「結婚相談所」という看板があり、「お見合い」と称する結婚手段が主流だった。近所には世話好きなお婦人が居て、見合い写真をあちこちに持って行き、話を進める。元来日本人の多くが異性に接近するのが苦手な者が多い。そこでこうした人間関係が大いに機能していた。安定した会社の三十三歳の係長が「結婚したかった」と供述した。深刻な言葉だと思う。その昔ならすでに家庭の主になり、子供を膝に乗せていたことだろう。

ところがいつの間にか「結婚相談所」も「お見合い」も、身辺から遠ざかってしまった。近所付き合いも希薄でみな孤独である。学校の成績はまずまずで通過し、会社での働きもほどほどで、それらしい生活を送ることができる。しかしその間恋人に恵まれなかった、という人は想像以上に多い。恋人どころか女性の友人も居ないという現実、こうなると待ち受ける玄人女の術中に嵌ることになる。

「学習が足りない」といわれるけれど、どこでどう学習すればいいのか。そこを伝授してほしいものだ。高いところから「学習が足りない」などというのは簡単であろうが、そういうご本人はどんな学習をしてきたのだろう。性あるいはセックスと賢く付き合うということは、大変な難問であって、このくらい難しいこともない。お金と付き合うことも難問中の難問である。マネーとセックス、この二点こそ人生の最も中心となるべき課題であって、これこそがその人の全人生を左右するものである。にもかかわらずとかく人はこれを軽視したがる。「ナンダ金と女か」と一笑に付したがる。問題の本質はまさにここにこそある。

マネーとセックスを除いていったい何が残るのだろうか。多くの文学が繰り返し、このことをテーマとしてきている。優れた文学であればあるほど、この問題と真正面から取り組んでいる。しかし道徳あるいは宗教の多くが、金を軽蔑し、性を罪深いものとしてきた。この観念に捉われて、いまだ抜け切れていない。そのへんを踏まえて「学習が足りない」といつているのだろうか。この係長は、まさにマネーとセックスの二点で、取り返しのつかない失敗をしてしまったのである。

本来「性」は罪深いものでもなければ、恥ずべきものでもない。長い間抑え付けられてきた誤った観念から抜け出すことが先決で、「学習」はこのへんから始めるべきではないかと思う。異性との付き合いを、もっと自由に進めたい。一緒に居る機会をもつように努力する。こんな日常的なことによって、道は開けてくるであろう。

真面目な経理係長を誰が嗤うことが出来ようか。学習が足りないなどと、高みから見下ろしたようなことはとてもいえない。わたしなら敬意を表したいくらいだ。それはまずこれだけ一人の女性に夢中になったことに対する敬意である。片思いして、愛しきったことは、そのことによって彼自身救いになることを祈りたい。そして五億円の金を世の中にばら撒くことによって、世の中の金回りに貢献したことを認めるべきだと思う。「個人の悪徳は集団の美德である」という経済の根本原則からすれば、彼のやったことは社会的には美德といえる。

と、こんな言い分は屁理屈の類から遠くないと思われるであろう。じつはあまり自信もない。しかし本音でもある。このサラリーマンには親近感をもちこそすれ、嗤う気にはとてもなれない。彼を含め孤独な男

性諸氏にそっと耳打ちしたい。あなたの職場にも、もろもろの行き先にも、「お気に入り」の女性は居るはずだ。「あぁいいな」と思う女性、それらの女性に接近する努力を怠るべきではない。そしてしだいに言葉を交わすようになる。お茶に誘い、食事をともにして、だんだんと仲良しになる。さらに・・・という関係を育ててゆく。こうした日常にこそ本当の人間関係の基本がある。そんな女性の友達がいつも複数居るようにしたいものだ。なんと愉しいことではないか。

そんな異性関係は、いつもあっていい。すなわち年齢に関係なく、老いてなお盛んであるべきだ。それは罪深いことでもなければ、恥ずべきことでもない。複数の異性といつでも付き合っているということがもっとも自然であり、人間の摂理にかなっている。なぜ複数が必要か。一人の異性とのみ付き合っていると、その関係がうまく行かなくなってきたとき、立ち直るのが困難だからだ。一人の女性だけだったから、五億円も貢ぐことになってしまったのだ。何人かの親しい女友達が居れば、冷静になれたはずである。われわれが学習すべきは、その辺にひとつの出発点があると思う。

さて以上は男性について書いてきた。ところがラジオの「人生相談」という番組を聴いていたら、同じようなことが女性にもあることの実例が出てきた。主婦で五十歳、子育てが終わっている。この人が出会い系サイトで知り合った男性に六百万円貢いでしまったけれど取り戻せるか、という相談だった。最初に送ったのは五千円だったという。貸してほしいという言葉にしだいにエスカレートして、一年も経たないうちに気がついてみたら六百万円になっていた。返してほしいといったら、破産してしまって返せないといわれた。人生相談の回答者の答えは、取り戻すのは困難というものだった。

この女性は相手の男に一度も逢っていない。それでこれだけ燃え上がってしまったのだ。「寂しかった」とその動機を語った。再婚で子供を連れて行ったという。ご主人に申し訳なくて、と消え入らんばかりの声を出した。ご主人は「いいよ」といつてくれたという。情報はこれしかないけれど、やはり女も同じなのだということを改めて思い知らされた。女も寂しい、求めに応じて金をつぎ込んでしまう。一度金を使ったら、その先は夢中になって、気づいたら逢ったこともない男に大金をはたいていた。最初が五千円だったというあたりに、人の心理の面白さがある。

この女性は、街中ですれ違うと目立つ女かもしれない。なんとなくそんな気がする。人並み以上の器量をもって、人のいい、少し粗忽で、といったいわゆる「可愛い女」を想像する。ご主人も「いいよ」と許したのだから、それだけの魅力をもった女なのだろう。五十歳というところに、ある哀しみを感じず。男の性欲のもっとも旺盛なのは十代の後半とすれば、女の性欲が盛んになるのは三十歳を過ぎてからで、三十五歳でピークに達するといわれている。それから十年間が最高で、それからしだいに下がってくるらしい。五十歳といえばまだまだお盛んな年頃である。ところがご主人のほうは、その気が途絶えがちになるころだ。まだまだ器量も若さも残っていると思うと、じっとしていられなくなる。最後の花を咲かせたいという思いが、ますますその欲望を大きくしてしまう。間もなく来る更年期障害とやらを考えると、今こそ花を咲かせたいと思うのは自然なことだろう。そんな思いはじつは六十歳を過ぎても、七十歳を過ぎても変わらない。男も女も恋に年齢制限はない。ただ女性は世間体という抑制が男以上に効いていることと、基本的に受身なのだ。

女はいくつになっても、「女」である。みな寂しいのだ。男に言い寄られたい。男に口説かれて生き生きとして綺麗になりたい。ということは男ならいつでも、女たちと仲良しになれるということだ。男は女に近づいてゆくことこそ肝要なれ。その努力を怠ってはならない。一度しかない人生、大きな果実を実らせたいものだ。いつまでも瑞々しくあるには、恋心をもち続けることだ。おせっかいな健康法などどうでもいい。われら異性と如何に賢く付き合っていくか、これこそ永遠にして高貴なテーマとして学習を怠ってはならない。(完)

戦争

戦争の話に入ります。事件や逸話には触れずに置き、戦争が全ての人々に損害を与えた観念のドラマだけを考察したいと思います。それは私には激しく耐え難くもありました。死の歌が家々に鳴り響いた時から、私は血を知覚しました。恐怖と勇気の両方を一緒に知りました。そうして最初の数日は、私が自分だけの帝国を失った日々です。私は最早恐怖しかありませんでしたが、長続きする筈もありませんでした。幸いにも私が同時代の人々と同じ様に、旧兵役法と新兵役法のどちらかを選ばなければならなかった時も、そして私には永久に免除されていた大学の兵役志願を望んだ時も、私は戦争になれば隊列に復帰することを私自身で誓っていました。迷いはありませんでした。全ては体力が残っているかにかかっていた。かくして私は四六歳の時に、軍医の検診を受けて重砲兵になりました。重砲隊（九五ミリ砲）は軽砲隊にもなっていて、ウーヴルからシャンパーニュへ、ウーヴルからヴェルダンへも移動しましたが、その間は眼前に毎日危険が伴っていました。ところで私は三年間の軍隊生活で、二つの部隊を見ました。最後に私は、ここに残って軍務に没頭しようと考えていました。熟考する時間さえも無く、休息の時間には直ぐに深い眠りに襲われました。そこで私は仕事を覚えまし、それと同時に絶望も癒えました。その後、四か月頃経って、私は奇妙な夢から目覚めて、私の慎重さによって自分を救うことが出来ると思い始めました。その時に私は思考することを再開したのですが、辛さはありませんでした。そうして私は、身を委ねていたこの恐ろしい権力の閃光しか感じませんでした。しかしその時から私は観察して、目撃者として思考しました。私は多くのことを学びました。プラトンは『国家』の中で、賢者は真の知識の中で迷う儘にして置いてはならず、仲間が残る洞窟の中で力を取り戻さなければならない、と言っています。私はこの観念に従って々考えましたが、あらゆる種類の理論家たちは彼らの年齢に応じて、何らかの命令を行使して遠くへ冒険に出掛けたりすることを生涯に何回も行うなら、多くのものを手に入れることでしょう。私も二六歳の時に、学生に与えられていた世界一周旅行の給費を申請した思い出があります。大変に賢明な大学当局は、私が今の地位で大いに役立っていることを理解させてくれました。その旅行は、役立っていなかった人々しか認めていなかったのです。私が少しも退屈していなかったのは本当です。しかしながら、大冒険の話が来て、都合良く私の心を大きく揺すぶったのです。そして幸いにも、それは決して私の年齢に適した命令になりませんでした。この様に私は、自己を保身したりしませんでした。私は迅速に聡明に働きました。そうして気付いたことの一つは、私が大変良く行えることを人々は何時も私に頼んでいたのです。ですから私は平然としていました。別のやり方で平然さを取り戻す方法などは、私には分かりません。私は束の間の不平や怒りは放って置きました。道徳的判断も放って置きました。そのことは全て書きまし、そのことは余り考えたくありません。しかし、戦争で何を学んだのでしょうか。それが問題です。

私は命令を理解しました。何故なら私が所属していた上官たちは、々無知で怠け者でしたが、少なくとも命令する術は心得ていたからです。それが彼らの勉強であり、彼らの力であり、彼らの任務であることを私は理解しました。絶対的権利を行使すること、希望を奪うこと、犬のように彼らの怒りを放すこと、そして同時に覚えて察すること、沢山のことを知らずにいること、多くのことを黙認すること、そして特に実行の場には余り近付かないことです。何故なら彼らの決断が鈍くなって仕舞うからです。これらの様々な悪知恵を、仕立て屋や料理人の給料計算や細々とした管理方法に結びつけて下さい。あなたは下級将校たちの考えが分かります。彼らにとって射撃の調整は、気晴らしに過ぎません。そして勇気に関しては将校も一兵卒も、全員が不平等であったという意味においては全員が平等でした。称賛すべき感動も、恥ずべ

き動もありました。誰も自分を自慢しませんし、軽蔑もしないことになります。私は、それらの観察したことを全て書き留めて、信頼出来る人の手許に隠して置きました。こうして私が『マルス』を書き始めたのは、一九一五年の初め頃であると言っても間違った話ではありません。しかしながら、この著作についての私の記憶には依然として混乱があります。というのも、多くの章は戦後に書いたということを認めることが出来るからです。そうして戦争の喧噪と泥の中で書いて残したものを、その儘幾らかでも引用することは殆ど出来ませんでした。私はその多くを変えたり訂正したりしましたが、驚くことではありません。しかし訂正する方法は、何時も同じでした。書き足すか、多くは最初から再び書き始めて書き換えました。それは趣味と言うよりも寧ろ性分で、そういうものと自分でも当然と思っていることです。兎に角、冒険の後でも私が絶えず書いていたのは事実です。それが私の楽しみでした。

戦場で人間を見ると美しかったです。私は人間と呼ばれている者を理解しました。人間たちと呼ばれている者たちです。彼らは何も信じていませんでした。自分たちの仕事を行っていましたが、危険の中では更に一段と極めて綿密に行っていました。砲兵としての仕事は照準を合わせることです。一人ひとりに役割があります。最も恐ろしい場面になる時でさえも、怖がっている時間はありません。私は、より職人仕事である電話を特に覚えました。そして物理学の知識を持っていたために私は、親方になることもありました。電話線や装置の修理においては熟練者になりました。私は、当時存在していた全ての装置を知っていたと思います。驚く程に私は熱中しました。ところで物理学以前の私の勉強が輝かしく、素早く私の役に立った一例を次に書きたいと思います。

当初の各電話局は、地面に銃剣を立てて所謂アースを接地させていました。ところがアースに隣接する電話局が、そのアースから伝達されたのは一人の声ではなく、三人の声が聞こえてくるようなことが起きました。理工科学校を卒業した専門家がやって来て、各電話局のアースをお互いにもっと遠くに離すように命じました。その状態から分かったのは、長時間の仕事と電話線を多く使用することばかりでした。時間が足りませんでした。勇敢で立派な実際家の下士官が私に言いました。どうすれば良いだろうか。私は少し考えて言いました、「全てのアースを一本の優れたものにまとめなければなりません。そうすれば、接地による混線はなくなるでしょう」。彼はびっくりしていました。ところが私が言ったように行いました。すると翌日からは混乱は全てなくなりました。理工科学校卒業生が言ったことを私は無視したのです。私が名付けたこの単一式アースは、至る所で急速に使われました。しかし注意して貰いたいのですが、単一式アースは都市の電話局なら何処にでもあったと電話局員なら言えたことでしょう。私は、ずっと以前から知られていたことを発見しただけでした。しかし、それで話は終わりませんでした。それから一年後に別の所で、私には全く見知らぬ理工科学校卒業生が電話線装置を私に運ばせましたが、それは敷設の準備でした。彼は私に言いました、「当然、単一式アースだ。理由は分からないが、それで上手く行く」。私は泥だらけの砲兵伍長でしたのに迂闊にも、理由なら大変良く分かっています、と言って仕舞いました。すると非常に侮辱的で、屈辱的に罵倒されて思い通りやられて仕舞いました。戦場では決して言い返してはいけません。直ぐに殺されるに違いありません。しかし、この情熱的哲学には驚いて下さい。

まあ、私は秘密の物理学を思い出し、全く合理的であることを認めました。電氣的伝達を、ポンプの圧力で送り出される水圧の伝達と比べながら私は、水を汲み出す水槽をアースと考えました。すると何本ものパイプで繋がっている幾つもの水槽は、ポンプの圧力が水圧の変化によってお互いに伝わって行くのが私にはかなり良く分かりました。ところが単一の水槽で、しかも大きければその影響は確実に弱くなるだろうと思いました。真実の推論がそうであるように、その推論もごちないものでした。こうして私は、理工科学校卒業生たちに対して勇気を持つようになりました。

私は政治も知りましたが、終わりの無い思考の中で迷うばかりでした。私の戦友たちというのは、鉄工や木工の労働者たちとか、土方とか農民でした。彼らとは大変自由に臆面もなく何でも話しました。可能

であるなら脱走するのも大変簡単であると思っていました。彼らはやはり勇敢ですが、注意深かったです。ところが私は、社会主義者の人間には一度も会いませんでした。私は何度も、全く高尚なことを良く思考しました。それで私はレイモン・ポワンカレ（1）を厳しく批判しました。でも、ジョゼフ・カイヨー（2）を評価しようとしていました。結局のところ私は相変わらず、急進的な自分の本領を発揮していました。そして他方では物理学の問題でも、戦術の問題でさえも、彼らにとっての権威者でした。それにも拘わらず私の全ての政治的発言は、非常に冷淡に受け取られていました。私は、秩序の維持と呼んでいたものに一度ならず触れたことを認めました。私は気付きましたが、彼らは実際の思想を何も変えないことを誓っていたのであり、彼らが自分に与えていた自由は戯れに過ぎませんでした。しかし私は、彼ら戦友たちがもっと奥深くそして自省しているのを理解しました。彼らは自分たちの自由を行使するのを良く望んでいましたが、もっと遠くへ引っ張って行くことは望んでいませんでした。議論でいくら勝っても、大変に空しいことを私が理解したのはこの時です。というも人はその議論の時が来ても、只見るだけで、全ての門戸を閉じて仕舞うからです。それでも注目すべきことは、この不信には完全な信頼も伴っていたのです。私は々将校と、気晴らしのために一緒にいる時間をかなり長く過ごしました。それでも告げ口をしていると疑われることは一度もありませんでした。この種のことは何処にでもあることと考えられていました。

私と知り合いになった将校たちからの待遇は良かったです。良すぎる位でした。一番近づきになった将校は、頭は良かったのですが恐ろしく気難しい人間でした。私はこっそりと、プラトンとディオニュシオスの喜劇を演じていました。私は彼のことで不平を言う筋合いではなかったのですが、頑固で嫉妬深い権力に同意することは出来ませんでした。そんなことで冷たい霧のようなものが生まれましたが、彼は退屈して私の処へ戻って来ました。又、他方では仕事になると私は、将校たちから遠く離れて見ていました。例えば、チェスの勝負には誠心誠意に心を込めて行っている、一兵卒など絶対に勘定に入れない権力の濫用に私は何時も気付いていました。そして彼らとの関係は沢山計画したにもかかわらず、全て失敗しました。私は多分、厳しすぎたのです。戦争という状況は、暴力的気分と人間性の忘却が必要なのです。しかし、命令の諸定理を私が発見するにつれて次第に精神が前もって殺戮されて行き、更にもっと醜い戦争を見ました。私は常にそこにおります。止まることが出来ないと良く感じる、まさにそこにおります。当時の私は、特に未来が恐ろしい程に困難なものに見えました。

それらの困難な関係も用心深さも、殆ど存在しなくなりました。戦争が軍隊の伝統に従って、命令で動くにつれて次第にそれらは重要でなくなって来ました。電話交換手たちも自分の仕事を覚えました。機械も最早、不可解なものを出さなくなりました。私は伍長でしたので、監視所と戦場を確認するために、電話線に沿って走り回る時間が与えられていました。お陰で例外的に、口うるさい上官に捕まることはありませんでした。それは穴の中に泊まる猟師のような生活でした。何時でも出発して、夜も昼も一年中戦場に住みながら、慎重で、時間を選び、露の時刻つまり戦争自体が眠っている時に電話線に伝って行き、兎や鶉を起し、雑嚢には経理部から貰ったグリユイエール・チーズと鰯のオリーブ油漬けが入っています。私には、例えば下士官でしたが袖の金モールのことなど考えないで良い、得がたい友人がおりました。二人は良く班を時々引き連れて、電柱を立てたり、電話線を延ばしに行きましたが、何日もの間命令を一つも受けずに過ごしました。人間で一杯のこの戦場も、砂漠のように見えました。至る所に塹壕があり、そこから親しい顔や見知らぬ顔が覗いていました。私には、見知らぬ兵士が持っているものの全てを与えてくれますし、何回も塹壕の中でのいる場所を与えてくれたことは忘れられませんでした。その代わりに顔見知りの連中は、自分たちの権利とか相手の権利のことを考えているのです。君たちを食べさせなくてはいけない料理人は、ビーフステーキやフライドポテトまで見付けていましたが、交渉が必要です。見知らぬ料理人は、君たちをホメロス風に歓待してくれます。お礼はお話をする事です。私は、植民地軍の料理人を相手にして喜ばせて上げたお陰で、チーズやコーヒーや極上のブランデーも一杯飲ませて貰いました。

彼は、料理人としての理屈で結論付けて言いました、「手に入るだろうよ」。私は彼に言いました、「では、手に入ったら人は何をしますか」。彼はこの新しい文句を繰り返しながら、自分の両腿を叩いていました。一九三五年の今日でも、今なお新鮮に聞こえて来ます。

それらは兵隊の言葉でした。人は完全に兵隊になります。最早、窮屈になりません。最早、驚きません。人はその人間を見ます。常に勿体ぶっています。驚くべき観察者になり、大空と大地の全てを知り、トロイの攻囲戦のために十年間も船に乗っているのです。時々苦しくなり反抗的になりますが、ソーセージと葡萄酒で上機嫌に戻ります。何処にでも住み着き、可能となれば現地で生活します。私は時々、馬の御者の所へ材木を取りに行きましたが、彼らには感嘆しました。何時も鹿料理を頂戴しましたが、まるで彼らは鹿を飼って育てているかのようでした。ある時、軍司令部に小さな猪を持って行くことが流行りました。私たちの監視所に来た司令部の伝令たちは（一頭十フランで）申し込んでばかりいました。そして三時間後には二頭の小さな猪を連れて行きました。動物を連れてきた者たちが、部隊を取り巻いていました。子供の猪を連れて行かれた雌の猪のお決まりの怒りは、少なくとも問題にされませんでした。お分かりでしょうが、私はこの三年間で、人間の活動と真実と、同じ人間の魂胆を学びました。というのも自然との関係と、道具としての武器において、人間は地上の王であり、両足と両腕で支配しているのです。

人間が人間によって狩られるのは（それは私たちの状態でした）、少しも自然ではありません。人間はそこでも他の所と同じ様に行使する巧みさを誇張します。人間は既に一種の雄弁術に罹りやすくなっていて、々動作や、時として無言や、不動に出ます。そこでは神々や人間たちを呪うことが見られます。勇気への回帰があれば美しいです。それは人間を超えた尊厳によるからです。しかしながら私は、こめかみや目の縁に絶望の色を出していない兵士を一度も見ませんでした。しかし、それが何でしょうか。人は全てのことに態度を決めています。人間と事物に締め付けられて、次のような格言を実践しながら仕事へ赴きます。「他人にとって良いことは、自分にとっても良いことである」。「何故他人であって、私ではないのか」。私は、まさに人物と呼ばれている人間たちの中に、仕事に関する現実的な道徳を見ました。但し、法螺を吹く人物を私は一度も理解しませんでした。彼らは凡人に追従していたと言えます。この平等が彼らに神々を生んでいたのです。但し、彼ら以外には神々も〈神〉もおりませんでした。私は見たことを話しているのです。

求められもせず、急がされもしなかった当時の沈思黙考には、私が今でも見抜けない観念が現れ始めていました。私は何時でも、人間を信頼して良い理由を沢山見付けました。ここでは更により的確な理由を見付けました。私は、命令も脅しも無く全てのことが行われる、平等な者たちによる共和国が存在しているのを見ました。それと同時に三か月間、私は選抜された班に極めて広汎な権力を行使したこともありました。ところが私は命令することが何回かありましたが、単に礼儀上の愚かな問題を正すためでしかありませんでした（からかわないこと、侮辱的な渾名をつけないこと）。それは何でもないことでした。一方の上にもう一方が生活していたこの上下関係の環境において争いを宥めるに、私の年齢は全く十分な権威を与えていました。危険で草臥れさせる軍務に関しては教えるだけでした。班の最年少者が、単に伍長である私の署名を持って休養のために後方へ行ったことも私は思い出します。彼はナンシーまで行ったと私は思っています。二日遅れて帰還したのを私は知っていますが、言い訳を言うことも、非難することもありません。只、十二時間眠った後で彼は、他人の仕事にも手を出し始めました。私は、彼がもう少し遅れれば、彼にやらせなければならなかったのです。

そして私の考えはこうです。常に武装された怒りや、常に見せつけられる死への脅威は、人々を最前線へ追いやるために必要であるとは全く私は思いません。反対に、軍隊の秩序に責任を持つ将校が絶えず気を遣わなければならない危険とは恐怖ではなく、反抗であると思います。反抗は、何時も恥をかかせる命令という確実な方法の結果であると思います。それを細かく見てみましょう。恥をかかせられることは、単に

侮辱するとか、度々酷くからかうことではありません。確かに、その下劣な習慣は直ぐに全ての愛情や尊敬を消して仕舞います。でも、恥辱は脅迫的言動そのものの中により多くあるのです。それは自分の勇気で戦争というものに耐えている者を明らかに臆病者扱いすることに帰着します。この種の不正は決して忘れませんし、それは上官に認められている非人間的な権力が齎し、上官はそれに酔っています。権力は人間を墮落させる、と私は々考えました。私はそれを何回も見ましたし、上官たちを恥じました。この伝統は何処から来ているのか、私は理解しています。フリードリヒ大王の軍隊は徴兵官たちによって買われた奴隷たちの軍隊でした。上官たちは別種の人間でした。私は、そのような制度が生まれた感情を殆ど想像出来ません。古代ローマの円形闘技場の剣闘士にも名誉や団結心による競争がなかったのでしょうか。上官は殆ど何時もそこに戻ります。しかしながら私は、極めて礼儀正しく全てを身に付けていた二人の上官と知り合いになりました。注目すべきことに彼らは海軍から来た人で、黒い制服を着ていました。そして、海の中の船の上では説得力と、恐らく真の友情が必要であるのは明白です。しかし、一人の乗組員も逃げられないのも明白です。

非常に合理的な砲兵の仕事にもう一度戻りますが、それは人命救助者の仕事に似ています。しかしながら、戦場の先頭に行く歩兵隊は、もしも反抗のあるゆる観念や熟考の観念でさえも先ず消さなかったなら、砲火に晒されて絶望的な集団であっても押し進めることが出来るのでしょうか。進めることは出来ないとは私には言いたいです。しかし侵略戦争は又、全く残酷で私たちの道徳観念に反していると私には思えます。防衛のためであるなら、それは常に必要やむを得ないのですから、あなたには強制も脅しも必要ないでしょう。少なくとも教えることと罰することの方法は、根本的に変えなければならないと私は思います。ところが絶対的権力は数多くの人々に愛されていて、それを行使する全ての人々を多少なりとも墮落させます。それから私は思うのですが、侵略の教義とは根本的に権威の教義です。そして侵略とは、軍隊に守られて狂気になるまで自慢する非人間的な権力を真っ先に証明しているものです。それとは別の理性的な戦争がありますが、私はその詳細については十分に理解していません。何故なら、取分けその準備において人間の惰性と軽薄さを考慮に入れなければならないからです。私は恐らく、この理性的な戦争が何であるか認識すべきことに大して執着しません。そんなものは無いだろうと思っています。そうです、侵略の精神がその時至る所で追撃されて、あらゆる交渉や議論から追い払われるなら、平和になるだろうと信じます。というのも恨みや、安易に大袈裟に言う演説に陥れば、お互いに戦うための両者にならざるを得ないと私は思うからです。諸国民というものは、乱暴者や酔っ払いや狂人がいる個人のようなものではありません。諸国民は、平均的な人間性の法則によって規定されます。そして少しも脅威を与えない国民は、決して攻撃されません。しかし、私はここで政治の中の道に迷っています。私が二十年以来引っかかって来た問題は純粋に技術的なことです。防衛軍とは何か、あるいは単に国土防衛とは何でしょうか。問題はそこにあります。(完)

(1) レイモン・ポワンカレ (一八六〇～一九三四) は、対独強硬策を推進した大統領 (一九一三～二九) で、数学者のアンリ・ポワンカレの従弟。

(2) ジョゼフ・カイヨー (一八六三～一九四四) は、対独協調を主張した政治家で、蔵相を歴任した。大戦中に対独通牒の罪で投獄された。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲筑三（いずもつくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車 1000m タイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人 2000m 速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

北岡善寿（きたおかぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『榧』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

宿谷志郎（しゅくやしろう）

一九四七年東京都青梅市に生まれる。一九七〇年群馬県高崎市に転居。名曲喫茶「あすなろ」（催華国氏経営）を経てデザイン事務所に勤務。群馬交響楽団のPRを担当し演奏会のポスターをデザインする。一九七七年広告代理店を設立し医薬品、検査機器の広告をはじめ編集、イベントなどを手がける。トヨタ財団助成の「シビクトラストフォーラム」に参加。まちづくりのための資金づくりについて学ぶ。自治体学会創設に市民の立場で参加。一九八七年東京・青山に編集プロダクションを設立し主に書籍の制作。高村昌憲氏の「パープル」に関わり、一九九九年「風狂の会」に参加。大分県経済誌「アド経」に一年間エッセイを連載。明星大学教授・清宮義博氏の『花々の花粉の形態』などを出版。二〇一二年廃業。一年半の休養後、革工芸（革絵）を始める。現在、収集したカメラに着せる「カメラベスト（一枚の革）」を制作中。旅と地酒と人との出会いに憧れており、エッセイを年四回「風狂」に掲載したい。趣味はフルーツ。よく聴く音楽はバッハ、モーツァルトの作品。

神宮清志（じんぐうきよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面

も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「露」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。学生時代に同人誌「遡行」を発行。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九六年に個人誌「パープル」創刊（四〇号から電子書籍）、同年「風狂の会」会員になる。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（ブクログのpapier）に、随想集『アランと共に』、アラン作品の翻訳及び個人誌「パープル」などを登録中。日本詩人クラブ会員。

中平 耀（なかひらよう）

一九三〇年生まれ、群馬県出身。

詩集『吊るされた鳥』（思潮社・一九六一年）、『時の中の橋』（詩学社・一九七三年）、『樹・異界』（神無書房・一九八一年）、『花についての十五篇』（花神社・一九八六年）、『滑稽譚』（花神社・一九九二年）、『木』（花神社・一九九七年）。

訳詩『マンデリシュタームの詩』（集英社『世界の文学 15・ロシア』・一九九〇年）、詩評論『マンデリシュターム読本』（群像社・二〇〇二年）。二〇〇二年、『マンデリシュターム読本』により第四回小野十三郎賞特別賞。

これからしたいことは、集大成した詩集を出すこと。

なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

樺自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）等。現在短編小説集『永遠の、地上の（仮題）』刊行準備中。典型的な「ウルトラマン世代」の「怪獣少年」で、齡知命に達した今もなお、心のどこかがその永遠の「神話」の森を彷徨い続けている。十代後半から二十代前半にかけてカルト的な宗教活動に没頭。その後フロイト、ユング、ラカン等の精神分析家の著作に傾倒し、一時は専門の心理臨床家を志したこともある。好きな書き手は J.G. バラード、M. ピーク、尾崎翠、埴谷雄高等。絵画ならダリ、デルヴォ

一、バーン＝ジョーンズ、音楽ならドヴェツシー、ラヴェル、セロニアス・モンク等に魅かれる。日本詩人クラブ、日本短歌協会会員。

三浦逸雄（みうらいつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークル Circro de bellas artes で人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。

一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。二〇一六年は京都での作品発表を予定している。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう)
2015 年版下半期 (12 号～17 号・合併号)
<http://p.booklog.jp/book/90237>

編集：風狂の会 (担当：高村昌憲)
編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/90237>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/90237>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ